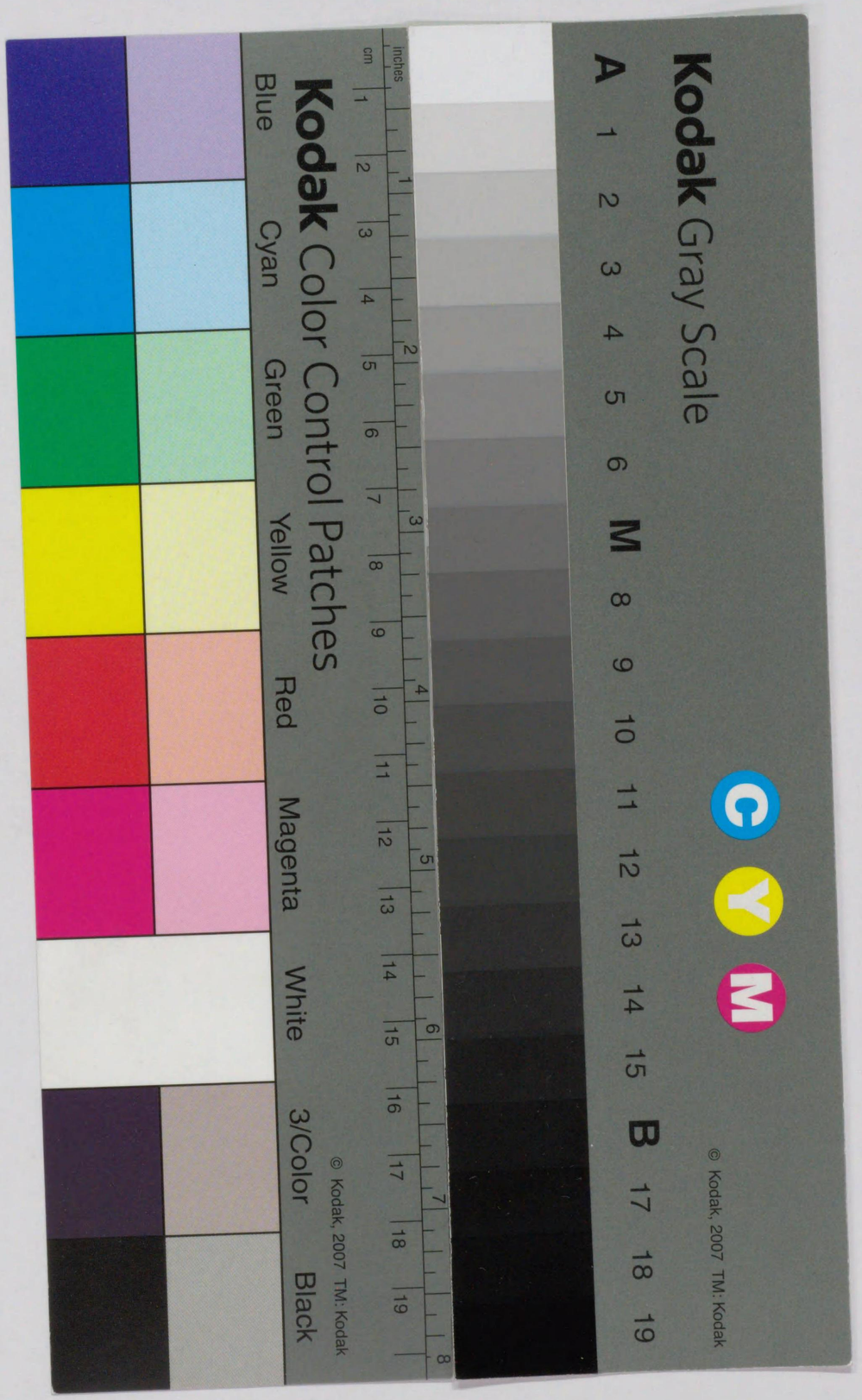
系大學美スプツリ

第二分册

物然自と間人

稲垣末松全譯

東京同文館藏版



スプッリ

美學大系

第二分冊

人間と自然物

稲垣末松全譯

東京 株式會社 同文館藏版

昭和三年 内務

563-81イ

目次

第一章　感情移入の問題に對する序論……二三五

一　自己價値の感情(二三五)　二　活動に對する快感(二三七)　三　快感と受働性(二三〇)　四　客觀化されたる自己價値の感情(二三二)　五　人間の身體、その整正といふ元素(二三四)　六　情緒上の音聲に對する「感情移入」(二三七)

第二章　表出運動と感情移入……一四〇

一　表出運動(一四〇)　二　表出運動に對する快感の條件としての感情移入(一四二)　三　感情移入作用の起源、之に關する排斥すべき說明(一四七)　四　摸倣作用(一五〇)　五　本能行爲としての摸倣作用(一五二)　六　摸倣と感情移入作用(一五七)　七　純粹なる感情移入作用の可能(一六一)　八　感情移入作用と知力的理解(一六四)

第三章　「感情移入作用」に對する補說……一六六

一　「摸倣」と「內部的行爲」(一六六)　二　感情移入作用と運動感覺(一七〇)　三　感情移入作用の最終の內容(一七二)　四　感情移入作用に對する經驗の關與(一七七)　五　同情的感情移入作用と消極的感情移入作用(一八三)　六　美的「象徵」(一八四)

第四章　人間身體の靜止的の形……一八五

一　表出運動と靜止的の形(一八五)　二　「運動可能」の感じ込み(一八八)　三　感情移入作用の以上の外の可能感情移入作用と性慾本能(一九三)　四　經驗を假りての感情移入作用の完成(一九八)　五　人間身體の統一體(二〇二)　六　右の言明を立證する諸種の經驗(二〇二)

目次

第五章　自然に對する感情移入作用への移行……二〇四
一　美的價値(二〇四)　二　動物界への感情移入作用(二〇九)　三　無生物の「生活發現」(二一一)　四　人間化の衝動(二一三)　五　自儘なる人間化作用と感情移入作用との差異(二一六)　六　自然への感情移入作用の說明根據としての類似性(二一九)
第六章　自然力……二二一
一　感情移入作用の內容としての自然力(二二一)　二　自然力と抵抗感情(二二三)　三　單に觀照された抵抗感情(二二七)　四　抵抗感情の感じ込みの特殊性(二三〇)　五　自然への感情移入作用と因果律(二三三)　六　感情移入をされた「力」と表象された「力」(二三九)
第七章　自然形への感情移入作用の最終の根據……二四〇
一　統覺的運動としての因果的思惟(二四〇)　二　一般の統覺的運動の感じ込み(二四五)　三　一般的感情移入作用と特殊的感情移入作用(二四八)
第八章　自然界に於ける統一體と自由……二五四
一　感情移入作用と統一體(二五四)　二　感情移入作用と「事物」(二五七)　三　感情移入作用と一般の美的形式原理(二六〇)　四　自然的個體の統一性(二六六)　五　自然界に於ける合法性と「自由」(二六九)
第九章　自然への感情移入作用に對する補說……二七一
一　自然物の「意表」(二七一)　二　整形されない集塊(二七二)　三　諸種の「元素」(二七三)　四　下等感覺の美的低價(二七五)　五　下等感覽の內容への感情移入作用の可能(二七九)　六　下等感官の表象された感覺(二八三)　七　美的事物と吾人の「有機感覺」(二八五)　八　「氣分」と氣分的感情(二八八)　九　自然界に於ける氣分(二九二)

第二篇　人間と自然物

第一章　感情移入の問題に對する序論

一　自己價値の感情

前篇に於て「美的形式原理」を論述する際には、吾人は主として感官的のもの〻形式、卽ち感官的に知覺さるる所の空間形式の事に就いて思念して居つた。此の結果、美的內容、卽ち形式の中に於て發表せらるべくある所の生活といふものには、唯時々一緒に取上げたか、又は各個の叙述中に於て之を前提して居つたのである。けれども美的形式原理なるものは、感官的形式の單なる原理ではない。けだし美的事物に於ては、感官的のものは常に何等かの精神的內容の象徵となつて居る。卽ち之は活躍し靈化されてある。して又、正しく此の如くある事により、之が一の美的事物ともなれば又美的價値の帶有者ともなるのである。

さうして彼れが如き精神的內容も亦その形式を有するのであつて、且つ一般の美的形式原理なるものは、かゝる形式に關涉をなすのである。否之を推詰めると、此の原理は、かゝる形式のみに關涉をなし、さうして之に適用せらるゝ事により、始めてその固有の意義を取得するのである。

そこで吾人が今茲に提起すべくある第一の問題は、かゝる「精神的內容」とは如何なるものであるかといふ事で

ある。

かの種々の空間的の形や、色や音も、それが吾人により知覺せらるゝ限りに於ては、精神的內容である。けれども吾人が感官的のものに對立せしめて「精神的內容」といふ時には、吾人は勿論此等のものを意味せしめない。之に反し吾人は精神の生活活動の仕方の事を意味せしむるのである。

されど又、之丈の說明では未だ十分しない。成程知覺された空間的の形とか色とか音とかは、精神の生活活動と呼ぶ事は能きない。けれども此等の知覺をば斯かゝる活動と呼ぶ事は能きる。それで、玆に意味せしめられてある所の生活活動といふものにして、此等のものから區別さるべくあるならば、吾人は之をより精密に解說して、之をば、吾人の行爲の仕方、吾人が體驗する所のものに於て如何に吾人が、吾人自らの內部的本質を活躍せしむるかの方法と云はうとするのである。

之を例へていふと、空間的の形とか色とか音とかは、吾人に與へられてある。卽ち偶發物或は出來事である。之に對しては、先第一に、吾人の行爲、或は吾人の內部的能働性といふものは、異なりたる或るものとして判明に存立するのである。

此の種の偶發物或は出來事に就いては、吾人は曾て述べた事がある。それは、此等を體驗する事が、一の「自己活動」である限りに於て此等が快感的のものである。換言すれば、此等に對する「遂行」、卽ち此等を統覺する事により精神の本性が滿足せしめらるゝ限りに於て、此等が快感的のものであると。そこで今や瞭知せらるゝのである。之が正しく吾人の行爲、吾人の意志及び遂行であり、隨つて吾人に强制をされなく、之に反し吾人から發する限りに於て、吾人の行爲中に於て、いつでも吾人の本性、或は吾人の本質が表明せらるゝといふ事を、さうして又、此の如くあるが爲に、此の行爲が正しく吾人の行爲となり、かくて吾人に强制された吾人の內の現象から區別せらるゝに至るのである。

此等の次第であるが故に、吾人の行爲といふものは、いつでも快感の根據である。されど斯かる快感は、吾人の行爲に關する感情として、快感的の自己感情、或は簡言すれば自己價値の感情である。して又、前篇に於て述べた所の快感なるものは、是物象的の快感であつて、吾人は今之に對立する他の種類のものとして、此の自己價値の感情といふものを語るのである。

二　活動に對する快感

「各の行爲はそれ自身に於て自己價値の感情の依つて起る根據である」といふ命題は、之を轉倒して、「各の自己價値の感情は究極する所、一の行爲に關する感情である」といふ事が能きる。吾人は、吾人が有する所の性狀、吾人の力、能力、技倆等に對して快感を起す。けれども、此等の性狀、力、能力、技倆等は、吾人が、よしや單に試驗的にして、さうして全然思想に於てゞあるにもせよ、兎に角之を實現せしめて見なければ、表象したり想起したりする事の能きぬものである。換言すると、吾人は之若くはそれを爲すべき力を有するといふ事を知得する。卽ち吾人は先づそれを爲すといふ事を表象し、さうして吾人の思想に於て事實的にそれを爲す。吾人は、之に對しては、少くとも吾人の思想の中に於て、開始點を作成するのである。

されど、一切の行爲が快感的のものであるといふ一般的命題は、一の補説を要するのであつて、此の補説たるや、或る方法に於て同時に制限を加ふるものなのである。吾人は、かの「物象的の價値感情」を論究する際に知得したのであるが、快感の高さなるものは、その快感を起さしむる事物が、吾人を要求する程度によつて定まるものであるといふ事を。言ひ換へると、快感にして強度を取得しようとするならば、該快感を起さしむる事物が、強い印象性のものであつて、それを體驗する事が一の力を要するやうにあらねばならぬ。さうして尙此の外に、吾人は他の命題を附加せねばならぬ。それは、多様、分化といふ事も、亦快感の高さを增すものであるといふ事である。

此の如く快感を起さしむる事物の強い印象性と多様といふ事との二つの動力は、玆にいふ自己價値の感情に對しても亦大なる影響を及ぼすものである。卽ち自己價値の感情も亦、一方に於ては行爲の力、或は內部的能働性の高さ、他方に於てはそれ等の豐富といふ事によつて、增强するのである。

されど、かの物象的のものに對する快感の根本的條件は統一といふものであつた。統一とは、先第一には、內部的一致次には一點に於ける凝結といふ事である。そこで之に對應して、此の自己價値の感情の根本的條件は、行爲が己れ自身の中に於て一致し、內部的能働性は統一點に集括せられ、且つ一切の行爲が一定の統一的目的の下に矛盾なく從屬し居るといふ事となるのである。

或は此等の言明を統括して見ると、「一切の自己價値の感情なるものは、吾人の行爲の力、豐富、廣さ、並に內部的自由に對する快感である。さうして此の內部的自由とは、吾人の行爲が、己れ自身の中に於て一致し統一されあるといふ事に外ならぬのである。

更に玆に語り居る所の行爲には多くの種類がある。その第一のものとしては、例へば吾人の知力的行動といふものを擧ぐる事が能きる。吾人は、吾人の思惟の强力なる働作、多種のものを精神的に了解し得べき能力に對して快感を起す。或は又、吾人は、吾人の精神的勞作の集中、その一點或は一つの目的中への統括といふものに對し、滿悅を表するのである。

次に、實利的目的に向注された行爲もある。かゝる行爲とは、實利的目的を意志しそれを實行するといふ事である。さうして之に對する快感の高さも亦、內部的行爲の力、その內容の豐富、行爲の己れ自身の中に於ける一致及び統一的目的の下へのその統括の如何によつて定まるのである。

最後に、次のやうな行爲もある。それは、一の對象の解得保持、知覺又は表象したるものに對しそれ自身の中に於て一致し隨つて內部的に自由なる向注、任意自在なる適用、能働的の穿鑿、吟味、統括と分員、進透、內部的領得及び統配等から成立するものなのである。

玆に及んで同時に明瞭になるのは、行爲といふものが如何に物象的の體驗と同行する事が能き、さうして時としてはより多く時としてはより少く同行するといふ事である。吾人に示與さるゝ所の事物は、吾人に快感を起さしむると同時に、吾人の自由なる解得保持、或は之に對する吾人の能力並に力强き献身等も、亦快感を起さしむる。結局する所、之は、解得献身の力と自由とから成立する所の享樂的能力に對する快感たるのである。

三　快感と受働性

能働性には受働性が對立し、行爲には堪忍（Erleiden）が對立する。實際に於て、行爲に全然たる反對に立つ所の堪忍があれば、又能働性の單なる否定である所の受働性もある。されど又、世には、他の種類の堪忍がある。即ち堪忍なるものは、堪忍といふ性質を失ふ事なしに、一の行爲或は能働性を己れ自身の中に包有し得るのである。

更に此のやうな種類の堪忍は三種に區別する事が能きる。

第一には、吾人は堪忍する。けれども堪忍中に於て支持し、之に對して抵抗し、都合によると終に之を打破する事がある。かゝる場合に於ける能働性は、是純粹のものであつて、正しく堪忍に對して向注された能働性たるのである。

第二には、高度に甘受され居る堪忍であつて、即ち能働性を帶ぶる所の堪忍の能力である。一體堪忍の力なるものは、時とすると微弱であつて、己れ自らを主張することの能きぬ事がある。けれども此の高度に甘受され居る堪忍なるものは、此の如き堪忍とは異なつて居つて、たゞ健全活潑にして力强き感動性を有する者のみが爲し得るものである。遲緩、無氣力、柔弱なる者等は、得て經驗し能はざるものである。かゝる堪忍に於ては、正しく右の健全と强力と感動性とが表現されて居る。

本來堪忍の感情なるものは、吾人に進來する所のものと、吾人の本性が要求する所のものとの間の反對から起るのである。此の故に、之は、吾人に進來する所のものゝ力が增すに連れて、その强度を增すものである。されど他方に於ては、吾人の本性の右の如き要求の力、即ち自己主張、或は吾人の本性が進向する所のものゝ主張の勢力と活氣とに應じても、亦增すのである。さうしてかの能働性といふ動力は、實に此の如くある事の中に存するのである。之は、堪忍そのものゝ中に、人格的價値の可感的要素、即ち力と偉大といふ要素を附與するものなのである。

最後に、受働性の第三種のものとして擧ぐべきは、屈伏（Nachgeben）といふものである。蓋し受働性なるものは、屈服とも解釋され得るのであつて、かゝる屈服は、若しもそれが單なる屈從又は潰滅となるならば、不快感を起さしむる。けれども又、世には、自由にして隨つて能働的なる屈服といふものもある。詳しくいふと、それは、或る點迄は讓步し、それからその點に於て益〻强く固持するといふ屈服であつて、簡言すれば彈力性の屈服である。一體彈力性といふものゝ特質は、外部からの影響に屈服し、それかと云うて正しく之によりその內部的緊張を增加するといふ點にあるのである。此のやうな受働性の中にも、能働性は存するのであつて、之も亦快感を起さしむる。

自己の人格の價値的のものを表現する所の感情、即ち「自己價値の感情」に對しては、種々の名稱が附與される。吾人は右に區別した動力の中の、甲若くは乙が優勢なるに隨つて、力の感情、內部的豐富の感情、自由の感情と稱するのである。いふ所の尊大の感情なるものは、此の感情の別名稱である。かの忿怒の感情の中にも、その忿怒の能働性の程度に應じて、大なり小なりの自己價値の感情が存する。更に强情並に强情的自己主張の感情

も此の中に屬するのである。

四　客觀化されたる自己價値の感情

右の如く述べ來るとはいふものゝ、美的價値なるものは、吾人によつて感ぜられたる吾人自己の價値ではない。之に反し、之はいつでも、吾人と異なり居る所の事物といふものゝ價値である。されどその此の如くあるといふ事は、前項に於て述べた事柄が、美的價値を確定するに就いて直接の意義を有するといふ事を妨げない。

先第一に言明すべきは、吾人が吾人に於て價値づける所のものをば、吾人は他の個人に於て發見する時にも、亦價値づけ、而も同樣の方法に於て價値づけるといふ事である。かくて吾人に取つては、他の個人がある所の一切のもの、卽ち彼れの本質中の一切の積極的である所のものは、有價である。さうして此の種の積極的のものゝ」は、各の能働性、並にかゝる能働性の各の可能を意味するのであつて、此等は、その中に存する所の力、豐富、それ自身の中に於ける內部的一致、並に全人格との內部的一致等の程度に應じて、それ〴〵有價であるのである。

して又、此の如く言明すると共に、本章の始めに於て述べた所の「精神的內容」の甲の種類は說示されたのである。されど之に對して、吾人は乙の種類を附加せねばならぬ。卽ち行爲或は能働性の外に、十分なる自己活動といふ事を加ふべくある。此の如くある結果、他の人格に於て、啻に行爲或は能働性が、吾人に對し價値を有するのみならず、更に、各の物象的の體驗、各の出來事、遭逢は、單にそれ自身としてゞはなく、之に反し此等の體驗をなす中に於て、殊にそれが如何に體驗せらるゝかの方法、卽ち他の人格が此等の出來事に對して如何に己れを處するかの方法中に於て、積極的のもの、力、豐富、己れ自身との一致等が、それ〴〵表現發揮せられ、隨つて此等の物象的の體驗に對して彼れが反動し、之に內部的に對抗する限りに於ては、亦價値を有するのである。此の如くあるから、その、行爲により表明せらるゝが如き他の人格がある所のものが、吾人に取りて有價であるのみならず、更にその快感、歡樂、その享樂の各の方法とても、此等の中に於てその人格の本質中に於ける積極的の或るものが表明せらるゝ限りに於ては、有價である。更に他方に於ては、その不快感、苦惱、悲痛も、此等の中に於て、潰亂に反抗する力、能力、簡言すれば人格の積極的要素が表明せらるゝ程度に於て有價である。さうして此の後種の有價のものに關しては、吾人は前既に根本に於ける叙述をなしたのである。

玆に述ぶるやうな「精神的內容」の積極的評價作用の相互に反對せる二つの可能は、結局する所、次のやうに一句に於て統括する事が能きる。曰く、吾人の積極的評價の對象たるものは、各の生活並に各の生活可能である詳しくいふと、かゝる生活が現實的にして積極的生活であり、さうして生活又は生活可能の否定、缺損、無力、又は無力の證徵等でないといふ事であると。更に又、之に對して直に附說すべきは、以上のやうな生活の各の否定は無價値であるといふ事である。

ところが又、此の如く述ぶると共に、一切の美の意義といふものは說示せらるゝのである。卽ち美の一切の享樂なるものは、一の事物中に存する所の活躍性並に生活可能を印象する事であり、一切の醜とは、その最終の本質上からすると、生活の否定、生活の缺損、妨害、萎縮、潰亂、死滅等であるのである。

五　人間の身體、その「整正」といふ元素

今茲には、上述の命題の正當なる所以を述べ、併せてそれをより詳密に叙說して見よう。吾人は之に就いては、精神的內容、或は今いうたやうに、生活並に生活可能上の中味を最も直接に表明するといふ美なる事物を以て始むる事にしよう。

此の種の事物とは、吾人の感官に提示さるゝが如き人間である。人間は、人間に對しては、可觀的事物中の最美のものであり、又同時に最醜のものである。

併し此の事に立入つて攻究する前に、先づ簡潔なる序說をなさう。曰く、人間は自然事物中に屬する。隨つて自然事物の美の一般的條件は、人間に對しても成立すると。ところが之が故に、人によりては、かゝる自然事物を以て吾人が吾人の攻究を始むると思認する者があるかも知れぬ。

けれども此の如きは吾人の意圖ではない。之に反し吾人は直にその殊別性に於ける人間を取りて考察しようと思ふ。即ち吾人は、人間の身體の特殊的の美、並にその美を來す特殊の條件に就いて語らうと思ふ。さうして何が故に斯くなすかといふに、人間といふものゝ中には、一般の美を理解し得べき關鍵は包藏せられ、之から出發するならば、人間以外の自然事物の美が始めて理解し得らるゝからである。

右の如き意圖は以下の叙述に於て固執されねばならぬ。そこで、人間身體の美の特殊の條件に對し、一般の自然事物の美の二三の一般的條件を附加する事にする。けれども茲では今いうた通り、先づ人間身體の美の條件に就いて始めに述ぶる事にする。

抑も人間の「感官的顯現」なるものは、多種のものをその中に包含する。即ち一にはその言語、二には感官的發現をなす所の行爲、三にはその容貌、四には身體の形及び色である。凡て此等のものは、吾人に對して、價値、特に美的價値を有する。されど一の特殊の問題は、身體の形の美の中に存在する。

之を嚴密にいふと、人間の外部的顯現なるものは、それ自體として考察されて、美又は最高の美と見ゆる所の何物をも提供しない。成程世には、風采の「整正」なる容狀といふ事が語られる。けれども之は唯「規則」即ち中等の規準に合當する所の容狀といふものが意味せらるゝに過ぎない。隨つて、幾何學上の整正、即ち同一の元素又は部分の同樣的の復歸が存する所の容狀などが意味せらるゝのではない。尙右のやうな容狀の「整正」といふ事に就いては、後に立返つて述ぶる事にする。

けれども同時に又、人間の身體に於ては、幾何學的整正の元素が缺損しない。即ち顏面の兩半部は相互に均齊である。されど此の種の均齊から發生する所の快感なるものは、純粹にそれ自體として考察されるといふと、決して、任意の形のインキの汚點が、一の二等分線から均齊的に撒布せらるゝ時に生ずる快感以上のものではない。而も之は、かの萬花鏡の形像が示す所の總方面的の均齊から生ずる快感以下に位するのである。されどかく言明するに就いても、吾人はかのやうな汚點並に萬花鏡の形像に對する快感に於ても既に、感官的性質でない元素、即ち此等の中に存する所の「運動」といふものが一緒に働いて居るといふ事をば、假りに考察外に置いたのである。

次に、人間の身體に於ては、胴の兩半部の均齊、並に四肢の均齊的構成及び排列といふものがある。されど之に關しては、既に運動し居る身體に於ては、かゝる均齊が消滅せしめられたり、或は變動されたりするといふ事情が抗論を喚起する。蓋し此の種の變動された均齊からしては、たゞ次のやうな印象が發生する。それは、他の整正なる形の變動から發生するか、又は一の整正なる形を想起せしむる形とか、又は整正の要求をなすも、さり迚此の要求を滿足せしめないといふ形とかに附隨する所の印象なのである。之を換言すると、かゝる變動された均齊は、變動、屈折、曲解されたものに附隨する全然不快なる印象を發生せしむる。

さうして吾人にして、若しも身體の此の如く變動された均齊と顏面の兩半部の恒久的均齊とを合體するならば然る時には右の如き不快なる印象は顯著になる。即ち顏面の整正が益〻多く恒久的に存立すればする程、他の部分に於ける整正の消滅、變動、曲解等は、益〻多く不快感を起さしめざるを得ない。さうして人にして、かゝる斷言に對する確信を起さうとするならば、唯、例へば均齊的豐富に組立てられたる土瓶の如きものをば、右と同樣の方法に於て、一部分はその整正を保持せしめ、他の部分に於ては大なり小なりかゝる整正を變動せしめて見ればよい。

人間の身體に對しては、以上のやうな均齊の外に、尙他の外見上感官的の形そのものゝ中に存する所の美の（人間身體の）元素が、附加される。さうして此の如くして、身體の各個の部分の「同一關係」(Homologien)といふ事が語られる。例へていふと、腹部が胸部と同一關係に立ち、腕が足と同一關係に立つといふが如きである。けれども此のやうな同一關係といふ語は、全然、その實さうでない一致、即ち變動された一致といふものに對する響のよりよい語たるに過ぎない。此の如き變動された一致も、それ自體として考察されるといふと、亦不快感を起さしむるのである。

或は又、世に、黃金截斷（黃金截斷の事に就いては前を見よ）の關係に基く人間身體の自稱的分員といふものが語られる。即ち頭を除く上體の長さは、下體の長さに對し、ちやうど下體の長さが胴全體の長さに對するが如き關係に立つといふのである。更に下つては、頭の長さは、上體の長さに對し、上體の長さが、頭及び上體を合せたるものゝ長さに對する關係に立つといふのである。けれども凡て此の種の陳述は、全然、次のやうな明白なる一般的眞理に對する證明を供與する。曰く、人間の身體のやうな、豐富に分員された全體といふものに於ては、若しも可能的の粗大、即ち概略の近接を以て滿足し、殊に豫斷せる說を立證するといふ目的を遂ぐる最も都合のよいやうな分割點を選ぶならば、いつでも容易く任意の關係といふものを發見する事が能きると。

結局吾人は今や知得する。黃金截斷の關係なるものは、唯一つの場合、即ち此の關係に基いて作られた矩形に於てのみ美的意義を有するといふ事を。して又、かゝる矩形に於ても、吾人が既に述べたるが如く、此のやうな關係そのものが美的に重要であるのではない。尙此の事に就いては前に述べたるものを比較すべきである。

六　情緒上の音聲に對する「感情移入」

以上攻究したる凡ての事項は、吾人をして、人間の美の根據をば他の方向に於て求めざるを得ない樣にならしむる。實に人間は、人間に取つて最美のものである。即ち彼れが正しく人間であるが故に、かゝる最美のものと

なる事が能きる。吾人は言明せねばならぬ。人間なるものは、その形の故に美であるのではない。之に反し、形は、それが人間の形であつて、さうして吾人に取りて人間生活の帶有者であるが故に美であるのであると。

又顏面の兩半部の均齊並に體の兩半部の均齊が美的に重要であるのは、それが意義を有するからである。詳しくいふと、此の如き均齊的構成の爲に、身體は右と左とに同樣の方法に於て働き、かくて之が人間の生存並にその全生活活動に對し、直接自明の價値を有するからである。之と同一理に、前に述べた「同一關係」が美的に重要であるのは、同一關係に基いて構成された各部分が仕遂ぐる所の官能及び官能の可能が、人間の生活活動の連絡の中に、有利に適合するからであるのである。

此の如く人間の外部的顯現の美が、そのやうな顯現をなす人間といふものに起源すると同樣に、かゝる美は又、吾人に對し次のやうな故に發生する。それは、彼れが如き顯現が、吾人に取りて、一個の人間の顯現となるといふ事である。換言すると、吾人が一個の「人間」といふものを語る時に吾人が思念する所の內容を以て充たされてあるからである。

確に吾人は、人間の外部的のものを目視するを得ると雖も、さり迚「人間」、卽ち感覺し、表象し、思惟し、感應し、意志し、行爲する所の人格といふものをば、目視する事は能きない。かゝる人格に於ける何等の容狀も、吾人に對し感官的に可知覺にあらぬ。之に反し、吾人は、かゝる容狀をば、吾人自らの人格の容狀を資料として構成するのである。かくて「他の人間」といふものは、表象せられ、さうしてそれ〴〵の外部的顯現並に可知覺の生活發現に基いて變更を加へられた己れ自らの人格である。卽ち變更された自我である。此の故に、吾人が意識を有する所の吾人の外の人間なるものは、一の二重化物であつて、さうして同時に吾人自己に變更を加へたものたるのである。

して又、他人の人格を構成するに就いての第一の材料及び刺戟となるものは、諸種の生活發現、可聽的のもの及び可觀的のもの、音聲及び容貌又は身振等、簡言すれば表出運動である。さうして玆では、人間の外部的のものゝ中の可觀的の形の美を攻究しようとして居るから、吾人は、第一に此の種の表出運動を考察すべきことになる。

されど之に關しても、始めに、音聲、特に內部的のものをば最も根元的且つ最も直接的なる方法に於て表現せしむる所のもの、卽ち情緒上の音聲の事に就いて簡單に語らう。

吾人は、あらゆる種類の情緒、情意運動、內部的興奮の諸種のもの、例へば恐怖、喜悅、驚愕等をば、直接に音聲によりて表現する。さうして吾人が此の如く表現するのは、敢へて之を學習したからではない。之に反し、根元的にして先天的なる本能の爲に此の如く爲すのである。

かくて吾人にして、若しも、吾人自らがよりて以て吾人の情緒を告知する所の音聲に類似する音聲を聽取するならば、吾人は、かゝる音聲に對し、敢へて此の情緒を結合するのではなく、之に反し直接に音聲中に於て、此の情緒を發見するのである。

此の種の發見は、先第一に、單なる直接の表象作用である樣に見ゆる。けれどもその實は、かゝる表象作用以上のものである。卽ち吾人は、嘗に音聲の根柢に情緒といふものが存するといふ事の表象を得るのみならず、更

に此の情緒を體驗するのである。吾人は內部的にかゝる情緒を起し、さうして音聲に對し內部的により多く向注すればする程、益々十分且つ確實に之を起すのである。吾人は歡樂する所の者と共に歡樂し、かくてその歡樂と內部的に一致しようとする。さうして若しも吾人が聽取する所のものに全然打任せるに就いて妨害する何物も存しないならば、吾人は事實的に此の如く爲す。此の種の事實關係、即ち聽取したる歡樂の音聲と共に歡樂するといふ事をば、吾人は直に感情移入といふ概念の下に入れる。さうして此の種の概念たるや、常に使用される。否之は以下の考察の根本概念たるものなのである。

第二章　表出運動と感情移入

一　表出運動

右の如く叙說するとはいふものゝ、既に述べたる如く、吾人は、情緒上の音聲に就いてゞはなく、之に反し玆では表出運動に就いて先第一に叙說をなさうとするのである。本來表出運動なるものは、身體的運動の中で、特殊の一團を形成するのであつて、之が表出運動と呼ばるゝ所以は、人間の內部的狀態を告知するのに之が役立つからである。吾人にして表出運動を知覺するならば　吾人は直接に此の中に於てかゝる內部的狀態を發見し得るのである。

されど之を押詰めて見ると、吾人一切の運動なるものは、或る方法に於ては表出運動である。之はちやうど、凡ての音聲、隨つて言語上の音聲も、同時に表出音聲、即ち情緒上の音聲であるが如くにある。

凡て運動なるものは、かの身振或は恐怖の際の畏縮運動、又は尊大の感情に伴ふ直立運動の如く、全然若くはその固有の本質上、表出運動である。或は又、如何に吾人の內心の氣分があるか、如何なる心持を吾人が有するか、吾人の中の現象が如何なる情緒的動力の中に浸潤されてあるか等によつて規定されるといふ一の特異點を、その中、即ちその經過中に於て發見せしむる。けだし吾人の運動は、吾人が內部的に靜穩である時と强く興奮して居る時とは異なり、或は內部的に弛緩せしめて居る時と力强く吾人を緊縮せしめて居る時とは異なる。更に吾人が、或る事項に對し眞面目である時と、それを輕易に取扱つて居る時とは、言語も運動もそれ〴〵異なるのである。

さうして正しく此の如くあるが故に、內容上表出運動の性質を有して居ない所の他人の運動も、吾人に對して、その內心上の諸種の狀態を告知し、かくて吾人をして之を共同的に體驗せしむるのである。

されど吾人は今、特定の表出運動から出發して見よう。例へば吾人が自尊の樣子をする目、自尊の輝きを有する目を目視するとする。簡言すれば或る目からして自尊の印象を取得すると假定する。ところが之は先第一にかういふ事を意味するのである。吾人が目の周邊に於て甚だ僅か目立つ所の或る變動を目視するといふ事を。

此の種の形上の變動は、それ自體としては、少しも自尊と交涉する所がない。併し之は吾人に對して自尊といふものを意味する。いふ迄もなく、吾人にして、自尊といふ語がどんな事を言明するかを吾人自らよりして知り居らなかつたなら、かゝる變動は吾人に對し彼のやうな意味を有する事は能きぬ。目なるものは、吾人が、吾人

自らの體驗からして吾人に知得された自尊の感動をそれに結合する事により、始めて右の意味を取得するのである。

ところが此の種の結合作用たるや、吾人が聽取したかの情緒上の音聲に情緒を結合する曾述した作用と同樣に一種特異なる結合作用である。之は先第一に、かの結合作用の如く、特異なる密接性を有する。即ち吾人は目に於ける變動を目視し、さうして之と共に自尊を表象するのではない。之に反し吾人が目視する所の變動そのものゝ中に於て、直接に自尊を感知し、かくて吾人が目の中に於て自尊を目視すると云ひ得る位の程度に感知する。或は又、情緒上の音聲に於ては、その情緒をば、成程此の場合には目視はしないが、此の中に於て聽取するやうな感じを起すのである。

然るに此の如く述ぶると共に、目の知覺された形の直接特異なる知力的理解、即ち「吾人は目に於てそれが何を意味するかを直接に目視する」といふ事は說き了られる。されど此の如く「目視する」といふ作用の中には、より多くのもの、即ち感情移入といふ作用が存在するのである。

二　表出運動に對する快感の條件としての「感情移入」

本題に關しては、吾人は今、表出運動か、又は十分なる表出力を有する形かにより、詳密に叙說して見よう。一つの形の知力的理解の事に就いては、前項に於て述べた。されど吾人の今考察しようとするものは、かゝる理解ではなくて、人間の身體の形の美的價値、並にかゝる價値の感情である。簡言すると、吾人の問題は、かゝる形に對する快感又は不快感であるのである。

かの自尊の態度は吾人に快感を起さしむる。之は如何にして此の如くなるであらうか。かゝる快感が起生する爲には如何なる條件が充たされねばならぬか。

而も此の如き疑問が發せらるゝからには、自尊の態度なるものは如何なる場合に於ても吾人に快感を起しむるものではないといふ事が既に前提せられ居るのである。即ち之は又吾人に不快感を起さしむる事もある。例へていふと、自尊の態度でなく傲慢の態度の如きは即ちそれである。傲慢の態度なるものは最も强く吾人の感情を害する。

此の傲慢の態度が吾人の感情を害するといふ事は敢へて疑を容れない。何となれば、かゝる態度により告知される所の傲慢心といふものが、吾人の感情を害するからである。かの「自尊」切言すれば高貴なる自尊の態度が吾人を快くせしむる所以は、吾人がその態度の中に存する自尊心といふものを快く感ずるからである。

玆に至つて今や一の問題が起るのである。何が故に吾人は他人の自尊に對して快感を起し、傲慢に對して不快感を起すかと。

世に一種の倫理說を唱ふる者がある。之に據ると、他人が起して居る快感を帶びた情緒そのものが、吾人をして快感を起さしむる事になる。社會的幸福說の如きは即ちそれである。此の種の倫理說は、人間の快感、可能的最大の快感は、吾人に對して自然的に價値を有するといふ事を確言する。けれどもかゝる確言中に存する假定は吾人が右に述べた所のものにより不成立に歸せしめられる。その故は、かの傲慢心は、その心持を有する人に取

つては愉快であるが、それにも拘はらず吾人には不快感を起さしむるからである。かくて他人の起して居る快感を帶びた情緒なるものは、或る場合には快感、他の場合には不快感を起さしむるといふ事になるのである。

然らば如何なる場合に於てのみ、かゝる情緒が快感を起さしむるかといふに、之に就いては各人は知得するのである。吾人がかゝる情緒を可認する（ビュリーガン）場合であると。隨つて可認をなさない場合には不快感を起さしむるのである。

更に又、吾人が他人の心中に於て發見する所の情緒又は內部的態度を可認するとは如何なる事を意味するであらうか。

吾人は今茲に語つた傲慢以外の他の內部的態度の可能を假定して此の疑問に答へて見よう。例へていふと、他人の判斷を吾人が可認するとは何を意味するであらうか。之に就いても各人は知得するのである。かゝる可認とは、取りも直さず、吾人も亦他人が判斷すると同樣に判斷するといふ事以外の何物をも言明しないといふ事を。かくて一つの判斷の「可認」とは、吾人自らの判斷が他人の判斷と一致するといふ事になるのである。さうして之と同樣に、他人の意志を可認するとは、吾人の意志が他人の意志と一致するといふ事を言明する。更に他人の評價作用を可認するとは、他人が評價すると同樣に吾人が評價をなすといふ事を意味する。之を簡言すると、可認とは、吾人のと他人のとの一致或は調和といふ事になる。かくて又、他人の內部的態度を可認するとは、吾人が內部的にそれと同樣の態度に出づる。即ち彼れの態度を吾人が內部的に「同樣的行爲」（ミットマツヒン）をするといふ事を意味するに至るのである。

ところが愉快の感情なるものは一の價値感情である。即ち之は一の價値作用を表出する所のものである。隨つて他人の快感を「可認」するとは、吾人が他人の快感と一致し、之を內部的に同樣的行爲をするといふ事になるのである。

更に之と同樣の事は、各の他の情緒に關しても言明する事が能きる。例へていふと、他人の忿怒と雖も、その忿怒の事項に對し、吾人にして他人と同樣の內部的態度に出づるならば、之を可認するのである。さうして此の際に於ける可認とは、言語上に於けるものではない。之に反し事實的の內部的の可認である。吾人は言明するが、此のやうな可認とは、いつでも內部的の同樣的行爲をなすといふ事に外ならぬと。

されど他人の內部的態度を吾人自ら內部的に同樣的行爲し得るのは、かういふ時及びそれ丈の程度に於てである。それは、かゝる「同樣的行爲」が吾人に對し、一の自由にして何等の內部的妨害、衝突なしに遂行せらるゝ所の吾人自らの行爲である時である。即ち吾人自らの自由なる活動を意味し、又それを意味する丈の程度に於てゞある。更に之を換言すると、他人の內部的態度が、吾人自らの本質に適合し、その結果それと同樣の內部的態度によりて、吾人自らの本質の力、渴求、需要、都合によると憧憬が滿足せしめらるゝ時にあるのである。

かくて吾人は、かゝる假定の下に他人の內部的態度を啻に同樣的行爲し得るのみならず、更に吾人がそれに內部的に向注するとか或は觀照しながらその中に沈潛する程度に應じて、事實的にそれを同樣的行爲するのである。

之を例へていふと、一の表出運動となつて直接に吾人に對して存する所の內部的態度の如きは、その態度が、吾人自らの本質に適合するとか、或は吾人自らに「自然的」であり、さうして表出運動、並にそれと同時にその

内部的態度の中に觀照しながら吾人を沈潛せしむる程度に應じて、特に内部的に同樣的行爲をなすのである。

而も此の如く論究し來るといふと、他人の内部的態度、並に吾人がよりて以てその態度を「目視」する所の表出運動に對する快感の條件は何であるかとの疑問は解決されたのである。此の種の條件とは、取りも直さず「内部的の同樣的行爲」といふものから成立するのである。

されど又、かゝる同樣的行爲は是「感情移入作用」である。隨つて感情移入作用なるものは、知覺された表出運動中に存する他人の内部的態度に對する快感の條件たるのである。

併し又、之丈の言明では未だ十分しない。結局する所、何等内部的の妨害及び衝突なしの彼れが如き内部的の同樣的行爲、他人の内部的態度に對しての彼れが如き自由なる共同體驗及び感應は、啻に知覺された表出運動に對する快感の條件であるのみならず、更に同時にその必然的根據である。一體吾人自らの本性を自由に働かせるといふ事は、いつでも吾人に取りて愉快である。此の故に、感情移入作用、即ち今いうたやうな自由なる共同體驗及び感應から成立する所の積極的の感情移入作用なるものは、右の快感の根據であるのである。

さうして事實關係が實際此の如くあるといふ事は、日常の經驗が吾人に言明するのである。

吾人はその表出運動によりてその快感を目視し得る所の他人と一緒に快感を起す。即ちそのやうな快感にして吾人自らの本性に矛盾しない限りに於ては、その表出運動を觀照して直接にその快感を體驗するのである。して又、かゝる表出運動中に、十分自由にして隨つて他の並存する所の思想や感興などにより妨害されずに、觀照的に益ゝ多く沈潛すればする程、益ゝ確實にかゝる體驗をなすのである。さうして之と同樣に、他人の忿怒又は苦痛を知覺して吾人がかゝる忿怒苦痛を内部的自由に同樣的行爲し得るならば、換言すれば此の種の忿怒、苦痛により吾人自らの内部的本質を自由に表現し得るならば、亦快感を起すのである。

更に、一の表出運動中に於て直接に吾人に對して存在する所の内部的態度を以上の如く自由に内部的の同樣的行爲をなすよりして生ずる所の快感といふものからして、表出運動、右の場合には自尊の目付きに對する美的快感といものは成立するのである。而も目付きなるものは、目付きそのもの、即ち眼の形の變動としてではなく、之に反しその中に於て表現せらるゝ所の内部的態度の故に快感を起さしむると同樣に、その快感は此の如き内部的の同樣的行爲に根據し、さうして此の種の共同體驗に對する快感たるのである。之を一言で以て覆ふと、之は「感情移入作用」より生ずる快感であつて、さうして斯かる感情移入作用よりして生ずる快感としてのみ唯一的に可能であるのである。

三　感情移入作用の起源、之に關する排斥すべき説明

以上の如く述べ來るといふと、今や一の疑問は起るのである。如何にして、吾人は、他人の目の形の變動を知覺すると共に、自尊といふものをそれに結合したり、或は之をその中に於て目視する事が能きるか。更に又、此の如く之を目視するといふ事が、單なる表象作用ではなくて、一の共同體驗「即ち感情移入作用」である事がどうして能きるかと。

此の二樣の疑問を解答する爲に次の如く言明する丈では十分しない。吾人自らが自尊を感ずる時には、吾人は

吾人の目に於ける形の同樣の變動を體驗するからであると。蓋しかゝる際に吾人が體驗するものは、吾人が今他人の目に於て知覺する所のものと全然異なつて居るからである。即ち吾人は、その際筋肉の緊張を體驗し、皮膚感覺を起したのである。一言で以て云ふと、形の變動、或は之をより一般的にいふと、表出運動といふものゝ筋肉上の形相及び觸覺上の形相を取得したのである。之に反し吾人は、同時に、他人の表出運動を目視しない。即ちその視覺上の形相を取得ない。此の反對に、吾人は、他人の場合に於ては、表出運動の視覺上の形相こそ取得するが、同時にその筋肉上の形相及び觸覺上の形相は取得しない。而も此の兩種の形相たるや、かの視覺上の形相とは全然異なりたるもの、否到底比較し得べからざるものたるのである。

此の如くあるから、吾人が吾人に於て體驗したるものを基礎として、吾人の自尊の感情と、それに相當する表出運動の筋肉上の形相及び觸覺上の形相との間に、確に連絡は附けられる。けれども之よりして、自尊と表出運動の視覺上の形相との間に何等の連絡は發生しない。然らば、如何にして、斯かる視覺上の形相からして自尊といふ感情を讀み出す事が能きるかといふ疑問を起さゞるを得ない。

或は此の事實に對し次のやうな迂路を取つて說明を試みる者があるかも知れぬ。曰く、自尊の感情なるものは、吾人に對し決して直接に表出運動、即ちそれの視覺上の形相にも結合されて居なければ、又筋肉上の形相及び觸覺上の形相にも結合されて居ない。吾人は、他人が自尊の感情を起して居るといふ事實をば、少しも此の如き方法、即ち目の周邊の形の變動によりて知得しない。之に反し、吾人は自尊の目付きをする所の者の言語及び行爲、その言語の內容、その音調、その抱く目的、並にそれを實現する方法等によつて知得する。吾人は、吾人が自尊的にある時に、通常吾人自ら一種特異に談話すると同樣に、他人も亦そのやうに談話するのを聽取する。吾人は吾人が自尊の念を以て滿つる時に、いつでもそれに相當する行爲をすると同樣に、他人も亦行爲するのを目視する。けれども此の種の言語や行爲やは、同時に、吾人が自尊の目付き、或は目の自尊的の輝きと稱する所の表出運動によつて常に伴はるゝのである。かくて表出運動の視覺上の形相は、間接に、一方に於ては自尊の感情に迄結合し、他方に於ては、言語や行爲と合體して、自尊の感情の標徵となるのであると。

表出運動の理解に關する此の如き說明法は、是純然たる經驗說とも稱すべきものである。かゝる經驗說は、いつでも、容易く理解され得る如く、世人を引付ける或るものを有する。加之右に擧げたやうな實例に對しては、それに都合のよい幾多の點を持出す事が能きる。此の說は、吾人をして、どうしても此の說のやうな迂路を取つて說明せざるを得ないやうにならしむる所の他の類似の事實を想起せしむるのである。之を例へていふと、犬の或る種類の表出運動、即ち耳を欹てる事及び尾を振るといふ事は、確に、此の如き迂路を取る事により吾人に取りて可解的になるのである。吾人は、犬の他の樣子よりして、それが留意をなしたり喜悅したりするといふ事を目視し、同時に耳を欹てたり尾を振つたりするのを目視する。さうして此の如くして、耳を欹てる事及び尾を振る事の意義が可解的になる。ところがかの自尊の樣子の理解も、之と同樣の方法に於て取得されると論者はいふのである。

然かはいふものゝ、かかる經驗的の說明原理を適用する事の能きない場合もあるのである。かの幼兒は、母の親愛なる笑に對して、彼れがその笑の中に於て表出される母の親愛の意圖或は心持を模糊ながらも知得して居る

といふことを吾人が假定せねばならぬやうな樣子をする。けれども之を說明するのに、次のやうな假定を以てする事は能きぬ。彼れが、此の笑の如き態度によつて伴はれた所の前行せる行爲、例へば母が親しき目付きを以て爲した信切の如きものからして、彼のやうな親愛なる意圖或は心持を歸結推斷すると。

四　模倣作用

以上の事實の解釋は如何に處理さるべくあるにもせよ、兎に角他の事實は他樣の說明をなすべく吾人を指命するのである。

此の種の他の事實とは、吾人が無意か有意かになす所の模倣作用である。吾人はあらゆる種類の澁面を無意に模倣し、又たとひ唯輪廓的であるにもせよ、輕業師の危險なる作業に無意に追隨するのである。更に他方に於ては、有意的に、他人の擧止や步行や運動の特異なる仕方を繰返したり、他人に於て觀察した所の表出をば故意に吾人の顏面に與へたりしようとするのである。

ところが之に關しても先第一に吾人が言明せねばならぬのは、此のやうな模倣作用に於て直接に吾人に與へられてあるもの、隨つて吾人が斯かる模倣に際し唯一の手本として有するものは、特定の視覺上の形相であるといふ事である。之に反し吾人が實行する所の作業なるものは、吾人に取つては、筋肉、腱、關節、最後には皮膚等に於ける或る現象の發生から成立するのである。之を簡言すると、吾人は、實行した吾人自らの作業に關しては、直接には單に筋肉運動上の形相を有する許りである。筋肉運動上の形相とは、以上のやうな吾人の中に於ける現象からして發生する所の感覺的內容の複合體たるのである。

併し又、以上のやうにして手本が同時に實現せらるゝといふ事、卽ち右のやうな筋肉運動上の形相に、かのやうな視覺上の形相が該當一致するといふ事、更に換言すれば、視覺上の形相と共に筋肉運動上の形相が發生せしめらるゝといふ事は、直接の經驗からして吾人の知得し能はざる所である。正しく此の場合に於ても、運動又は表情深い形或は態度の目視に對し、此等の形相の根抵に存する身體的作業に關する直接の意識は結合されてあらぬ。之を逆に云ふと、吾人自らが運動を實行するとか又は或る態度を受納或は模倣する時には、吾人の筋肉運動上の知覺に對し、吾人の身體的作業の所產物の目視といふ事は結合されてあらぬのである。

此等の實例に對しても亦、上に述べた經驗說が試みるやうな迂路を取る說明は適用されることは能きぬ。卽ち此の場合に於ても、目視した行爲又は言語上の告知からして、目視された行爲の根抵に存する筋肉作業の性質に關する知識を取得する事は能きぬのである。

今茲に吾人の語り居るものは人間の模倣作用であるが、動物の模倣作用になると、以上のやうな事實關係は、尙一層明白になるのである。「動物は、他の動物に於て知覺した運動を己れ自ら發生するに就いては如何なる筋肉作業が必要であるかとの事をば、己れの經驗からして推斷する」といふ說明は、背理である。動物とても、他の動物の筋肉作業を勿論吾人と同樣に直接に知覺する事は能きぬ。さうして又、動物に於て既に此の如く自明的に明白である所の事柄は、吾人人間の模倣作用にも、適用されねばならぬのである。

而も彼れが如く直接に知覺する事は能きぬにも拘はらず、吾人は前に述べたる如く確實に模倣運動を實行する。

換言すれば、正しく吾人に手本として與へられてある所の視覺上の形相に該當する所の筋肉作業を實行する。さうして尙此の上に吾人は附言せねばならぬ。若しも吾人にして有意的に模倣をなすならば、然る時にはその模倣の遂了されたといふ事を吾人は知得すると。例へていふと、吾人は甚だ無邪氣なる顏付きを爲さうと企てる事が能きる。此の場合には、吾人の企てが成功したといふ事、詳言すれば、第三者がその目視する所のものをば、無邪氣なる顏付き、卽ち吾人兩人が第四者に於て共通に發見する所の無邪氣なる顏付きとして認識するといふ事を知得するのである。

五　本能行爲としての模倣作用

以上縷々述べたる後に於ては、吾人は模倣といふ事實の他樣の說明に移らねばならぬ。吾人は旣に前項に於て述べた。此の事實は他樣の說明をなすべく吾人を指命すると。ところが又、之を如何樣に說明すべきか、卽ち如何なる方法に於てのみ、此の事實を理解し得るかといふ事も、上述したるものよりして明瞭する。卽ち吾人はかのやうな視覺上の形相と筋肉運動上の形相との間に、根元的、卽ち先天的の連絡といふものを假定せねばならぬのである。

されど此の如き言明は決してかういふ事を意味しない。筋肉作業に附隨する視覺上の形相の表象、或は視覺上の形相に附隨する筋肉及觸覺上の形相の表象が吾人に先天的であり、かくて視覺上の形相が發生するならば、根元的に、卽ち何等先行する所の經驗なしに、觸覺上の形相が無より發生し、さうしてそれに結合するに至り、且つ此の逆もさうであるといふ事を。之に反し吾人の意味せしめようとする所のものは次の如くあるのである。

先第一に、吾人一切の有意的運動には、それと同質なる自動運動が前行してあらねばならぬといふ事は、許容されたるものと認められねばならぬ。此の種の自動運動とは、一の心的衝動、卽ち心的範圍より發生する所の刺激から起り、それかというて實行さるべき運動の表象によつて制約もされなければ喚起もされないものたるのである。蓋しかゝる衝動が働き、從つてそれに附隨する運動及び運動感覺が發生する事により、始めて、此の衝動と、此等の運動及び運動感覺、或は此等に該當する運動表象との結合が仕遂げらるゝのである。又此の如く結合さるゝと共に、始めに盲目的であつた所の衝動は一の內容を取得し、その衝動の働きはそれが目標とする運動の意識と結合される。或は結合されるやうに見ゆるのである。此の故に、今や又、その運動を目標とする欲求或は意志といふものが始めて可能になる。尙之に關して高調して置くが、玆にいふ運動表象とは、前に述べた意義の筋肉運動上の表象であるのである。

ところが此の如くある事に對し、吾人は一の假定を附加せねばならぬ。曰く、吾人の中に於ては、根元的の裝置が存在し、之が爲に、他人の運動を目視すれば、直接にその運動に對する衝動を解發せしむると。して又、かゝる假定をば、吾人は直に次の如く詳細に規定せねばならぬ。運動の目視といふ事は、いつでも、他人の目に對して同樣の目視を提供するべく適當してあるといふやうな自己の運動の衝動、簡言すればそれに「該當」する運動に對する衝動を解發せしむると。かくて吾人は斷言せねばならぬ。他人の運動を目視する事と、それに該當する自己の運動に對する衝動との間には、根元的にしてその上進んで說明する事の能きない心的連絡、卽ち「中樞的」

の連絡が存在し、それが爲に、若しも運動を目視するならば、その運動を起したり、又は起したりする事が能きると。

吾人はかゝる連絡をば、その上進んで說明する事の能きないものと稱する。此の連絡は、たとひ吾人が、之に對し、他の同種類の場合に於て用ふる「本能」といふ名稱を附與し、かくて、他人の運動を目視するよりしてなす運動は是本能運動或は本能行爲であると云はうとも、尙可解的にならぬのである。併し本能といふ概念は、確に此のやうな運動に對して適當する。隨つてその運動の刺激は本能的の刺激と稱すべくある。

併し又本能的といふ稱呼は、右に作つた假定が、他の場合に於て吾人が假定するべく餘儀なくさるゝもの以上に出でないといふ事を吾人をして想起せしむる限りに於て、價値を有する。けだし本能なるものは、一點の疑を容れない事實である。さうして此の如き名稱が附與される所の事實といふものは、いつでも斯ういふ事から成立するのである。卽ち根元的にしてその上進んで說明する事の能きない裝置の爲に、一定の知覺に對して一定の運動衝動或はかゝる衝動の鏈鎖が直接に結合さるゝやうに見ゆるといふ事である。

吾人は、此の場合に、此の如き根元的の裝置を假定する。何となれば、上述のやうな事實を可解的になさうとするには、どうしても斯かるものを假定せざるを得ないからである。由來「模倣衝動」なるものは、此の種の根元的裝置以外のものから成立する事は能きぬのである。

されど茲に語り居る所の「衝動」なるものに就いては、誤解が抱かれてはならぬ。吾人は特に力說するが、之は、それ自體としては、運動に對する「欲求」(Streben)といふものと同意義ではない。之に反し、之は、それ自體として全然不明にして吾人の意識に對し決して存立して居ない所の、運動に對する刺激である。吾人は之をば唯、之から發生する所の運動によりて知得する。殊に吾人は今語つた目視の爲に起さるゝ衝動なるものは、直接に目視によつて與へられてあつて、如何なる方法に於ても吾人により直接に體驗されないといふ、運動刺激たるに外ならないのである。之は、運動を起すに足るべき、刺激といふものゝ不可詳說的の活動法たるのである。

之に反し、欲求なるものはいつでも意識的體驗である。吾人は欲求する所の自我を感知する。さうして吾人は、或るものに向つての欲求する所の自我を感知する。而も此の「或るもの」とは、右の場合に於ては、運動であるのである。

ところが其の此の如くあるといふ事は、運動が吾人に對して存立するといふ事を前提する。されど若しも運動にして曾て經驗に於て與へられて居ないならば、此の如く存立するといふ事は能きぬ。而も此の事はかういふ事を意味するのである。吾人はかゝる運動の衝動の實現を既に體驗した。卽ちかゝる衝動を刺激となす所の運動といふものを吾人の中に於て經驗したといふ事を。さうして此の如く經驗した事があつて始めて、吾人は之に向つて「欲求をなし」得るのである。

更に若しも吾人にして、運動を目視する事によつて、惹起されて、その運動を欲求するとするならば、然る時には、此の目視といふ事が先づ與へられてあり、同時に、此の目視の爲に起された運動の刺激が實現さるゝに相違ない。而も之により、一の連絡卽ち「聯合」といふものは作成せらるゝのであつて、かゝる聯合の爲に、以後目視作用を再び爲すならば、それにより曾て惹起された運動の表象は目視作用に迄結合するのである。

ところが實際に於ては、啻に運動の表象が結合するのみならず、更に之と共に、運動の再度の實現に對する可感的の欲求も結合するのである。かくて今や、以前の盲目的衝動の代りに、運動に對する欲求といふ意識的體驗は現出する。

要するに、茲に作つたやうな假定からして、模倣の事實、殊に無意的模倣の事實は、可解的になるのである。されど此の際、模倣の間に區別を立てねばならぬ。世には根柢に於て此の名稱を價しない所の「模倣」もある。之は確に、他人に對しては模倣である。併しそれ自身に於ては、即ち模倣者に對しては、模倣ではない「此の種のものは、自動的模倣或は盲目的「模倣」といふものである。斯かる模倣は、實行さるべき運動の表象なしに、隨つて、又衝動に對し、それの實行の欲求といふものが結合する事なしに、單に他人の運動を目視する事によりて、その運動を起すとか、又は、その運動に結合されるとか或はその中に於て與へらるゝとかの衝動の實現から、成立するものに外ならぬのである。かゝる「模倣」は單純なる事實的の「模倣」といふものに外ならないものであつて、詳言すれば、目視の爲に促されて或る運動を單に實行するといふ事に過ぎないのである。吾人は、此の種類に屬する「模倣」をば、此の上進んで論究をなさない。

されどかゝる盲目的の模倣も、若しも衝動にして曾て實現されたならば、上述の理に基き、目視的模倣、即ち實行さるゝ運動の筋肉運動上の表象と結合されたものとなる。併し此の場合に於ても亦、模倣は始めに無意的のもの、即ち筋肉運動上の表象の實現に向つての無意的欲求たるのである。

最後に又、上述したやうな假定からして、有意的模倣、即ち目視したものゝ故意に且つ考慮した模倣、換言すれば運動の視覺上の形相を故意に發生せしむるといふ事も、可解的になる。即ち目視したものと筋肉運動上の表象との結合にして一たび遂げらるゝならば、然る時には、此の表象の實現に向つての欲求は、同時に、目視したものゝ實現に向つての欲求となる。而も此の如くなつて始めて、十分なる意義に於ける「模倣作用」といふものは發生する。かゝる作用たるや、目視した手本の反復をなさうとするものたるのである。

六　模倣と感情移入作用

本來、前に述べたやうな、知覺したものゝ模倣作用なるものは、本書に於ける攻究目的ではない。之に反し、かゝる作用の理解、而も究極に於ては、それの美學上の理解といふものが、攻究目的である。けれども又、此の種の理解は、かのやうな模倣作用の理解中に包括せらるゝのである。

既に述べたる如く、目視といふものに對し、以後、即ち目視中に存し居る當該の自己の運動に對する衝動にして實行さるゝならば、此の運動の再度の實行に向つての一の欲求といふものが、結合せらるゝのである。ところが之に關して重視すべきは、かゝる欲求が直接に目視と結合せられ、直接に此の中に於て之と共に與へられてあり、かくて目視された運動が、吾人の意識に對し、かゝる欲求を直接にそれ自身の中に包有するといふ事である。而も此の如くなるといふと、欲求といふものは客觀化せらるゝのである。即ち之は、吾人の意識に對し、直接に目視した運動中に於て起生する欲求となる。さうして正しく此の如くあるが故に、吾人が今直に附言し得るやうに、吾人が運動を目視する場合に直に起生し實現せらるゝといふ欲求となるのである。

されど此の如くなればとて、此の欲求が吾人の欲求であつて、さうして吾人により吾人の欲求として感知されないやうにはならない。けれども又、吾人は、此の如き吾人の欲求をば、目視した運動の中に於て感知するのである。吾人はかゝる欲求をば、目視したものに直接に附屬する或るものとして體驗する。此の故に、吾人は、かゝる運動の中に於て、欲求する所の吾人を感知する。即ち目視した運動に該當する所の筋肉運動上の形相に向つて欲求し、同時に之と共に、此の運動そのものに向つて欲求する所の吾人を感知するのである。之をより一般的に言明すると、吾人は一の知覺したものゝ中に於て、一の運動の實行に向つて欲求する所の吾人を感知するのであつて、さうして此の如き事實をば、吾人は又「感情移入」と稱する。同時に、目視したものゝ美學上の理解とは、かゝる感情移入といふものから成立するのである。

此の如き「感情移入」なるものは、容易く了解し得る如く、摸倣といふものゝ一の方面、或は之を精密にいふと、その內部的方面たるに過ぎないのである。之は特に、かの無意的にして而も實行さるべき運動の表象によつて伴はれ、且つその運動に向つての欲求と結合されたる模倣であつて、例へば吾人がかの輕業師の危險なる作業に對して爲すが如きものたるのである。

かゝる模倣は先第一に、外部的に考察されるといふと、輕業師の或る運動の單一にして唯輪廓的なる反復である。けれども此の如き外部的運動は、正しくその內部的方面を有するのである。さうして吾人は直に附言せねばならぬ。此の方面こそ、今茲に取扱ひ居る事項の重要點であると。けだし無意的の模倣作用の中に於て、該模倣者にして益ゝ多く强制せられ、隨つて益ゝ無意的に模倣を實行すればする程、益ゝその「模倣」、即ち身體的運動の事實的外部的實行に關しては、模倣者は僅少なる意識を有するに至るといふが如くに內部的方面は顯著になるのである。

けれども又、模倣者は、それだけ多く、內部的現象、簡言すれば「內部的模倣」に關しては、判然たる意識を有するのである。

かゝる內部的模倣と外部的模倣とを判然區別する事は、今の場合に於て極めて必要である。

外部的模倣とは、運動を事實的外部的に實行する事である。かゝる運動は、輕業師の運動の外にそれと並列して存する。之は、吾人が輕業師の下に事實的に立ち居る場所に於て起る。然るに輕業師の運動は吾人の上に於て起る。

之に反し、內部的模倣に至りては、吾人の意識に對し、全然異なりたる事實關係をなす。即ち之に於ては、上の方にある輕業師と、その下にある吾人との間に、何等の區別といふものは存しない。之に反し、吾人は輕業師と吾人を同一化し、彼れ及び彼れの位置の中に於ける吾人を感知する。成程吾人にして、後になつて考察して見るならば、輕業師と吾人、彼れの行爲と吾人の行爲との區別をなす事は能きる。けれども、此の如く後になつての考察の結果の如何にあるかは、今の論究に於ては關知しない事柄である。之に反し、今の論究上では、模倣衝動の働きを受け居る瞬間に於て吾人の體驗する所のものが、問題となる。即ち問題は、模倣衝動の働きが如何に吾人の意識に對し直接に表現せらるゝかといふ事である。さうして之に關しては吾人は言明せねばならぬ。模倣衝動の此の如く直接に體驗された働きにして强烈であればある程、益ゝ確實に、右の同一化の作用といふものは、

かゝる働きから成立すると。吾人はもはや二つといふものを體驗しないで、全然たる一つを體驗するのである。

但し此の如く述べ來るといふと、「模倣」或は「同樣的行爲」といふものは既にその意義を變動するといふ事が言明せらるゝのである。吾人は、かゝる「內部的模倣」に於ては、輕業師が爲すやうな運動を尙一度實行するのではない。之に反し、直接內部的に、卽ち「吾人の思想に於て」輕業師の運動を實行する。吾人は、かゝる「運動の實行」にして、外部的のでなく、之に反し內部的の行爲である限りに於ては、輕業師その人となつて運動を實行する。吾人は、吾人の直接なる意識の告白に從へば、彼れの中に於て居る。隨つて上の方にあり、又かゝる所に轉置されてある。かくて輕業師と並列してゞはなく、此の反對に、正しく彼れがある所にある。而も此の如くあることが、實に「感情移入作用」といふ語の十分なる意義であるのである。

此の如き感情移入作用を稱して吾人は模倣といふものゝ內部的方面と稱する。事實的の模倣（事柄の關係上吾人は然く呼び得るが）なるものは、是外部的の意志的行爲である。之に反し感情移入作用なるものは、かゝる行爲中に於て「表現」せらるゝ所の內部的の意志的行爲の體驗である。此の際强調すべきは、感情移入作用といふものが、かゝる意志的行爲の體驗から成立するといふ事である。吾人にして若しも輕業師の中に感情移入作用をなすならば、吾人は、吾人が前方又は後方に向つて欲求するといふ事を表象しない。之に反し、かゝる欲求をば、直接に吾人自らの中に於て起生するものとして體驗する。吾人は、欲求、並に一の運動から他の運動に迄欲求的移行といふものを體驗する。吾人は、吾人の意志、並にその意志の保持に對する妨害の除却を體驗する。さうして若しも運動が遂了されたならば、吾人意志の自己滿足を體驗する。凡て此等の點からして、此の場合には、內部的の意志的行爲、或は「內部的行爲」といふものは成立する。かゝる行爲が現實に存在するといふ事は、是何等の疑を容れない事實たるのである。

七　純粹なる感情移入作用の可能

上述のやうな內部的の意志的行爲に對しては、外部的の意志的行爲といふものが、加入する事が能きる。されど內部的の意志的行爲なるものは、それ自身に立止まる事も能きるのであつて、此の場合には、感情移入作用といふものが純粹に與へらるゝ事になるのである。

併しかゝる種類の感情移入作用が如何にして可能であらうか。「內部的行爲」なるものが、外部的行爲なしに如何にして存立する事が能きるか。殊に、身體的運動に向つての一の欲求が事實的に吾人自らの中にあり、それかといつて運動そのものは實行されないといふ事が、如何にして可能であらうか。

此の如き疑問に對しては、吾人は先第一に答へねばならぬ。吾人は確に、輕業師のやうに上に立つ所のものとして直接に吾人を體驗するとはいふものゝ、去り迚吾人は、そのやうに上に立つといふ事を決して思認しないと。卽ち吾人は輕業師と吾人を同一化し、それと同一のものと、感知するとはいふものゝ、而も吾人は、吾人をば輕業師であると思認しない。之に反し吾人は、上の方に立たないといふ事を知得する。又決して輕業師でないといふ事を知得する。して又、吾人が上の方に立つ所のものと吾人を直接に體驗し、さうして輕業師と同一のものと感知するといふ事は、次のやうな曾述した所のものを意味するのである。曰く、吾人は輕業師の目視された運動

の中に於ける吾人を感知する。隨つて吾人が目視するが如き輕業師の中にあるを感知し、此の如きものとなつて欲求し、內部的に活動する吾人を感知すると。かゝる感知作用は、吾人に對し、直接に知覺されたものに迄結合し、目視されたものに迄附着するのである。

併しながら此の如き事實といふものは、次のやうな語句によりて表はさるゝ所の他の事實とは、根本的に異なつて居る。曰く、吾人が上の方に立つと思認する。或は吾人が輕業師であると思認すると。前種の事實は、吾人が如何に吾人を感知するか、或は如何に感知しながら直接に體驗するかとの方法である。然るに後種の事實は、一の判斷である。而も此等兩種の事實は、精神現象の全然異なりたる範圍に屬するのである。即ち彼れが如き判斷といふものは、感情移入作用から成立しない。かゝる判斷は、敢へて反對的の判斷によつてゞはなく、之に反し反對的の知識の爲に、除却されてある。さうして此の種の反對的の知識、即ち吾人は輕業師ではなく、又下の方に立ち居るといふ吾人に知得された事實といふものは、たとひ吾人が此の種の事實に就いて省察をせず、或は意識を以てそれに該當する判斷を下さなくとも、當然その效果を顯はし居る。吾人の知識といふものは、他の場合に於けると同樣に、此の場合に於ても、たとひ現在の判斷によつて吾人の意識に達しないにもせよ、尙働きをなす。若しも事實關係にして之と異なり居るならば、吾人は誠に都合が惡く、吾人は生活を送る事が能きぬやうになるであらう。されど又、かゝる知識は、全然かの外部的の意志的行爲に對抗的に働くが、併し內部的の行爲に對しては、決して何等の對抗をなさぬのである。

此の種の知識は、先第一に、外部的模倣をして、單なる部分的の模倣、即ち輪廓的の模倣たるに至らしむる。されど又、かゝる部分的にして輪廓的なる運動も、壓伏される事がある。吾人は都合によると、吾人によつて感知された欲求、即ち目視した運動の實行に向つての欲求をば、少くとも可觀的方法に於て働かしめないやうに、教育もさるれば、又强制もせられ、且つそれ程强い禮儀の念慮と行爲の習慣とを有する。しかし又、かゝる場合に於ても、欲求、並に內部的行爲といふものは、吾人によつて感知されたるものとして存立する。さうして吾人が吾人を忘れる瞬間に於て、かゝる欲求は外部的運動となつて發出するのである。

玆に思念さるゝやうな感情移入作用なるものは、是十全なる感情移入作用である。此の種の感情移入作用は、既に述べたる如く、吾人が、目視した運動に、直接無頓着に吾人を打任せて居る時に起る。隨つて、輕業師の運動の中への感情移入作用といふものは、吾人の注意が全然かゝる運動に向注されてある時に起るのである。

ところが吾人にして、かゝる十全なる感情移入作用の埒外に出で、吾人、即ち輕業師の下に現實に立ち居る所の者、並に吾人が玆で實行する所の、輕業師の運動と無交涉なる運動に注意すると假定する。換言すると、吾人が省察し、さうして省察者として吾人を感知すると假定する。然る時には、吾人に對し、二樣の自我、即ち上の方にある自我と下の方に立つ所の自我、詳言すれば、輕業師の中に於ける自我と、彼れと異なつた現實なる己れ自身の自我とが存立するのである。

さうして最後に、吾人が感情移入作用の埒外に全然脫出すると假定する。即ち感情移入作用が起生し了り、さうして吾人が今體驗した事實關係を今回想すると假定する。此の場合に於ては、記憶中に於て尙、體驗された自我が輕業師に迄直接に結合されてある。此の故に、記憶作用により、輕業師並にその運動を浮出するならば、彼

れ輕業師の中に於て、一の自我並に一の內部的行爲といふものが、單に表象されたものとして殘存する。されど斯かる表象された自我並にその行爲といふものは、吾人の現實の自我、卽ち輕業師を回想する所の自我に、對立をなすものたるのである。

八　感情移入作用と知力的理解

以上の如くする事により始めて、吾人と輕業師とが區別される。今や吾人に對し、一方に於ては、その運動に盡心し、欲求し、抵抗し、意志し、その意志を實行する所の輕業師があり、他方に於ては、全然別のものであつて又別樣の內部的活動をなす所の吾人といふものがある。かくて旣に述べた所の自我の二重化が起生するのである。

ところが此の如く自我を二重化する事により、目視した運動の知力的理解といふものが與へられる。卽ち吾人は、目視した運動を行ひ居る所の、吾人と異なりたる自我を「知得」する。さうして吾人が之を知得するのは、經驗、卽ち以前の感情移入作用が、目視したものに對しかゝる自我を結合せしめたからである。此の種の自我の存在といふものは、今や、吾人卽ち吾人の記憶に對しては、一の「客觀的」の事實となつて居る。

此のやうな知力的理解は、感情移入作用の中に於て潛勢的に包括されてある。けれども感情移入作用にして十全なるものである場合に於ては、かゝる知力的理解の現實なる遂行は、絕對的に除却されてある。換言すると、輕業師に於て是若くはその樣な欲求、或は內部的行爲が存するといふ、吾人の判斷、尙之を一般的にいふと、吾人に對立する自我といふものゝ、各の意識なるものは、十全なる感情移入作用の場合には、起らないのである。十全なる感情移入作用とは、吾人が、目視するもの、並にそれに於て體驗するものゝ中に、全然沒入するといふ事である。さうして此の種の感情移入作用こそ、實に美的感情移入作用であるのである。

上來述べた所により、容易く了解され得る如く、感情移入といふ同一の作用の多くの段階は決定されたのである。卽ち之は先づ外部的の模倣作用を以て始まる。之は、尙一度繰返して云ふが、盲目なる外部的模倣作用である。次には、一の欲求の實現であるやうに見え、隨つてそのやうな內部的行爲を己れ自身の中に包有する所の模倣作用が來る。簡言すると、輕業師の運動を無意的に模倣するといふやうな種類の模倣作用が來るのである。さうして斯かる模倣作用よりして、純粹なる內部的の模倣作用、卽ち純粹なる感情移入作用が發生する。最後に又、此の如き純粹なる感情移入作用からして、知覺した運動の知力的理解といふものは發生するのである。

特に此の最後の事、卽ち前行せる感情移入作用からして、知力的理解が發生するといふ事は、吾人にとりて甚だ重要である。此の際に於ける事實關係といふものは、目視した他人の運動中に、一の內部的行爲、欲求、抵抗、欲求の自己滿足等が存在するといふ事を先づ知得し、次に吾人が吾人の中に於て此等を體驗するといふのではない。之に反し、體驗といふものが最始のものたるのである。

更に吾人は、之に對して直に逆の言明を附加せねばならぬ。曰く、吾人は此の如き內部的行爲を先づ始めに吾人の中に於て體驗し、次に之を目視したものゝ中に投入するといふ事實關係ではない。之に反し、吾人は根元的に此の目視したものゝ中に於て之を體驗する、或は感知すると。之を簡言すれば、吾人と他人との同一化といふ

事が最始であり、之を二つに別けるといふ事は次に起るのである。結局、感情移入作用、特にその十全なるもの、即ち美的感情移入作用なるものは、決して導出的のものではなく、之に反し、之は知力的理解の如き認識作用と比較して見ると、根元的のものたるのである。

第三章　「感情移入作用」に對する補説

一　「模倣」と「内部的行爲」

以上のやうな「美的感情移入作用」に對しては、尙二三の補説を今爲さねばならぬ。その第一の補説は、副貳的性質のものである。吾人は感情移入作用の事をば又「内部的模倣」と稱した。けれども斯る名稱は、上述した所のものに據ると、結局廢棄せねばならぬ。一體模倣といふ事は、一の手本が吾人に與へられてある場合に始めて起る。けれども吾人が「内部的模倣」に於て爲す所のもの、即ち運動の内部的實行といふ事は、吾人の意識に對しては何等の手本が存しない。此のやうな手本は、通常、吾人が「被模倣物」と吾人との區別を爲す時に始めて存するのである。さうして又、斯くあるとすると、感情移入作用なるものは、吾人即ちその感情移入をなす者に對しては、模倣ではない。何となれば、感情移入作用をなし居る中に於ては、吾人の意識に對し、被模倣物と模倣者との兩立並存はないからである。此の如くあるが故に、「内部的模倣」なるものは、今云ひ居る所の事實に對する適當なる名稱ではない。之に反し、かゝる誤解を起さしめ易い「内部的模倣」といふ語の代りに、どうしても「感情移入」といふ名稱を用ゐねばならぬのである。

されど第二の補説は、之よりもより重要である。此の補説たるや、内部的行爲といふ概念に關するものである。之に關しては、單純の内部的模倣が、他の場合に於て吾人に全然熟知された事柄であるといふ事に留意するは有益である。

吾人は、一切の美的觀照から離れて、或る作業を爲す事、例へば一の困難に打勝つといふ事を表象して見る。此の場合に於ては、二重の行動法が吾人に可能である。即ち一には、單にかゝる表象作用に於て立止まるのである。二には、吾人の思想或は吾人の想像に於て、此の作業を實行し、困難に打勝ち、危險なる狀勢から幸にも脫出するのである。

之を例へていふと、吾人は象棋戲の前に坐し、さうして現在よりも先の手を考へながら、吾人の思想に於て一駒づゝ打ち、遂に敵を確實に打破する。吾人は之をば思想に於て爲し、それかというて事實的に之をなす。吾人は現實にして而も全然内部的なる意志的行爲をなす。吾人の意志、一つの意志から他の意志への進み行き、並に吾人の意志の自己滿足等は、よしや唯表象された運動に迄向注されてあるとはいへ、尙現實的のものである。吾人はたとひ全然たる表象作用に於てゞあるとはいへ、諸種の方法を選擇し決定する。吾人は困難にも拘はらず一つの決斷に固着し、此の困難に抵抗し、遂に意志を滿足せしむる。之を簡言すると、吾人の意志的行爲の内部的特質たるものは此の場合に一つも缺損して居ない。唯かゝる内部的行爲に對して、外界への働きといふものが全然缺損して居る許りなのである。

或は吾人は、吾人の前に一の絶壁を見、さうして吾人の思想に於て之を登る。此の場合には、足掛に迄適當なる場所を選び、その外の必要なる支度をなし、さうして吾人の想像に於て、此の足掛より彼の足掛に迄飛び、遂に頂上に達する。

或は又、吾人は、一の苦しき位置を想像し、さうして均しく思想に於て、かゝる位置から巧に脱出する。

凡て此等の事は、たとひ單なる假想的事物に對してゞあるとはいへ、現實の意志及び現實の行爲である。換言すれば、理念的範圍に於ける現實的行爲たるのである。

さうして此等の行爲は、それ自身に於ては、任意なる他の行爲と異なつて居らぬ。一體「行爲」といふものは、それ自身としては、いつでも純然たる內部的體驗である。之は、孰れの場合に於ても、同一なる內部的體驗である。之は、一の意志、並に新意志への進行である。或は一の選擇及び決斷であり、一つの目的に對する內部的骨折と到達とであり、更に困難の打破であり、緊張を弛緩せしめての滿足であり、內部的の固執であるのである。

行爲なるものは、此の種の內部的勞作に外ならぬものである。さうして行爲により、何等かの現實的のもの、例へば感覺さるゝ運動などが發生せしめらるゝといふ事は、「行爲」といふ語の固有の意義を構成する所の體驗に附屬しない。之に關しては、吾人は直に、かの科學的思索が亦一の行爲であるといふ事に想到すべきである。かゝる思索は、之が談話とか記述とかの現實の身體的現象となつた時に始めて行爲となるのではない。して又、此の思索に於けると同樣に、他の作用に於ても、外部的の意志的行爲なるものは、唯、「行爲」といふものを唯一的に成立せしむる內部的現象が、身體的のものゝ範圍に迄發動したるに過ぎないのである。

更に又、何が故に、その性質上身體的運動に迄進向する場合の行爲が、必然に外部的の意志的行爲とならないか、換言すれば、表象された運動が現實的の運動に迄變化しないかといふ疑問は、常に右に述ぶるやうな方法に於て解答し得らるゝのである。卽ちかゝの變化は、それに對する特殊の條件が缺損するなら起らないと答へざるを得ないのである。吾人は象棋戲の先の手を考へて居る時には、そのやうに先の手を單に考へ居るといふ事を知る。或は吾人にして、若しも苦しき位置を吾人の心中に表象するならば、吾人は今そのやうな位置にあらぬといふ事を知る。吾人は之に關する意識を有する事なしに之を知る。けれども此の如くあればとて、同時に內部的行爲の條件といふものは決して消失されてあらぬ。卽ち以上の如くあるにも拘はらず、吾人の心中に於ては、象棋戲の敵手の征服といふ思想が働いて居る。此の思想が此の如く働き居るのは、それが吾人に取りて愉快のものであるからである。之と同樣に、かの嶮しい絶壁を登りつめるといふ思想、又は苦しき位置から巧に脱出するといふ思想も、吾人の心中に於て働く。唯事柄の性質上、此等の思想の實現が、どこ迄も吾人の思想中に於ての實現たるのである。

世には、心理學者にして、此の種の純然たる內部的行爲を認めない者があるやうである。彼等は、想像上の事物を對象となす所の行爲と、單に表象された行爲、卽ち想像上の事物としての行爲とを混同する。換言すると、想像に於ての成功と單に想像卽ち表象された成功とを混同する。此の如きは誤つて居る。何となれば、之は事實に矛盾する心理的見解であるからである。

かゝる見解には、吾人はどこ迄も反對せねばならぬ。その實をいふと、現實の行爲には三種がある。第一は想

像の範圍に於ける行爲であつて、即ち意志をば單に想像的事物に向注せしむる作用、全然たる「思想的」の勞作や、骨折や、固執や、困難の打破や、決斷や、一より他に迄の欲求的進行や、欲求を滿足せしむる所の一點への到達などがある。第二は、知力的の行爲、即ち悟性上の行爲であつて、默想、熟考、判斷、歸結作用等である。第三は、現實の存在、即ち感覺及び或るものが現實的であるといふ意識とにより始めて滿足せしめらるゝ所の行爲である。さうして又、此等三種の範圍の孰れに於て行爲が遂行されようとも、此の行爲は現實の行爲であり又あり得るのである。

ところが今茲では、右の第一の想像に於ける行爲を取上げて居る。併し之は勿論一の特殊の種類の行爲であるのであつて、即ち感情移入といふ概念により表示せらるゝ所の特殊の種類のものたるのである。

二　感情移入作用と運動感覺

吾人のいふ感情移入作用といふ概念は、上述した所のもの丈では未だ十分しない。言ひ換へると、感情移入作用をして、その內容上美的の感情移入作用とならしめ、さうして之と共に、之をして美的享樂の基礎となるに至らしむる所のものは、未だ缺損し居るのである。

先第一に、吾人は之に關する誤りたる思想を排斥せねばならぬ。吾人は、吾人の內部的行爲をば、感じ込まれたるもの、即ち感情移入をされたものと稱した。然るに人によりては、此の如く感じ込まるゝもの、即ち感情移入をさるゝものは、是運動表象、否運動感覺であると思認する。吾人は之に對して一言せねばならぬ。感情移入をされた運動感覺又は運動表象などといふものは、先第一に純然たる言語上からして不適當であると。吾人は、唯起した感情のみを移入する事が能きる。隨つて感情を移入するとは、他物によりて或る感情を起すといふ事を、意味する。然るに運動感覺とか運動表象とかいふものは、是感覺又は表象作用上の事柄であるのである。

次にかゝる言語上の不適當は姑く別問として、運動感覺と運動表象とは、その語の嚴密なる意義からすると何であるか。此等のものゝ內容は何から構成せらるゝかとの疑問を起して見よう。

之に對する答は次の如くある。それは、筋肉及び腱に於ける緊張、觸接、壓迫、關節の摩擦、皮膚の牽引又は緊搾等から構成されると。此の如く述ぶると共に、運動感覺及び運動表象の內容といふものは、吾人の知り居る限りのものは殘りなく與へられる。

けれども斯かる感覺と、意欲の感情、即ち內部的緊張骨或は折や、成功等、簡言すれば、此等の內容に迄關、涉し、之に迄向注せられ、之を對象とする所の內部的行爲の感情といふものは、各人に對し最も明瞭に異なつて居る。

更に、吾人にして、目視した運動、例へば輕業師の運動中に吾人の感情を移入する時には、吾人は右の運動感覺の內容又は運動表象の內容に對し如何なる關係に立つであらうか。之に關しては、吾人は先第一に問はねばならぬ。吾人自らがかゝる運動を實行する時にはどんな狀態にあるか。例へば山を登る時には、此等の感覺及び表象の內容は吾人に對し如何なる意義を有するかと。

此の答は次の如くある。此等の內容は吾人に對し何等の意義を有しないと。成程吾人はかゝる內容を體驗する。けれども吾人にして、吾人が實行したり又は實行すべくあつたりするものに就いて益ゝ多く內部的に吸引されて

あればある程、その際起る所の身體上の體驗に就いては益〻少く知得するのである。吾人は歩みの大さ及び方向に注意し、足場の堅否を調べ、執れの石にしかと止るべきかを見廻はしたりし、かくて吾人の努力の近い目的又は遠い目的に留意する。けれども此等凡ての事をなす中に於ては、かのやうな關節に於ける壓迫、觸接、或は摩擦等の感覺、今は之、次にはかの筋肉の收縮より生ずる各個の緊張感覺等は、少しも吾人の注意を引かない。此等は、せい〳〵、若しも苦痛を起さしむる場合に吾人注意の對象となるのである。

して又、吾人が吾人の行爲を首尾よく遂行した愉快を感ずると假定する。されど此の如き愉快を來さしむるものは、決して身體的器管に於ける變化ではない。即ちかの摩擦や緊張が吾人を愉快ならしむるのではない。此等は寧ろ、右の如く苦痛を起さしむる場合を除けば、吾人に取りて最も多く無關心的のものである。此の如くある事の反對に、吾人は、吾人の欲求及び行爲によりて愉快を感ぜしめられる。即ち吾人は、今や、自尊、自由、輕快、確實、自信あるものとして快感を起す。而も此等の快感たるや、決して、かの皮膚又は筋肉の刺激、或は關節の摩擦等から生ずる快感と、同一の物ではないのである。

さうして吾人は、今、他人の運動中への感情移入作用に轉じて攻究して見よう。此の場合に於ても吾人は知得する。かゝる感情移入をなし居る中に於ては、吾人は右の如き摩擦、緊搾等に關する各の思想から甚だ多く離脱して居るといふ事を。恐らくは省察作用といふものが、それの運動を吾人が目視して居る所の人間がその運動を體驗するといふ事を吾人に言明する。けれども吾人にして、その運動を內部的に模倣すればする程、益〻多く、彼れが體驗する所の身體感覺的內容は吾人の意識に達しないやうになるのである。

假りに斯かる內容が吾人の意識に達するとする。此の場合に於ても尙、之は、吾人の何等かの感興の對象とはならない。さうして吾人が目視する所のものゝ美的享樂なるものは、決して此の如き「末端的」體驗の意識の上に基礎しない。之に反し吾人の感情移入作用の對象たるものは、どこ迄も欲求と內部的行爲即ち內部的活動であるのである。

三　感情移入作用の最終の內容

併し又、個々の內部的行爲といふものが、吾人の感情移入作用の固有の對象であるのではない。例へていふと、かの輕業師が、今は之、次には彼の運動を意志するといふ事、彼れの意志が之若くは彼の方向に移るといふ事、かゝる意志が實現されるといふ事等は、吾人の滿足の對象となる事は能きぬ。此の種の個々の意志的働作、身體的現象に向注された此の如き個々の行爲は、吾人に取りては無意義のものである。

吾人に取りて意義を有するものは、彼れが如き行爲に迄使用さるゝ所の力、行爲全體の自由、確實、輕快、自尊、自信、堪能等である。

吾人は此等凡てのものをば、行爲をなすと共に、運動の中に感じ込む。さうして此の如き感じ込み、即ち感情移入となつて、始めて之が美的感情移入作用となるのである。

今此の事を一般化すると次の如くなる。吾人の美的感情移入作用の固有の內容たるものは、全體の內部的有樣、即ち意志及び行爲の個々の働作を發生せしむる所の內部的行動の方法であると。或は之を簡言すると、かゝる內

容は、吾人が知覺したるものゝ中に於て同樣的感情を起しながら體驗する所の人格から構成せらるゝのである。

而も此の如く言明し來るといふと、吾人が前既に述べたものと一致するやうになる。それは、吾人が人間の身體に於て知覺する所の運動といふものは、一般に情緒運動であるか、又は同時に情緒運動かであるといふ事である。或は茲にいふが如く餘りに狹義なる情緒の概念を棄却すると、斯ういふやうになる。彼のやうな運動に於ては、いつでも內部的有樣、或は內部的行動の一般的方法といふものが表現されると。而も此の如く述ぶるといふ事は、是取りも直さず、「吾人は右の有樣或は行動を運動の中に感じ込む」といふに外ならぬのである。

されど茲に至つて一の新なる疑問は同時に起る。曰く、此のやうな新しい事實關係は如何にして可能であるかと。

之に對する解答は、曾て述べたるものと同樣に次の如くある。吾人の本性の根元的裝置の致さしむる所であると。かゝる解答は先第一にかういふ事を意味する。一定の內部的有樣からして一定の運動が「本能的に」發生すると。吾人は、前既に述べたるやうに、吾人が得意である時には、失意である時と異なりたるやうに運動し、眞面目である時と氣輕である時とは、又異樣に運動するのである。ところが此等の差違たるや、敢へて後天的に學習したのではなく、之に反し吾人の本性中に根元的に存する連絡、卽ち先天的連絡の爲に發生するのである。

勿論かゝる連絡は、容易く理解され得る如く、上に曾て假定した所の根元的卽ち先天的の連絡とは異なつて居る。上に曾て假定したのは、他人の運動に對する目視上の形相と、それに相當する自己の運動に對する衝動との間の連絡である。然るに今茲にいふのは、新しい一の運動であつて、卽ち一般の內部的有樣も、亦、本能的に、運動に對する衝動を喚起するといふのである。

されど此の種の連絡は交互的のものである。詳しくいふと、一定の內部的有樣に對して一定の運動又は運動の方法が結合せらるゝと同樣に、此の逆に、一定の運動又は運動の方法に對して、一定の內部的有樣が結合せらるゝのである。兩者は統一的の心的事實を構成する。さうして之はかういふ事を意味する。運動の實行に對する傾向は、同時に、それに附屬する內部的有樣の體驗に對する傾向であり、右の運動は此の內部的有樣を喚起する事が能きると。

かくて吾人は今、右の如く區別した二種の連絡の效果を結合して見る。然る時には次の如き言明が發生する。他人の運動を目視するといふ事は、間接には、一定の內部的有樣を喚起しようとの傾向をその中に帶有すると。實際に於て、內部的有樣と、それに附屬する運動との間の連絡が、今述べたやうな方法に於て働くといふ事、換言すれば、斯かる運動がかのやうな內部的有樣を喚起し得るといふ事は、日常の經驗が既に吾人に證明し居るのである。先第一に俳優は之を熟知し居る。

吾人は、若しも吾人が得意である時には、自然に身體を昂め、筋肉を緊張さするのである。此の反對に、吾人が失意である時には、身體を弛緩するのである。されど又、此の逆の事も成立する。卽ち吾人が若しも故意に身體を昂め、得意といふものゝ自然的表徵である所の吾人身體の運動及び緊張を故意に實行するならば、然る時には吾人は一種の得意を感ずるのである。或は又、吾人にして單に思想に於てかゝる運動を實行し、得意者の運動及び態度を思想的になして見ても、亦得意を感ずるやうになる。之と同樣に、吾人が故意に、一の外部的行爲の

意義に於てにせよ、將た唯思想に於てにせよ、失意の時に自然になすやうに身體を弛緩せしむるならば、大なり小なり判明に、失意の內部的有樣を體驗するのである。

此の如くあるから、或る身體的態度をば、故意に、事實的又は全然思想的に發生せしむるといふ事、詳しくいふと、一定の內部的有樣或は情意の狀態の特質となつて居る所の運動、姿勢、態度等を、故意に、外部的又は單に思想的に發生せしむるといふ事は、吾人をばかゝる內部的有樣の中に投入するに就いての手段となる。而も之はいつでも、吾人が此の如き內部的有樣を表象するといふ事を意味しない。之に反し、吾人が此の有樣を、或る方法又は程度に於て、事實的に體驗するといふ事を意味するのである。

ところが吾人の此の美學に於ては、身體的運動を目視する事によつて、吾人に無意識的に强制されたその實行といふものを取扱ふのであつて、之が有意的實行の如きは關知する所でない。簡言すると、かゝる運動の、よしや唯思想的であるにもせよ、强制的實行を取扱ふのであつて、卽ち此のやうな「內部的行爲」に全然沒頭してある狀態を取扱はうとするのである。さうして此の際に於ては、效果が一層高度に發生するはいふ迄もない。

而も此の如く述べ來るといふと、感情移入作用の固有の決定的要素といふものは說示せらるゝのである。かゝる要素とは、吾人が運動を目視する事により、それに附屬する內部的有樣又は內部的行動の方法を體驗するといふ事であるのである。

されど此の如き言明の中には、二重のものが包含されてある。第一には、吾人がかの輕業師の運動を目視する事に於いて、その運動中に表現せらるゝ所の自由や自信等を體驗する。卽ち吾人は、吾人をば自由にして自信的のものゝやうに感ずるのである。吾人は、輕業師が不確實になる場合には、不確實を感じ、又此の場合には、懸念、失望等を感ずる。さうして吾人にして、輕業師の運動に吾人を益ゝ多く打任せて目視すればする程、益ゝ慥かに凡て此等の感じをなすのである。

第二には、吾人は凡て以上のやうなものを同時に輕業師の中に於て、さうして唯彼れの中に於てのみ感ずる。吾人は、一方に於ては彼れが之々に感ずるといふ意識、他方に於ては吾人の感情といふ兩者を並列して有しない之に反し感情は唯一あるのみである。一言で以ていふと、此の場合に於ても、曾て上に述べたやうな「同一化」の作用は起るのである。

さうして此の種の同一化作用は、たとひ吾人が輕業師でないといふ事を知得し居るにもせよ、又たとひ目視された運動が吾人に及ぼす效果を別にしては、吾人が得意でもなく自由でもなく、又自信的若くは不確實でもなく、更に懸念や失望に對する何等の理由を有しないにもせよ、尙存立するのである。

又此の如くあるといふ事に對しては、吾人が運動の目視、隨つて之によつて解發された內部的行爲によつて吸收支配されてあるといふ事が、常に條件である。此の如く吸收支配されて居る事が深ければ深い程、益ゝ多く、吾人の內部的有樣は、全然之により規定せらるゝのである。

四　感情移入作用に對する經驗の關與

身體的運動、又は內部的行動の一定の方法を表現する所の、身體の目視された形といふものゝ美的意義を以上

の如く説明する際には、吾人は一の假定から出發した。それは、運動を目視するといふと、その運動の實行に對する衝動が、直接即ち本能的に發生するといふ事である。吾人は既に云うたが、此の種の衝動は始めには盲目的である。されどかゝる運動を一度實行するならば、之は一の內容を取得する。今や、此の如く表象された運動の實現に向つての欲求並に內部的行爲といふものが發生する。次には第二の現象が起る。それは、運動の實行に對する欲求並に內部的行爲が、そのやうな欲求、行爲を自然に發生せしめ且つそれと結合して統一體をなし居るといふ情意狀態を喚起せしむるといふ事である。さうして又、此の場合に於ても、之を說明するのに、本能的連絡といふものを假定した。而も「本能」といふものを、此の如く二つの場合に於て持出すといふ事は、已むを得ない。何となれば、形といふものゝ視覺的形相に對して、筋肉運動上の表象、並に內部的行爲、更に進んでは內部的行動の方法が如何にして結合さるゝかといふ事は、經驗を基礎として居つては、說明する事が能きぬからである。されど其の此の如くあるといふ事は、かゝる本能に對し、經驗といふものが、補成し、豐富にし、形成し、純化しながら、添加されるといふ事を妨げない。かゝる經驗の事に關しては、今幾樣かの意義に於て之を述べねばならぬ。

先第一に下のやうな事を考慮すべくある。目視した狀貌、例へば　愕又は傲慢の狀貌は、今右に述べた所の、精神の別個の根元的裝置の爲に、それに附屬する情緒を吾人の中に於て發生せしむると。併し其の此の如くあるといふ事は、かういふ事を意味しない。吾人が今狀貌を目視する時に吾人の中に於て發生する驚愕又は傲慢の情緒が、根元的に、隨つて極幼の嬰兒が之を目視する時に於ても發生するといふ事を。本來吾人が今起す情緒なるものは、その特性の點に於て、吾人の現在の人格によつて制約されるものである。之は、吾人の人格が、既往幾年かの間に取得した個別的の形成といふものに依從をする。さうして又同時に、かゝる情緒は、右の狀貌のそれ〴〵特殊の性質に應じても常に變化をされる。而も狀貌なるものは、最も異種雜多なる變化を受け得るものなのである。

要するに、吾人の情緒、即ち內部的興奮の方法の形成、その精緻化及び多樣化は、孰れの場合に於ても經驗といふものゝ司る所である。けだし之若くは其のやうな內部的行動の方法の發生を促がす所の經驗の豐富があつて始めて、內部的行動即ち吾人の情緒生活の分化された方法なるものは作出せらるゝのである。吾人が今感じ得るやうな傲慢、驚愕等は、吾人既往の全體驗を基礎として、それ〴〵の特質を取得する。かくて一般的に、大人に於て觀察され得るやうな情緒なるものは、個人の發達中に於て發生する。さうして唯二三の原始的にして分化されざる情緒即ち內部的行動の方法のみが、根元的のもの、換言すれば、吾人の發達の最始に於て吾人の中に發生するのである。此の種の情緒は、吾人の心的生活全般が始めに然かあると同樣に、單一不分化のものと認められねばならぬ。さうして內部的興奮或は內部的現象の經過の此の如き單一不分化なる方法が、一定の運動に對する衝動をば根元的にそれ自身の中に包有するといふ事は、世の幼兒の示す所である。さうして又幼兒は、唯此の種の不分化なる情緒のみを始めに體驗し得る。此の故に、彼等は、此の如き情緒のみを、目視した他人の運動の中から「讀み出す」事が能きる。即ち此の運動の中に感情を移入し得るのである。その後、吾人の經驗が分化した情緒を發生せしむるやうになつた時に始めて、他人の運動の目視、並に之により喚起された模倣衝動に對し、かゝる分化し

た情緒が結合され得るのである。

之に關して重視すべきは、或る種類の情緒は、「根元的に」吾人の中に存しなくて、經驗を積むに隨ひ始めて發達するといふ事である。否吾人は勿論もつとかゝる後天的動力を高調せねばならぬ。そこで、他人の運動を目視する事によつて喚起された情緒が如何なる種類のものであるにもせよ、即ちそれが原始的のものであらうと、將た後來の經驗の發達せしめたものであらうと、孰れの場合に於ても、之は唯、前行せる「經驗」を基礎として始めて吾人の中に於て喚起されると言明せねばならぬのである。

如何なる情緒、即ち內部的運動の如何なる種類も、全然無から發生しない。各の情緒なるものは、既にその最始の發生に於ても、何等かの挑發、即ち內容を要する。歡樂といふ情緒は、或るものに對する歡樂として發生する。之は、此の或るものが、たとひたゞ心的に體驗された身體上の狀態であるにもせよ、尙かゝる或るものによつて喚起される。之と同樣に、失望、不快も、その最始の發生に對して、既に何等かの挑發、即ち內容を要する。而もかゝる挑發、內容となるものは、取りも直さず「經驗」であるのである。さうして一たび情緒が此の如き方法に於て發生した後に始めて、之は、その發生の最始の根據即ち內容が再び與へられなくとも、喚起され得る。之を例へていふと、他人の狀貌又は表出運動を目視する事、隨つて、その目視の中に存する自己の當該運動に對する衝動によつて、その情緒を喚起し得るのである。此の如くあるが故に、原始的の情緒と雖も、尙經驗、即ち正しく原始的なる經驗から發生するのである。更に又、他人の運動を目視して斯かる情緒を「內部的に模倣」するには、取りも直さず此の情緒を曾て發生せしめた所の特定の體驗即ち經驗を前提せざるを得ないのである。

以上の如く說明し來るといふと、容易く了解され得るやうに、一方に於ては情緒即ち內部的行動の方法と、他方に於ては、運動に對する衝動との間の曾述したる「根元的連絡」といふものは、同時により精密に解說せらるゝのである。此の如き連絡なるものは、運動に對する衝動と根元的に存立する情緒との間の連絡ではない。之に反し、かゝる衝動と發生する所の情緒との間の連絡である。此の連絡は實に根元的の裝置であつて、之が爲に、若しも情緒が發生するならば、一定の運動に對する衝動といふものは、直接それ自身の中に包有せらるゝのである。

さうして此の如くして、第一には原始的の情緒を發生せしむる所の經驗、第二には分化せる情緒を徐々に發達せしむる所の豐富なる經驗の外に、第三の最終のものとして、別個の意義に於ける經驗といふものが加はるのである。その別個の意義とは、かの表出運動の說明に關する曾て前に吾人が排斥した經驗說の唱ふるやうなものである。此の如き經驗說とても比較的に正しくある。けだし言語上の告知並に人間の行爲といふものも、吾人に對し、その內心を知らしむるのに役立つのである。かくて吾人は、かゝる行爲並に言語上の告知に伴ふ所の表出運動を觀察する事により、此等のものが表現する所の內心の有樣と此の表出運動とを結合し、さうして其の後の經驗を重ねるに隨ひ、兩者を最も密接なる統一體に迄綜織するのである。而も此の如くして、表出運動の意義の豐富と精緻化とは絕えず增進せらるゝのである。

此の如くあるが故に、吾人にして、人間の生活發現の理解、特にその美的理解をなさうとするならば、どうしても本能と經驗、即ち根元的のものと獲得的のものと、相互に結合せねばならぬのである。吾人は、人間の行爲といふものを可解的になさうと欲する時には、之と同樣の結合をなさゞるを得ざる如くに兩者の結合をなす。即

ち吾人の實際上の生活々動に於ても、自然といふものは、本能をば第一のものとして與へ、さうして之を補成したり容易にしたり精緻化したり矯正したりする事をば、後來の經驗に打任せる。かくて外界の印象と吾人自己の行爲或は行動との間の或る種類の連絡は、吾人の協力なしに、吾人本性の根元的裝置によりて基礎づけられてあり、さうして此の連絡は、吾人の知得し能はざる方法に於て働く。けれども他の進みたる連絡に至りては、經驗が加はりて同樣の働きをなさしむる。併し又如何なる場合に於ても、右の根元的裝置より來る連絡が確固たる基礎となるのである。

五　同情的感情移入作用と消極的感情移入作用

茲に擧げた「同情」といふ語は、單に感情移入作用といふものゝ別名であるやうに見ゆるかも知れぬ。成程吾人にして、感情移入作用といふ語をば、上來用ゐたやうな積極的意義に解釋し、之をば、自由なる內部的模倣作用となし居るならば、事實關係は實際に於て此の如くある。

けれども吾人は今、判然、積極的の感情移入作用と消極的の感情移入作用とを區別せねばならぬのである。之を例へていふと、他人の內部的行動が吾人を傷害する時と雖も、尙一種の感情移入作用は起り、その行動は吾人の心中に强制的に進入する。今やかゝる行動を吾人の中に於て體驗すべき傾向といふものが發生する。唯その特異となる點は、かゝる傾向に對し、吾人が同時に內部的に反抗するといふ事である。さうして之ぞ正しく消極的の感情移入作用といふものなのである。

吾人はかゝる消極的感情移入作用に關する事實關係をば、後に述ぶる問題を今茲に豫決して、言語並に言語的理解の範圍に屬する事實を假用して說明して見よう。假りに何人かゞ、吾人の知識に矛盾する所の判斷を下すとする。さうすると、吾人のかゝる知識は今現實的のものとなり、下された判斷に對向するやうになる。吾人は次に此の判斷を否定する。さうして其の此の如くするに就いても亦、吾人が聽取した判斷を共同的に體驗するといふ事が前提される。換言すれば、同樣の方法に於て判斷すべき傾向が、吾人の中に於て發生するといふ事が前提されるのである。かくて右の判斷に對する吾人の反抗、卽ちその否定は、吾人に突入しさうして突入する限りに於ては、吾人により體驗されたる判斷といふものゝ排斥となる。かゝる作用は、是消極的の知力上の共同的體驗、卽ち消極的の知力的感情移入作用たるのである。

ところが茲に問題となし居る所の消極的感情移入作用とても、全然之と同樣の事實關係をなすのである。吾人は、前に時々假定したやうに、自尊的でなく、之に反し傲慢の目付きをなす所の人間を目視するとする。さうすると、吾人は、かゝる目付き中に存する所の傲慢をば、吾人の中に於て體驗する。吾人はかゝる內部的行動卽ち內部的有樣を單に表象する許りではない。卽ち吾人は此等のものを知得する許りではない。更に此等のものは吾人に迫り來り、吾人の體驗中に進入する。けれども吾人は、內部的に之に敵對して働く。卽ち吾人の內部的本質は之に反抗し、吾人は傲慢なる目付きの中に於て、吾人自らの內部的の生活否定或は內部的の生活障害、換言すれば吾人の人格の否定を感ずる。此の故に、又之が故のみで、傲慢といふものは吾人を傷害する。吾人の不快の感情なるものは此の如き消極的感情移入作用中に於て根據づけられる。さうして此の場合に於けると同樣に、不快の感

情なるものは、いつでも、一の內部的行動が、吾人自らの本質と矛盾して進入するよりして發生するのである。要するに消極的感情移入作用なるものは、否定された積極的感情移入作用である。之はちやうど、かの否定判斷が、否定された肯定判斷であると同樣であるのである。

然るに吾人は、積極的感情移入作用をば、今又同情的感情移入作用と稱する。同情的感情移入作用の對象は美である。さうして消極的感情移入作用の對象は醜である。かゝる消極的感情移入作用なしに何等の醜の存しない事は、ちやうど積極的感情移入作用なしに何等の美が存しないと同樣である。美の感情なるものは、吾人が感官的事物に於て體驗する所の、積極的生活々動の感情である。之は自己肯定卽ち生活肯定の客觀化された感情である。醜の感情なるものは、吾人の自己の否定の客觀化された感情である。或は體驗されさうして客觀化された生活否定の感情たるのである。

六　美的「象徵」

最後に吾人は、以上兩種の感情移入といふ概念に對し、美的象徵といふ概念を關連せしむる。此の際吾人は、「象徵」(Symbol)といふものをば、記號(Zeichen)といふものから區別する。凡て記號とは、他の或るもの、卽ち被記號物が現實であるといふ事を吾人に言明する所のものである。例へていふと、烟は火の記號であつて、卽ち之は火の存在を吾人に認知せしむるものである。之に比較すると、「象徵」といふ語は、一方に於ては之以上、他方に於ては之以下を言明する。卽ち吾人は、一方に於て、依りて以て直接に或る他のもの卽ち欲求とか、內部的行爲とか、當該的の內部的有樣卽ち內部的興奮の方法とか、簡言すれば、吾人の內部的生活々動の方法を直接に體驗し得る所の被知覺物をば象徵と呼ぶ。次に他方に於ては、此等の內部的行爲及び內部的有樣が被知覺物中に於て現實であるといふ意識は、象徵といふものに必要とはなさないのである。

さうして若しも被知覺物中に於ける此の種の內部的行爲及び內部的有樣の現實又は非現實を少しも問題となさない場合には、特に之を美的象徵と呼ぶのである。

此の如くして、美的象徵といふ概念は、美的感情移入作用といふ概念と一致するといふ事が發見される。美的感情移入作用に對しても亦、感じ込まれたものが、吾人により吾人を感じ込ませられた事物中に於て現實であるといふ意識は問題となされない。同時に又、美的象徵といふ概念は、積極的の美的感情移入作用及び消極的の美的感情移入作用を包括するのである。

第四章　人間身體の靜止的の形

一　表出運動と靜止的の形

前章に於ては、吾人は先第一に表出運動に就いて語つて居つた。かくて自尊の樣子をする目といふものが、吾人の出發する實例であつた。此の際、「運動」なるものは、實際に於て、特定の可觀的の形であつた。殊に目の右の如き自尊といふ情緒の表出運動は、是目の周邊の形である。されど又、かゝる形たるや、直接に、內部的興

奮、即ち情緒上の要素を表現するものなのである。

而も此の如く自尊の表出運動を理解するのを學習すると同樣に、吾人は又、此の外の種々なる表出運動を理解するのを學習する。吾人は此等を美的に理解する事を學習する。換言すれば、此等の中に吾人の感情を移入するやうになる。即ち吾人は、幾多の表出運動、即ち傲慢、驚愕、恐怖、親愛、忿怒、悲哀等の狀貌の中に、吾人の感情を移入する事を學習するのである。

元來この目なるものは、貌語に對し最も多く役に立つものである。之に次いで役に立つものは口である。身體の此の他の部分に至りては、此等よりもより少く役に立つ。さうして表出運動の表出する所のものが、吾人に對し愉快或は不愉快なるに隨ひ、かゝる運動自體も、愉快或は不愉快、即ち美又は醜となる。されど斯かる形といふものが表出する所のものは、その中への感情移入作用が積極的であり得る程度に應じて愉快である。而も之はかういふ事を意味する。吾人が、その形の中に於て、吾人に於ける積極的のもの、即ち一の力、豐富、自由、換言すれば吾人の本質中に於ける斯かる積極的のものゝ無妨害なる自己活動を體驗し得る程度に於て愉快であると。又それを內部的に模倣する事が一の生活否定を意味する限りに於ては之は不愉快であるのである。

ところが此の如く述ぶると共に、先第一には、唯、內部的行動の表出に直接に役立つ所の形といふものゝ美並に醜といふものが、可解的になる。して又、本章の始めに揭げられた問題は、實はかゝる形を目標に置いてはゐない。之は一般的に、人間身體の形の美といふものは如何に說明さるべくあるかといふ事に向注して居る。さうして此の際の主要事項として、靜止的の形、即ち各の內部的興奮を除いた有りの儘といふものが思念されて居るのである。

併しながら又、表出運動の美及び醜の印象が存すると同時に、靜止的の形の美及び醜の印象も存する。吾人は嘗に、親愛なる樣子、即ちその內部的興奮の故に親しい目付きをしたり或は笑うたりする所の目、及び口といふものを認むるのみならず、更にその靜止的の形に於ても、親愛といふ性質をそれ自身に帶有する所の容貌といふものを認むる。これと同樣に、自尊の恒久的性質を帶ぶる所の容貌もあれば、又傲慢の各の情緒を起して居なくても、傲慢に見ゆる所の容貌、或は驚愕の各の感情なしに、驚愕して居るやうな容貌といふものも存するのである。

而も此の如くあるといふ事が如何なるものを言明するかは、敢へて疑を容るゝ迄もなく判明する。蓋し彼れが如き容貌の靜止的の形といふものは、親愛、自尊、傲慢、驚愕等の情緒が表現せらるゝ時に吾人が通常目視する所の樣子といふものに類似するのである。さうして此の如くして、靜止的容貌の與へる所の印象といふものは、同時に表現的樣子の與へる所の印象に類似する。更に又、此の樣子といふものが、その特定の內部的行動の印象の故に、愉快又は不愉快であると同樣に、之に該當する所の容貌の靜止的の形も、亦此の如くあるのである。

されど吾人は尙一步進んで次のやうに考慮せねばならぬ。如何なる容貌の靜止的の形と雖も、甲若くは乙の表現的樣子に、又種々の樣子が相互に類似して居る以上甲若くは乙の種類の樣子に、大なり小なり類似せざるを得ないと。さうして斯くあるが故に、その容貌といふものは、それ丈の程度に於て、表現的樣子の意義、即ちそれと共に結合されある內部的行動の印象を取得するに相違ないのである。

ところが此の際又かういふ事も起り得る。それは、その靜止的の形に於ける容貌といふものは、一部分は相互を打消しそれかというて同時に共通なる或るものを有する所の、あらゆる可能なる表現的樣子の合成物を提示するといふ事である。かゝる場合には、その容貌といふものは、それに相當する內部的行動に共通である所のものを表出する。特に吾人にして、一の容貌が、積極的の印象を有する所の表現的樣子、卽ちその中に積極的に吾人を感じ込み得る所のあらゆる可能なる表現的樣子に同一の程度に於て類似すると假定する。然る時には、かゝる容貌は美である。けれども之は、何等特定の擧示し得べき性質なしの云はゞ相殺された美、卽ち平均美である。此の種の容貌を稱して、吾人は「整正」なる容貌と云ふのである。

之と同樣に、吾人は或る容貌をば、特定の名稱を與ふる事の能きない醜と呼ぶ。かゝる容貌の中には、狡猾も傲慢も將た狹量等も存しない。之に反し此等凡てのものゝ或るもの、卽ち共通なるものが存する。之とて又一の醜である。

されど啻に目及び口のみならず、身體の他の部分と雖も、貌語に役立つ。さうして最後に又、吾人が旣に述べたるやうに、各の運動といふものは、何等かの方法に於ける表出運動である。さうして此の如くあるが故に、人間身體の形の中への感情移入の可能といふものも發生するのである。

二　「運動可能」の感じ込み

以上の如く述ぶるとはいふものゝ、人間身體の美的意義を理解する爲には、單に表出運動に訴へる丈では十分しない。蓋し斯かる運動が缺損する場合に於ても、その形の美的印象といふものは發生するからである。

如何にして此の如き事が可能であるかは、吾人にして、身體的形の目視に對しての、運動衝動の本能的結合といふ、前になした假定を今擴張するならば、理解する事が能きる。かゝる目視は、啻に目視した形を自然に現存するに至らしむる所の衝動(運動に對する)を喚起するのみならず、更に、之は、より一般的にいふと、目視した形と、事柄上の連絡或は生物學的連絡をなす所の右の衝動又は身體的行動の方法を喚起するのである。之は特にかういふ事を意味する。目視した形といふものは、その形が役立つとか或は其の形が指定されて見ゆるとかいふ運動に對する衝動又は行動の方法をも喚起し、次に、同時に當該的の內部的有樣をも喚起するといふ事を。

そこで此の如くあるよりして、表出の他の種類、卽ち感情移入作用の異種類が發生するのである。今や形といふものは、運動の可能を表出する。吾人はかゝる可能を形の中に感じ込む。されど之に關して留意すべきは、運動の可能といふものは、吾人に對しては運動の傾向であり、之は唯此の如きものとしてのみ、體驗し得べくあるといふ事である。

しかし之に關しては二種のものを區別すべくある。卽ち玆に取上げ居る運動といふものは、一方に於ては、固有の意義或は狹義に於ける表出運動であつて、之は身振的表出に役立つ。更に他方に於ては、實利的目的卽ち生活の目的に役立つ所の運動たるのである。

さうして尙此の外に、更に二種の事が附言されねばならぬ。第一には、凡て可觀的の形といふものは、啻に特定の方向の運動、或は特定の目的に向けられた運動に對する衝動をその中に包有するのみならず、更に、特定の

種類の經過の運動、卽ち有力又はより少く有力なる運動、輕易にして自由なる運動、又は妨害された運動に對する衝動をも包有する。換言すると、之は、運動に對する衝動のみならず、運動の放棄、制止に對する衝動をも包有する。結局之は啻に運動を要求するのみならず、それを禁止もするのである。

第二には、形の目視中には、個々の運動に對する衝動のみならず、運動の結合に對する衝動も存する。卽ち此の中には、進行の種々の方法、一運動から他の運動、又は一の部分的運動から他の部分的運動に迄の移行に對する衝動等も存するのである。

今玆に述べたものに對する實例は次の如きものである。人間の口といふものは、その可觀的形の爲には、主として、舌打をして嚙む事や、味うたり、舐めたりするに適し、又その顎骨の形は、力强き咀嚼をなすに適する。此の如くある結果、口に於ては、吾人は直接に、その可觀的の形の中に、此等の嚙んだり、舐めたり、又力强き咀嚼等の運動を感じ込む。換言すると、口を目視する事の中に直接に、此等の運動に對する衝動といふものが吾人に對し存するのである。さうして又之と共に、かゝる形の中には、此等の運動を發生せしむる所の內部的心態といふものが、吾人に對して存する。此の如くして、形といふものは、吾人に取りて、感官的、物質的のものとなり、且つ之と共に、積極的にして愉快なるものが除斥或は否定せらるゝ限りに於ては、口又はその周邊に於て、吾人に對して存し得る所のものは、低級又は凡俗的のものたるのである。

或は又、垂れる所の肩を吾人が目視すると假定する。此の肩は、若しも餘りに多く垂れて居るならば、不快感を起させる。何となれば、かゝる肩は、萎縮と放任、隨つて無氣力の形相を與へるからである。更に下方に向ひ居る所の肩は、頸の筋肉の自由なる運動、並に頸の自由なる高上及び運動の可能といふ印象を與へ、併せて自然に吾人の頸を自由に高上し、運動するに至らしむる所の內部的心態又は性格の印象をも與ふるのである。

目や口の次には、先第一に手といふものが、幾多の段階化された身振的表出の器官となる。之は同時に實利的目的の運動に對する特殊の器官である。之は、その形成法に應じて、大なり小なり身振的表出の器官並に實利的目的運動の器官となる。詳しくいふと、その形狀、全部及び部分の形、又は兩手の組立及び關係等により、時としては堅き把握、粗大なる物質的勞働により多く適し、時としては輕快なる遊戯、又は細微なる手細工、判別的觸覺等により多く役立つ。さうして又、手はその形成の如何により、當該的種類の人格の表現ともなるのである。

之と同樣に、身體の他の部分の形といふものも、吾人に取りて、運動可能の表出、或は之をより一般的にいふと、可能なる生活官能の表出となる。かくて、或る形に對しては、直接に、力、健全、運動の輕快、彈力性等の表象が結合し、他の形に對しては、無氣力或は萎縮、鈍重、無恰好等の表象が結合するのである。

之に關しては次の事が判明する。無恰好とか鈍重とかは、運動の一つの方法又は一運動から他の運動へ進行の一つの方法である。之は卽ち妨害され、困難にされた不自由なる運動である。此の故に、身體の或る部分といふものは、吾人がそれを目視する時に、運動の此の種の方法を包括するものとして吾人に見ゆる時に、無恰好又は鈍重に見ゆるのである。

此の際又次の事を附說せねばならぬ。吾人は以上の如き運動を啻に表象するのみならず、更にそれに對する衝動をも感ずる。吾人は、目視した身體により、運動に迄吾人を要求されたやうに感じ、さうしてかゝる運動に於

て妨害されたり、制止されたり、自由を奪はれたりするやうな感じを起すのである。

凡て此の種の感情移入作用に於ても亦、前に述べたやうに、本能と經驗とが共同して働く。されど此の所に於ても、本能といふ要素の意義は特に判明に現出するのである。

試みに人間の背部の形の中への感情移入作用に就いて考いて見たらよい。吾人は、吾人自らの背部の構成を決して見た事はない。さうして吾人が他人の背部を見る時にも、その構成が他人に對して意味する所の何物をも知覺しない。更に又かういふ事も言ふことが能きぬ。背部の此の如き構成により可能にさるゝ所の作業を觀察する事によつて始めてその意義を理解するに至ると。或は又、他人がその背部の構成の爲に何を爲す事が能き、さうして其のやうな形に於て如何に感ずるかを彼れから報告されて始めて此の如き知識を得る、と言ふ事も能きぬ。さうして此の如くあるにも拘はらず、吾人は背部の構成を理解し、而も直接に、且つ他人の右の報告の如き迂路を經ずに、理解する。吾人は、かゝる構成が包有する所の運動可能を直接に感知する。さうして此の如くあるといふ事は、此の場合に於ても亦、かゝる運動の實行に對する可感的の衝動が、吾人の中に於て活躍的になるといふ事を意味するのである。吾人は、思想に於て、運動の働き方を實行し、さうして之に相當する所の力又は無氣力、彈力性又は無恰好、優美又は粗野等の如き、目視された形に結合さるゝ生活々動の感情を起す。吾人は此の場合にも亦、本能樣の內部的模倣、時とすると又外部的模倣の一種を實行する。尙之をより判明にいふと、此の場合にも亦、吾人は本能的の感情移入作用を實行するのである。

三　感情移入作用の以上の外の可能

感情移入作用と性慾本能

右に於て吾人が假定した所の本能的の運動衝動なるものは、常に狹義に於ける運動衝動、卽ちそれが働く事によつて身體的運動を發生せしめたり又は發生せしむるであらう所の衝動たるのである。

されど世には又、かゝる運動衝動がもはや何等の働きをなさない所の形といふものがある。それは例へていふと、婦人の上體の形である。卽ち婦人の上體に特に固有である所の形である。之に對しては、前に述べた模倣說はいふ迄もなく適用する事は全然能きない。此の場合には、何等の運動的神經活動をば、斯かる形が發生せしめもしなければ又變化もせしめない。さうして此の形といふものは、吾人男子に取りては異他(フレムド)のものである。吾人は、吾人自らの中に於て、此の如き形の中に於て働き居る生活といふものを體驗する事が能きない。吾人は此の故に、吾人自らの中に於て此の生活を「同樣的行爲」する事も能きぬ。

之と同樣に、各の經驗的說明も之に對して適用さるゝ事は能きぬ。但し此の場合に於ては、唯その說明の或る一方法のみを指して居るのであつて、之は卽ち吾人が後の他の場合に使用しようとする方法である。そこで人によりては言ふかも知れぬ。今いふ所の形といふものは婦人の身體に屬する。之は此の如き活躍的全體といふものゝ一部である。さうして之が故に此の全體の生活を分享する。かゝる形は、婦人の身體の全生活の合經驗的帶有者である。此の故に、此の全生活が愉快である限りに於ては、此の形も亦美であると。

されど之に對しては二つの反對說を提出せねばならぬ。第一に、婦人の右の形を觀察したり、それが其の身體の全體に附屬するといふ事を目視したりする機會といふものは、多くの人に取つて甚だ僅少である。第二には、玆に云ひ居る形なるものは、如何なる場合に於ても美であるといふ事はない。之は同樣に又醜である事もある。さうして又、美なる形といふものがいつでも通常でないといふ事も疑を容れない。隨つて寧ろ醜といふものが、より頻繁に身體の全體に附屬し、さうしてそれが故に美に見えるといふ不都合に陷るのである。

そこで都合によると、此の場合に、容易く他の說明の方法が求められ居ると信ずる者がある。それは卽ち性慾本能を持出すといふ事である。一體性慾本能を美學中に持出すといふ事は、今日に於ては一種の流行になつたやうに見ゆる。而もかゝる流行は、今日の獨逸全體の倫理學上並に美學上の廢頽派の追ふ所のものである。吾人は此の機會を利用して、かゝる流行に反對して言明しよう。性慾なるものは、美といふものと寸毫の交涉をも有しない。美的感情の說明に對してかゝるものを持出す所のものは、美並に美的觀照といふものゝ意義を全然理解しない者である。之はちやうど、純潔なる裸體が道德に對して危險であるが故に藝術に於ても亦危險であるといふ事を警告する者と同樣に無理解である。かゝる無理解の者は、先づ裸體が自己の道德に對して危險であるのを惡れ、次に自己のかゝる粗野を他人に移植想像する事により、他人に對しても危險であると認むるのであると。

その實をいふと、玆にいふやうな婦人の形といふものは、他の一切の形と同樣に、その美をば感情移入作用の爲に取得するのである。而も感情移入作用なるものは、性慾本能とは全然沒交涉である。性慾本能に對しては、異性の特殊の形なるものは、可能なる現實的關係の目的物である。かゝる場合に於ける問題の趣旨は、形といふものが、その屬する所の人間に對してゞはなく、之に反し、かゝる人間に、一の異なつたるもの、特に異性に屬するものとして對立する所の吾人に對し、何を意味するかといふ事となる。然るに感情移入作用といふ問題の趣旨は、形がその帶有者に對し、勿論吾人の悟性上の言明に據らないで、吾人自らの感情上の言明に基けば、何を意味し、如何にその形に於て彼れが感ずるかといふ事である。或は之と同一の言明になるのであるが、若しも吾人が知覺した人間と吾人とを同一化し、それを觀照の對象として、その身體の形に停留しながらその中に沈潛し、隨つてそれに對立する所の吾人の自我、特にそれと性的に異なる所の自我を全然論外に置くならば、然る時に如何に吾人を感じ、如何なる生活を吾人が體驗するかといふ事になるのである。

之を簡言すると、人間身體の美的觀照に於ては、男子と女子との差別が、感官的性的のものでなく、隨つて性格上又は氣質上の差別でない以上は、吾人は決して男子でもなければ又女子でもない。此の際に於ける吾人が、此の如く感官的性的に異なつた個人でないといふ事は、ちやうど景色の美的觀照の際に、吾人が農夫でなく、樹木の美的觀照の際に樵夫又は大工でないと同樣である。此の故に、婦人の形の美的觀照も亦、婦人に對しては男子に對すると同樣の事柄である。ちやうど反對に、男子の形の美的觀照が、男子に對しても、婦人に對すると同樣の事柄であるが如くあるのである。

その此の如くあるといふ事は、啻に美的觀照の意義中に存するのみならず、日常の經驗と雖も、一度人間身體の形を美的に觀照した各人に對して言明するのである。吾人は美なる婦人の形に於て、一種特異に力强く、健全膨脹的にして且つ壯盛なる生活といふものを感ずる。吾人は此の如き目視された形以外の如何なるものに於ても

存しない所の身體的の快感を有する。而もかゝる快感たるや、吾人がそれ以外の人間としては決して起す事の能きないものである。換言すると、男子としては吾人は之を起す事は能きない。之を起すといふ事は、唯美的觀照の働作の中に於てのみ吾人に許容されてある。結局之は吾人現實の自我以上に出でての吾人の生活感情の豐富化たるのである。

さうして又、吾人の美感が全然右の如き働作に附着するといふ事は、吾人に取りて直接に明瞭確實である。吾人は、かゝる形を美的に觀照する際には、形を透視し、その特異なる生活に注目するやうに感じ、さうして之が爲に、吾人が之以外の場合に決して起す事の能きない快感といふものが吾人の中に起るといふ事を發見する。吾人は、今かゝる感情をば身體的の快感と稱した。されど此の語によりては、決して、吾人の身體が感ずる所の感情といふものが意味されない。之に反し之は一種特異なる自己感情及び生活感情であつて、之は恰も、他の場合に吾人の身體生活の經過から發生し、かくて吾人の身體並に身體生活に關渉し、或は之に結合する感情に類似するものたるのである。

尙此の外に、此の種の感情は、各の感情と同樣に、精神中に於て起る。さうして又、此等各の感情と同樣に、或る心的現象をばその直接の根據とする。一般に、各の感情は、心的生活經過の方法の意識表出である。或は之に伴隨する所の現象である。隨つて吾人が知覺した形を觀照したり、之に觀照的に沈潛したりする事により、此の知覺した形といふものは、吾人の心的生活經過を規定する。かゝる形は、此の心的生活經過に對して衝動を與へたり、特殊の韻律を附與したりする。吾人は此等の衝動や韻律を此の形の中に於て體驗し、此等をば形の中に感じ込む。吾人は前に特に言明した。吾人が今云ひ居る婦人の形に於ては、力、健全、膨脹的にして且つ壯盛なる生活を感じ込むと。而も此の語によりては、可感的の力と健全、卽ち可感的の生活といふものを意味せしむる。さうして吾人は、たゞ心的のものゝみを可感的のものとなし得る。身體上の狀態、身體生活の「韻律」の種類なるものは、此等が心的のものになるとか、或は心的の生活經過を規定するとか、吾人の心的存在に、力や興奮や豐富や自由を與ふる限りに於て、吾人に對し可感的になる。

此の如き衝動が、吾人の感情を別にして、如何にあるかとの事に關しては、吾人は何物をも知得しない。吾人は之をば唯、正しく感情の中に於て有する。されど此の種の衝動は、如何なる場合に於ても、吾人が美的觀照の外に脫出し、形の中に立止まつての觀照を止め、さうして此の如くある事の代りに、異性のものとして知覺した形に對立する時に體驗する所のものとは、全然異なつて居る。之を簡言すると、性慾を構成し居る所の衝動とは異なりたる種類のものであるのである。

更に又、かういふ事も附言し置かねばならぬ。吾人その人が心的の生活經過の彼のやうな特異なる韻律をば、知覺した形の中に於て感ずる。形の帶有者自體が此の種の或るものを感ずるや否やの如きは、全然無關心的の事であると。

茲に述べたやうな事實關係も亦、吾人が上來述べたものに對しては、比較的に新奇なものである。卽ち此の中に於ては、人間の形の美を吾人に說明した所の原理の新奇なる擴張といふものが存するのである。吾人は今知得する。目視した形は、吾人に於て、啻に模倣に對する衝動、卽ち他人に對して正しく斯かる目視した形相を發生

せしむるといふ運動に對する衝動を喚起する許りではない。之は又、知覺した形が役立つ所の運動に對する衝動を喚起する許りではない。尙此の上に、此の形は、心的衝動全般、心的現象及び心的生活經過の方法に對する刺激をも發生せしむる。前種の運動衝動は、心的のものから特定の各個の身體的現象を發生せしむるといふ效果を有する衝動であつた。之は同時に間接的に、一種の內部的心態、卽ち內部的行動に對する衝動、言ひ換へると、かゝる衝動を自然的に發生せしめさうして結合して一の心的全體を構成するといふものに對する衝動であつた。然るに今や吾人は知得するのである。身體的の形を目視する事によつて起る衝動は、直接に、かゝる內部的行動卽ち心的生活經過の方法に對する衝動であるといふ事を。

吾人は此の後種の衝動を設定する事により、前旣に述べたやうに、吾人が姑らく滿足して居つた模倣の概念から全然遠かるに至るのである。吾人は婦人の形を觀照する際には、全然何ものをも模倣しない。吾人は吾人が發見する所の一の現象を反復しない。之に反し、かゝる形の觀照中に於て自發的に、さうして又此の觀照のみよりして、一種の生活活動の方法が發生し、さうして之が此の形に迄結合さるゝやうに見ゆる。感情移入作用といふ概念にして、此の場合に於ける程多く直接判明に、模倣に對して反對に立つ事はない。

さうして又、經驗的說明をも吾人は除斥した。卽ち婦人の身體に迄一定の形の合經驗的に聯屬といふものは、吾人が上に述べたやうに、寧ろ醜なる形が吾人に美に見ゆるといふ不都合に陷らしめざるを得ないのである。

四　經驗を假りての感情移入作用の完成

以上の如く述べ來るとはいふものゝ、經驗といふものが、他の場合に於て、合經驗的聯屬の意義に於て働きをなすといふ事は、少しも除却されてあらぬ。之を例へていふと、人間の耳は吾人に對し、それ自體としては特に活躍的の事である。之は、啻に何等の運動をなす事が能きないのみならず、更にそれを觀照する事により吾人をして、特異にしてその中に鼓動し居る固有の生活の感情を起さしむる事も能きぬ。されど耳なるものは、常に、身體、特に顏面の全體に附屬する。そこで今吾人が、耳の特定の形及び大さが、或る顏面、而も先第一に目及び口の構成の爲に吾人に心持よく見ゆるといふ顏面と常に結合されてあるのを發見すると假定する。然る時には、耳の此の如き特定の大さ及び形も亦、幾分心持よく見ゆるのである。之と同一理に、若しも吾人が、常に不快なる性質を有する所の顏面に結合されてあるのを發見するならば、その耳の形及び大さは、吾人に對し不快なる性質を取得する。卽ちそれは醜に見ゆるのである。今之に關する一例を擧げ、劣等なる人間又は犯罪者の顏面が、常に突出せる耳を有すると假定するならば、その耳といふものは、劣等なる耳又は犯罪者的の耳となり、かくて之と共に、耳自體が美的にもかゝる押印を受くるやうになるのである。

ところが吾人は、之に對して直に、玆にいふやうな意義に於ける經驗の影響を尙一層直接明瞭に示す所の、身體的形の美的判斷に關する尙他の事實を附說しよう。或る容姿、例へていふと、目或は鼻の或る種類の構成、並に胴及び四肢の部分の或る種類の形及び量關係といふものは、子供に特徵的なるものとして吾人に知られてある。そこで此等のものにして、一たび斯かる特徵を取得したならば、吾人は大人に於て此等を發見する時にも亦、此の特徵を附與するのである。或は又、婦人の容姿が男子のやうに構成されてあるとか、又は男子の容姿が婦人の

やうに構成されてあるとかいふ時にも、關係は異ならない。吾人は此の兩場合に於て、內部的必然性を以て、吾人に知られたる子供又は婦人の本質的特徵をば、大人又は男子に迄移植する。たゞ此の被移植物が、移植せらるゝ所の連絡中に於て、異他無緣的にあり、或はその連絡體の全性質に合經驗的に矛盾するが故に、子供のらしく、又は婦人のらしく見えないで、之に反し子供やうに又は婦人やうに見ゆる許りなのである。兎に角此の場合に於ても、前述の場合に於けると同樣に、經驗といふものが同一の方法に於て働くといふ事が了解せらるゝのである。

次に又、之と同一理で、動物の構成に類似して居る人間の構成は、動物やうに、隨つて吾人が人間に對して要求する所のものに矛盾するやうに感ぜられる。此の際に於ける前提も亦、吾人が、動物の形をば、動物やうのものとして、卽ち動物的本質の表出として、既に知得し理解し了り居るといふ事である。

最後に又、身體各部の力と作業力とが、その大さ及び形によりて制約さるゝといふ事に關しての一般の器械的經驗も亦、人間の身體に關する吾人の印象に影響を及ぼすのである。

されど、之に關しても、吾人は、本章に於て人間の感官的顯現の美を考察する始めに於て述べた注意を再び想起する事にする。それは卽ち、今此の所では、その感官的顯現の美の特殊の條件を問題として居るといふ事である。けだし人間の身體なるものは一の自然物である。さうして此の如きものとしては、之は同時に、自然物の美の一般的條件の下に立つから、此の如く想起するのである。

しかし此の種の一般的條件が、人間身體の美の本章に於て述べたやうな特殊の條件と並列して、何等の程度迄考察され得るかは、一般の自然物の美の條件を論ずる所の次章に於ける講究を見れば判明するのである。

五　人間身體の統一體

吾人が人間の形より取得する所の美又は醜の印象の特殊の條件は、上來縷々述べたもので盡きて居るやうに見ゆる。實際に於て各個の形に關しては此の如くある。されど之と同時に、如何なる補說が尙必要であるかといふ事も、それと共に概說されたのである。

本來人間身體の美なるものは、あらゆる種類の美の集積したものではない。之に反し之は唯一の美である。そこで啻に部分が美であるのみならず、全體といふものも美の性質を有する。否寧ろ、部分といふものは、唯全體の中に於てのみ、或は全體の部分としてのみ、その美を有する。吾人は前既に述べた。部分なるものは、或る全體の中に於ては美であるが、他の全體の中に於ては醜である事があると。各の部分は、全體の連絡の中に於て始めてそのやうなものであり、又その意義を有する。假りに或る部分が單にそれ自體として吾人に與へられてあり、之が例へば單にそれ自體として藝術的に表現されてあるとするも、尙吾人は、之をば全體の一部として知得し觀照する。人間なるものは正しく一の個體である。さうしてその凡ての活動法なるものは、吾人が「個體」といふ語により思念する所のかゝる絕對的統一體といふものゝ活動法たるのである。

かくて今や、人間の外部的顯現に於て吾人に提示せらるゝやうな生活々動が、自然的であつて且つ何等の內部的矛盾なしに、同一の個人に附屬するやうに見ゆるや否やといふ事が問題となる。而も唯此の如く見ゆる場合に

於てのみ、全體及全體中にその位置を占むる個々のものが、美となるのである。

さうして此の如く美となる爲には、此の種の生活々動が如何なる性狀のものでなければならぬかといふ事は、經驗、而も結極する所吾人自身に於ける經驗が吾人に言明するのである。即ち經驗なるものは、如何にしたなら人間的の生活々動がそれ自身の中に於て合法的に連關し、さうして如何にしたなら之がそれ自身の中に於て矛盾なく一致するかといふ事を、吾人に教告する。實に此の如き經驗からして、全體といふものゝ美、並に之と共に人間の外部的顯現の部分の美といふものが、始めて吾人の中に於て發生する。かゝる顯現はかういふ場合に美である。即ちそれは、吾人の觀照する所の生活々動の凡ての方法が、直接自明的にそれ自身の中に於て矛盾なき一の全體、隨つて內部的自由なる生活々動の系統に迄結合せられ、かくて斯かる全體中に於て、吾人が內部的自由なる人格としての共同感情を起しながら、吾人を體驗し得る場合なのである。

六　右の言明を立證する所の諸種の經驗

右に述べた見解は、それ自身の中に於て明瞭判然たるものである。されど二三の特殊の觀察は、之を尙確然立證するのに役立つ。かの表出運動といふものは、吾人攻究の出發點であつた。之は、心的のもの、簡言すれば人間に於ける最も內部的なるものを表出するに就いての特殊の手段である。吾人はかゝる最も內部的なるものを此の表出運動の中に感じ込む。して又、表出運動の豐富や種々の段階は、同時に、當該的の豐富にして細微に段階化された感情移入作用を可能ならしむる。此の如くあるが故に、人間の外部的顯現の美の印象に對しては、先第一に、かゝる表出運動の帶有者として吾人に取りて重要である所の部分といふものが、貢獻をなさゞるを得ない。さうして斯かる部分とは、前述せる如く、目及び口、並にそれ〴〵の周邊の共同的表出をなす部分である。

實に人間の美の印象といふものは、最も多く又最も直接に、此等の部分によつて規定される。之と同樣に、此等の部分に於ける醜は、先第一に且最も直接なる方法に於て醜と見ゆる。此の際、目並にその周邊が最も多く働くといふ事は、吾人が人間全體をば「ゲジヒト」(Gesicht)(視覺といふ事を表はすと同時に容貌といふ事をも表はす語)と呼び、かくて視官から稱名するといふ事を想起すれば、一層判明するのである。

さうして目と口並にその周邊は、同時に、最も多樣にして又最も細微に段階化された表出運動をなすのに適する。此等のものゝ狀形に於ける僅少の差違は、かゝる狀形により表出せらるゝ所の情緒の大なる差異を示す事になる。隨つて又、美の印象を消滅せしめたりそれを醜と變ぜしめたりする爲には、此等の狀形の最も僅少の差異で十分する。殆んど氣付かれないやうな此等のものゝ差異の狀形も、美的に顯著なる印象を發生せしめたり之を消滅せしめたりする。之に反し、身體全體の大なる形の構成が甚だしく變更するも、美的意義が之が爲に著るしく變更されたり、又は反對のものとされたりする事はないのである。

同時に、經驗といふものが感情移入作用に對してなす關與からして、美の感情の發達といふものも可解的になる。即ち兒童は、勿論人間の外部的顯現に對し、時としては快感を起したり時としては不快感を起したりする事が能きる。けれども又、分化された美感といふものは、經驗により彼等が後天的に獲得せねばならぬといふ事が可解的になる。均しく又經驗のかゝる關與からして、諸種の美に對する吾人の感情が、人間的の生活々動の如何

なる方法に平素留心し、さうしてそれに對して價値を附與する事を學習したかといふ事に依從するといふ事も、可解的になるのである。」

第五章　自然に對する感情移入作用への移行

一　美的價値

美の感情なるものは、之を一般的にいふと、生活感情である。之は、生活可能及び生活々動の力とか豐富とか內部的一致とか又は自由とかに對する快感である。或は之は、無妨害なる生活營爲に對する快感である。醜の感情なるものは、生活々動或は生活可能の貧弱、無力、內部的反對、衝突、矛盾等に對する不快感である。或は之は、妨害若くは萎縮された生活營爲に對する不快感である。此の種の生活及び生活營爲なるものは、人格卽ち心的個人の生活及び生活營爲である。更に又、上に曾て語つた身體的快感も、心的生活經過の或る方法に對する感情である。けだし身體的の力や健全や壯盛なる生活といふものは、吾人に對しては、之が心的生活經過の增進せる力とか健全とか自由とかを來さしむるか、又は此等を意味する限りに於てのみ體驗さるべくあるからである。

此の際吾人は、容易く了解され得る如く、生活といふものと無妨害なる生活營爲といふものとを區別する。先づ生活とは、活動或は活動の可能である。之は、生活力の存在及び發動、その豐富及び有力にしてそれ自身の中に於て一致せる官能である。之に反し無妨害の生活營爲とは、個人が目標とするものゝ實現、成功、その需要及び欲求をば、彼れが遭逢したり又は受領したりする所のものによつて滿足せしむるといふ事である。之は自己享樂である。さうして之は、柔弱、萎縮、遲緩等でなく、之に反し人格の力、豐富、自由、內部的健全等がその中に表現せらるゝ限りに於て、愉快であり、又美感の根據となるのである。

吾人は又、美と醜との代りに、積極的の美的價値と消極的の美的價値といふものを語る。

ところが價値の感情の事に就いては、既に本書の第一篇の始めに於て述べた。之は任意の快感ではない。その證據には、喜劇的の情況といふものは愉快であるけれども、その快感の高さに相當する價値を有しないからである。

されど吾人は今「美的價値」なるものをより精密に規定しよう。それに就いては、先づ一般の價値なるものを規定してかゝらう。世には二種の價値がある。卽ち一は人間的價値であつて、他は人間に對する價値である。前者はそれ自身に於ける價値卽ち「自己價値」である。後者は比較的の價値卽ち「效果上の價値」である。更に、それ自身に於て價値あるものとは、人間、詳言すれば、彼れの中に於ける積極的のもの、卽ち彼れが人間である事に對して積極的の貢獻をなす所のものである。さうして正しく此の如くあるから、かゝる積極的のものゝ各の無妨害なる生活營爲といふものも亦、それ自身に於て價値あるものである。之を一言で以て規定すると、それ自身に於て價値あるものとは、生活及び各の積極的の生活々動である。さうしてかく一言で以てなした規定といふものは、前種の規定よりもより進んだるものではない。何となれば、吾人は、生活といふものをば、直接に唯、人間的のものとしてのみ知得し、さうして之以外に吾人に對して存立する所の各の生活なるものは、吾人により、人間的の

生活から假り來られたものであるからである。

次に「效果上の價値」の帶有者たるものは、生活及び生活可能を進捗する所のものである。換言すると、人間の中に於ける積極的のもの、或は人間以外にありて斯かる積極的のものと同種なるものをば、作出したり、高上したり、又は此の如きものゝ自由なる生活營爲に役立つべく適當してある所のものなのである。

之に反し無價値とは、生活可能の各の否定、並にかゝる否定に役立つ所の一切のものである。

ところが前種の價値が常に美的價値である。之はそれ自身に於ける價値である。尙此の外に、美的價値の特性といふものは、それが吾人のみに對して發生し、さうして美的觀照の中に於て存立するといふ事である。

「美的價値」の此の種の意義に關しては、吾人は直接の意識を有する。吾人は、かゝる價値か、感官的のものに附着しないで、一の人間的のもの、卽ち人間の內部に存する生活又は生活營爲に關係するといふことを體驗する。吾人は婦人の身體の形の事に就いて述べた。若しも吾人にしてその美の印象を受納する場合には、云はばそれの形を透して一の生活に迄留意すると。さうして吾人は吾人が此の如き事をなすのを知得する。或は又、或る目にして吾人に美しく見ゆるならば、吾人は、目の形や色を透して、可感的に此等のものから吾人に語られる所のものに迄留意するのである。吾人は此の際、形とか個々の線とか平面とか、線及び平面の屈折とか色とかに、固着しない。吾人は斯かるものに關し可能的に確實なる形相を取得しようと努力しない。之に反し吾人は、之から進んで、內部的の或る他のもの、卽ち右等の如きものゝ外に存する所のものに到達しようとする。さうして之が正しく事實であるといふ事をも知得する。

尙此の外に、美的感情の他の特質といふものも存するやうに見ゆる。吾人は、吾人自らをば、或る深さに於て興奮されたやうに感ずる。吾人は、吾人自ら、大なり小なり、全體に於て卽ち全體的本質に於て、美の中に引入れられたやうに感ずる。併し此の如くある事とても亦、同一の事柄、卽ち感情移入作用といふものゝ他の一面たるに過ぎない。蓋し、吾人が美なるものゝ中に引入れられて感ずる所の吾人自らの人格なるものは、正しく、直接なる被知覺物を超越して、それの中に於て發見する所のものであるからである。

そこで、玆にいふやうな「深さ」といふ要素により、「美的價値感情なるものが、かの喜劇的情況に對する快感と、原理上區別せらるゝのである。之と同樣に又、各の感官的快感、例へば甘い味とか心持よい皮膚のくすぐりとか、觸接する物體の愉快なる溫度とかに對する快感とは、美的價値感情は異なる。此等の快感に於ては、吾人をして引入れられたやうな感じを起さしむる所の何等の內部的のもの、何等の深さといふものはない。味覺とか皮膚のくすぐりとか溫度とかは、唯正しく吾人が感覺する所のものである。吾人にして斯かる感覺の內容を得たならば、それで凡ては終る。此等のものゝ中に於ては、凡ての美の中に存する」やうな進んだる或るものが、決して存しないのである。

さうして又、吾人は、甘い味とかいふやうな單に「心持よいもの」によりても、美に該當するやうな方法に於て感動されるやうに感ずる。併し此等のものが、唯外側面、卽ち單に表面を有すると同樣に、此等のものは唯、吾人の外側面、卽ち云はゞ吾人の本質の表面のみに接觸するのである。吾人は美的有價値のものに於けるやうに、內容をより十分味ふ爲に、より深く進み、吾人自身の中、隨つて同時にその事物の中により深く入らうとの壓迫

に逢はない。之に反し、向ふとこちらとの二つの表面が觸接するならば、それで以て凡ては終らるゝのである。

かくて美的事物、即ち「美」に於ては、感官的の所與物中に「存する」所のものゝみが、美的事物の「價値」を構成する。凡て一の感官的所與物の美的價値の根據なるものは、此の如く「その中に存する所のもの」、即ち一の內部的のものである。而もかゝる內部的のものは、いつでも吾人の自我である。美的價値意識なるものは、常に事物並に吾人の中に於て、吾人が價値を享樂する所の深さの意識である。換言すると、事物の中に於て吾人自らを享樂する所の深さの意識であるのである。

此の如き深さ、並に事物及び吾人の中に益ゝ深く進み入らうとの、吾人によつて感知された該當的の壓迫、即ち事物の中に吾人が引入れられてあるといふ事は、何處如何なる場合に於ても、美的感情を特徵づける。かの心持のよい味に對する感覺的快感と同種なるやうな美的感情なるものは、世に決して存しない。

感情的體驗の此の如き特質、各の美的感情に於て同種的なる氣分發生上の方法といふものには、更に又、同種的の實際上の事實關係といふものが、該當一致せねばならぬ。此の故に、それ自身に於て同種的なる美的感情が、或る場合、例へば人間の身體に於ける場合には、上述の如く吾人自らを美なるものゝ中に「感じ込ませたり」、或は吾人々格の全面又は一面を美なるものゝ中に於て發見したりする事によつて發生し、他の場合には、被知覺物として吾人に全然對立したり、又は吾人に起生したりする所の被知覺物中に於て、直接に、右の如き人格的要素の共働なしに、その發生の根據を有するといふ事は能きぬ。更に又、美といふ語は、或る時には人格的內容を以て充實されたもの、他の時には斯かる內容を缺如する單なる感官的のものであるといふやうな根本的に異なるものを表示する事は能きぬ。美といふものは、その終極の根據に於ては、いつでも同一の美である。美の享樂はいつでも同一の享樂である。美を作出しその享樂を可能になす所の藝術なるものは、如何なる場合に於ても、同一なる人間行爲たるのである。

されど又、一切の美的感情の同種的の根據なるものは感情移入作用である。さうして一切の美は、かゝる人格的生活及び生活營爲の「象徵」であるのである。

二　動物界への感情移入作用

以上のやうな感情移入作用即ち美的象徵化をば、吾人は尙少しく進んで今說明し理解せねばならぬ。吾人は先第一に動物界を一瞥して見よう。吾人は通常動物をば精神あるものとして觀照する。之に就いては何人も疑はぬ。吾人が動物の精神生活を認むるのは、唯吾人が、動物の生活發現に對し、吾人のと同種類なる精神生活、即ち自我といふものを根據とならしむるからであるといふ事を。かゝる精神生活は、その源泉からいふと、吾人自らの精神生活である。吾人は吾人自らの精神生活を動物の外部的顯現に對して、啻に表象し込んだり或は思念し込んだりするのみならず、更にそれをば內部的に體驗する事により、動物の外部的顯現は美的に可解的になり、かくて之と共に美的意義を取得するのである。

而も何故に、人間の外部的顯現の次に、動物のそれが、特に吾人の感情移入作用の直接の對象となるかとの事は、容易く判明する。蓋し動物の生活發現並に動物の身體の形なるものは、吾人のに最も多く比較し得べくあるか

らである。けれども之は同時に、之とは異なつて居る。此の如きが故に、吾人は、動物の外部的顯現の中に、吾人が人間の外部的顯現の中に感じ込むと同一種類の自我を感じ込ませない。之に反し、吾人は此の自我をば、動物の形の他樣なる性狀に該當するが如くに、變化する。さうして斯かる變化を加へられた感情移入作用が奏功する程度に於て、動物といふものは、吾人に對し、その特殊の美的意義を有するのである。

されど此の如くあればとて、吾人が動物の運動及び作業力に關し、動物自體に於てなす所の經驗といふものが、右の美的意義に對し貢獻をなすといふ事は、決して除斥されてあらぬ。之に反し包有されてあるのである。併しながら結局する所、かゝる經驗の說明といふものは、吾人が吾人自らに於て經驗した所のものゝ上に基礎する。吾人に對し、一たび、人間に於ける運動及び形、特にその身體の可觀的作業にして、內部的生活々動の方法に對する象徵となつたならば、之と共に吾人は、動物の生活發現をば、それに該當する所の內部的のものや力や敏捷や狡慧等によりて解釋し得べき規準といふものを得るに至るのである。

之に關しては吾人は此の上尙進んで論究をなさぬ。されど唯二つの事だけは附說して置きたい。第一に、上述した事柄の證明といふものは、吾人が、吾人のに最も多く類似して居る動物の形の中に、最も確實に吾人を感じ込ますといふ點の中に存する。併しその此の如くあるといふ事は、直に此のやうな形が特に吾人に對し美に見ゆるといふ事を意味しない。或る動物は、一方に於ては、その形の中に、吾人のと同種的である所の生活を感じ込むやうに高度に吾人を强制し、他方に於ては、此の如き事をなすのを禁止する。かゝる動物は、吾人に取りて、それ自身に於て矛盾する所の、人間の澁面卽ちゆがみづらとして、特に醜に見ゆるのである。

第二には、此の第一の事と關連するのであるが、或る動物、例へばその「純正種に屬する所のもの」ゝ外部的顯現は、吾人に對し、特にそれ自身に於て一致し、さうして十分なる特徵を有する全體といふ印象を與へる。然るに他の動物に至りては、かゝる統一的に完結された特徵の印象を缺如する。吾人は此の如きものをば、無特質のもの、或はそれ自身に於て矛盾を以て滿つるものと呼ぶ。さうして此の事が如何に解釋さるべくあるかは、人間身體全體の美に關し、吾人が前に爲した注言からして判明する。卽ち十分なる特徵を有する構成とは、その形の中に於て表現せらるゝ所の生活々動或は生活々動の可能をば、一のそれ自身に於て矛盾なき全體に迄統括し居るといふやうな構成であるのである。或る種類の生活々動、或はかゝる生活々動の可能は、全體に於て、又はその動物が稟有するやうに見ゆる所の生活々動の系統に關して、便利であつて、それに適合する。或は適合しない。されど之に關しても、結極する所、吾人が吾人自らに於てなした所の經驗といふものが根據となるのである。

三　無生物の「生活發現」

吾人は今より進んで、無生物の世界、卽ち狹義に於ける物といふものゝ世界に迄、移り行いて攻究して見よう。此の際吾人は先第一に、自然界の物に迄想到する。されど玆に述ぶる所のものは、人間の藝術及び藝術的技能の產物に對しても、事柄の性質上適用を許容する限りに於ては、適用せられ得るのである。

吾人は此の場合にも亦、音から出發する。自然界に於ても、到るところに音といふものは存する。吾人は樹木の呻吟したり、暴風の怒號したり、木葉のがさ〳〵と鳴つたり、小河の潺湲たるのを聞く。更に石は、若しも

釘がその中に打込まるゝならば、きしる音を立てる。その他之に類するものは、何程でもある。されど此等の音たるや、吾人の情緒上の音と同種ではない。併し可比較的にはある。隨つて兩者は共通なるものを有する。さうして此の共通なるものが存する程度に應じて、此等は、吾人の告知的衝動から發生し、さうして該當的の情緒上の要素をその中に帶有するやうに見える。併し結局する所、自然界の物が發せしむる所の一切の音なるものは、それが正しく音である限りに於ては、吾人々間の音と、少くとも同種的のものである。此の故に又、結局、一切の音中に於ては、吾人により發せられた種々の音に共通である所のものが、存するやうに見えざるを得ない。さうして斯かる共通のものとは、取りも直さず、一般の內部的のもの、人間的のもの、人格的のものゝ告知といふ事である。かくて吾人が自然界に於て聽取する所の音なるものは、自然を活躍せしめ、之を人間化し、吾人自らの人格と同質なるものを作出せしむる。此等の音は、特に自然界に於て、吾人をして、內部的活動、自發的種類の活動、或は苦惱に對るす反抗の活動、又は苦惱の活動そのもの、若くは屈服の活動を發見せしむる。換言すれば、行動或は反動の活動を發見せしむる。此の如くして、例へば、きしる音を立てる所の大理石は、恰もそれに無理に要求された酷遇に對して反抗をなすやうに見えしむるのである。

されど此の場合に於ても亦、音を以てする言語といふものは、運動とか可觀的の形とかを以てする言語に比較すると、豐富といふ點に於て遙に劣る。かの樹木は、太陽の炎熱の下には、その頭を垂れ、さうして爽快なる雨が來る時には、その狀恰も吾人と同樣に、再び自由に高上する。更に雲とか川とかの急進は、勿論吾人の急進とは異なるけれど、それかと云うて尙一の急進たるを失はない。卽ち之は雲や川そのものから發する所の運動たるのである。して又、かゝる運動は、吾人が吾人に於て發見する所のもの、卽ち內部的衝動、欲求、意志、簡言すれば活動性としてのみ、吾人に對し可解的にある。さうして吾人は、自然界に於ては、吾人の運續的の意志的衝動から發するものと同質なる所の姿勢や態度や向注といふものを發見するのである。樹木とか岩とかいふものは、吾人が起立したり高上したりすると同樣に起立し高上する。樹木は吾人が吾人の腕を延ばすと同樣にその枝を延ばす。而も此の種の起立や高上やは、吾人に於けると同樣に、重力の打破、卽ち之に反抗しての固持たるのである。ところが樹木や岩は、吾人の如くに、勇氣を鼓したり重力に反抗して働いたりする事なしに、如何にして之を爲す事が能きよやうや。蓋し何人も此の如く思惟するであらう。

四　人間化の衝動

以上のやうな場合に於ては、人間化といふ作用が直に可解的になるやうに見ゆる。卽ち之は、吾人が自然界に於て觀察する所の形や運動が、吾人自ら發生せしめたり、又は吾人に於て發見したりする所の運動や形と類似するといふ點からして、直接に發生するのである。蓋し、一度人間の外部的顯現、その音や形や運動にして、吾人が吾人の中に於て發見する所の生活を以て充たされたならば、吾人は、自然界に於ける類似せる音や形や運動を、同樣の方法に於て取扱はざるを得ないやうになるのである。此の如くして、吾人は、吾人の人間化の作用に於て、人間の外部的顯現から始めて、段階的に、動物界及び植物界を通じ、終に無機物の世界に迄進行するのである。

されど吾人の人間化の作用は、玆にいふやうな限界を超越して遙に進行するのである、そこで、結極する所、自然界に於ては、吾人の人間化の作用を許容しない何物もないやうになる。自然界に於ける何等の存在物も現象も、同樣的に感じながら吾人をその中に移入しようとの吾人の努力を免がれない。さうして此の際吾人は、此の自然界に於ける形や運動が、人間身體の形や運動に類似するや否やなどは、常に措いて問はないのである。

自然界なるものは吾人に對し到る所活躍的にある。卽ち既に述べたる如く、孰れに於ても吾人は、活動や受動や欲求や行爲や堪忍を見る。否寧ろ、吾人は、目では此等凡ての何物をも視ない。吾人が目で知覺する所のものは、單純なる存在と現象とである。此の外のものに至りては、吾人自らが附加した物であるのである。

然らば何が吾人を驅りてかゝる人間化の作用をなすに至らしむるであらうか。吾人は之に關しては、二個の動力、卽ちいふ迄もなく密接に關連する所の二個の動機といふものを指示する事が能きる。第一には、凡そ如何なるものと雖も、吾人自らの欲求、行爲、堪忍、最後には、吾人の愛と憎と程、感情的に吾人に近いものはなく、又是程多く關心的にして吾人に取りて重要なるものはない。吾人一切の快感なるものは、此のやうな生活といふものに對する快感であり、一切の不快感は生活否定に對する不快感である。さうして生活に對するかゝる快感は、自然的に、かゝる生活を增加しようとの快感となる。詳言すれば、斯かる生活を到る所に存在するものとして表象し、さうして自己の生活に基いて完成しようとの快感となるのである。

第二には、凡そ何ものと雖も、特定の意志及び內部的行爲、吾人の內部の特定の興奮からして、特定の音や運動や姿勢や態度が發生すると解釋する事よりも、より自明なるものはない。吾人の生活發現及び外部的の意志的行爲は、吾人に取りては、此の如き內部的行動の方法から發生するものとして合悟性的に可解的にあるやうに見ゆる。若しも吾人にして、吾人が腕を擧げようと欲する時に何故に吾人の腕が擧がるかを問ふならば、吾人は答ふるのである。吾人が正しくそれを意志するからであると。さうして斯く答へらるゝと共に、一切の謎は吾人に取り解決されたやうに見ゆる。此の如くあるが故に、自然界に於ける存在物や現象やは、吾人が此等をば、それ〴〵の中に存する吾人のと同種的の欲求及び內部的行爲に迄歸着せしむる事により、可解的になるやうに見ゆるのである。

更に物體は相互に對して運動する。之に關して何故と問はるゝならば、吾人は答ふるのである。此等のものゝ中に、相互に對して運動しようとの一の欲求が存するからであると。又植物は光線に對して運動する。之は何故かと問へば、光線に對する欲求が此の中に存するからと答へられる。さうして此の如く答ふるならば、吾人はもはや此の上の說明を要しないやうに見ゆる。勿論之は決して科學的の說明ではない。されど吾人の素朴的の意識に對しては、之で十分の說明であるやうに見ゆる。

併し結局する所、以上二つの動力は一つのものに統括する事が能きる。曰く、物といふものゝ人間化は、之を「人間的に可解的」ならしむると。さうして斯かる言明の中には二種の事が包含される。一は、物が吾人の感情に對して近寄らせられ、吾人に熟知近接せしめられ、吾人に親愛にして價値あるものとなる。卽ち吾人は、物の中に於て吾人を有することにより、始めて眞に之を有するやうになるといふ事である。二には、之が知力的理解に迄近寄らせられ、推想的に理解されたやうになるといふ事である。

然かはいふものゝ、以上二個の動力に訴へた丈では、未だ人間化の作用は十分説明さるゝ事は能ぬ。之丈では先第一に、何故にかゝる作用が吾人に自然的であり、さうして究極する所内部的に必然性を有するかゞ判明しない。詳言すると、或る與へられたる場合に於て、何故に特定の種類の人間化の作用、即ち人間化作用の特定の形といふものが必然的に見ゆるかを説明する事は能きないのである。吾人は人間化の衝動を有し、而も此の作用を實行するならば、純然たる自儘に見え、時とすると之が吾人に取りて不合理に見ゆる事もある。さうして若しも此の人間化作用にして、物に對して全然異他無縁であり、物の中に之に對する結合點が存しなく、即ち之を知覺したり表象したりすると同時に、人間化の作用を要求する所の或るものが存しないならば、簡言すれば斯かる作用に對する必然性が存しないならば、此の如く不合理に見えざるを得ないのである。

五　自儘（ホルキエールリヒ）なる人間化作用と感情移入作用との差異

その實の所、世には自儘なる人間化作用といふものもあるのである。さうして又、純然たる自儘でない人間化作用とても、同一の程度に於て必然性といふ性質を有しない。更に又、比較的に自儘なる人間化作用もある。之とてかの人間化の衝動から發生する。されど之が自儘である程度に於て、之は、吾人が今此の所で人間化に就いて語り居るやうな意義に於ける人間化作用ではない。換言すれば之は感情移入の作用ではない。此の感情移入の作用なるものは、いつでも必然性を有するのである。

吾人が茲に云ふやうな自儘なる人間化作用とは、例へば自然神話や、兒童の人間化作用や、或る詩的自然叙述中に存するやうなものである。此等の人間化の作用は一種特異なるものである。之は、各個に於て、想像作用の自由なる活動であるやうに見ゆる。詳しくいふと、神話や詩的自然叙述や兒童の想像は、知覺或は表象したものをば人間化作用を以て織り直す。かくて此等の人間化作用なるものは、附加された或るもの、即ち想像上の附加物となるのである。

然るに吾人は、かゝる人間化作用から、感情移入作用中に於て與へらるゝ所の人間化作用を區別せしむる。即ち感情移入作用なるものは、想像の自由なる活動であるのではない。之に反し、之は、上述したる如く、心理的必然性を以て起るものである。之は知覺或は表象したものをば、人間的生活を以て織り直さない。此の反對に、之は、此の中に於て、必然的に之に迄結合されたもの、即ち知覺或は表象したものゝ中に於て又之と共に同時に與へられたるもの、之と分割すべからずにあるものとして、かゝる生活を發見するのである。

さうして感情移入作用のみが物を美に見えしむる。かの神話的人間化、詩的自然叙述、兒童の放漫なる人間化も、その美を有する。されど之は先第一にかういふ事を意味する。即ち此等のものが作出する所の想像的形體中に美が存するといふ事を。さうして斯かる美が附加せらるゝ所の物といふものは、之が爲に直に美とならぬ。之を例へていふと、樹木は、吾人がその中に樹神を住まはしむる事によつて美とならぬ。又山は、その中に、山姫又は侏儒を住まはせ、その本質を働かしむる事によつて美とならぬ。さうして兒童が活躍せる生類として取扱ひ、かくて着衣せしめたり脱衣せしめたりする所の木片は、それが爲に、それがそれ自身にあるよりも、より美にならぬ。又此の如くあるが爲に、兒童に對して美的享樂の對象とならぬ。更に吾人にして、何故にそれが斯くある

かを問ふならば、然る時には答へらるゝのである。吾人は想像の自由なる活動によりて作出された此等の生活を
ば、直接に知覺或は表象したものゝ中に於て見又は體驗しないからである。簡言すると、何等の感情移入作用が
起らないからであると。

して又、先第一に、各の感情移入作用中に存する所の以上の如き必然的の活躍視といふものは、吾人に對し物
を人間的に可解的になさうといふ需要に、一般的に訴へる事によつて說明さるゝ事は能きぬ　されど之と同樣の
事は、結局、各の放漫なる人間化作用に就いても、言明する事が能きる。尙又、前に確立した人間化作用の二つ
の種類間の反對といふものは、決して絕對的のものではない。卽ち神話や詩人や兒童の人間化作用中にも、心理
的必然性は存在する。卽ち此の如きものがその根據となつて存在する。勿論此の如き特定の種類の人間化作用は、
必然的のものではなくて自儘のものである。かゝる具體的に形成された特定の活躍性は、知覺或は表象したもの
ゝ中に存しない。されど又此の中には、一般の生活といふものは存する。そこで神話等中に於て人間化されて見
ゆる所の一切の物といふものは、吾人に對して亦必然的に活躍して居る。さうしてそれが唯此の如くあるが故の
みで、彼れが如き人間化作用が吾人に取りて自然的に見ゆるのである。

恐らく吾人は、詩的自然叙述に關しては、それが正しく詩であると思ふであらう。けれども斯かる詩と雖も、
若しもそれが現實に詩であるならば、矛盾或は笑ふべき沒理と見えぬ。之に反し吾人に眞實といふ印象を與へ
る。されど若しも詩の中に於て述べらるゝ所のものが、均しく內部的必然性を有しないならば、簡言すれば吾人
凡てが、必然性を以て仕遂ぐる所の人間化作用の繼續以外の或るものであるならば、それが斯かる印象を與へた
り、吾人の中に於て「反響」を發見したりする事は能きぬのである。

さうして神話及び兒童の人間化作用に對しても、事實關係は之と同樣である、此等が物の中に投入する所の生
活といふものは、物が想像の各の働きなしに、換言すれば、內部的必然性を以て有する所の活躍性を對象とする
想像の自由なる働きとしてのみ、吾人に可解的にあるのである。

六　自然への感情移入作用の說明根據としての類似性

右の如く述べ來るといふと、かのやうな內部的必然性の根據は何であるであらうか。此の問題に關しては、吾
人は曾て自然物の形と人間の形或は運動との類似性を持出した。けれども吾人が前旣に述べたる如く、之を持出
す丈では未だ十分しないのである。

そこで吾人は今、先第一に、右の問題に對する此の如き消極的の答を、一層精密に根據づけねばならぬ。かの
山の中に於ける女神や侏儒は、吾人に對しては、その山の中に存現する自然生活を詩的に擬人化したものである。
されど山と人間身體の形及び運動とは、如何なる類似性を有し、かくて此の如き擬人化を可解的ならしむるであ
らうか。山なるものは高低起伏したりする。されど若しも、かゝる高低起伏が、吾人に於て起る所の高低起伏と
同種類なるが故に、吾人に對して生活をその中に包有すると云ふならば、そは極めて滑稽である。自然界に於け
る斯かる形や運動やは、その實、吾人が吾人のとして知得する所のものとは、甚だ異なつて居る。さうして又、
若しも類似性がより大になるならば、此等のものゝ美的價値が增加するといふやうな事實關係は決してなさない。

之に反し、寧ろ活躍性の印象、並に此等のものゝ形の美的價値は、それが本來の山の形であり、さうして人間に於てゞはなく之に反し山に於て見出され、山の性質からしてのみ可解的になるといふやうな形なるや否やに依從するのである。

之と同樣の事は、前に擧げた自然物に就いても云ふことが能きる。即ち一方に於ては、植物、その枝、葉、花、並にそれが太陽の炎熱の爲には垂下し爽快なる降雨の後には高上するといふ方法と、他方に於ては人間の行動との間の類似とても、甚だ漠然たるものである。さうして其の枝を延ばす所の樹木は、吾人が吾人の腕を延ばす時の仕方と、勿論類似しては居るが、去り迚全然異なりたる樣子をする。即ち枝は決して腕でもなければ、又その延ばす仕方は腕とは異なつて居る。さうして若しも枝並にその延ばし方にして、人間の腕並にその運動の形に益ゝ多く類似するならば、それが爲に決して美的效果を增さなくて、此の反對に笑ふべきものとなる。此の場合に於ても亦、樹木が如何に行動するかの特異なる方法、その行動を人間のと異なるに至らしむる所のものが、內容上美的なる意義を有するのである。吾人は、美的見地からして要求する。樹木の性質中に含經驗的に包有されてあるが如くに、樹木といふものは行動せねばならぬといふ事を。

最後に又、之と同樣の言明は、自然界に於ける一切の生活發現及び生活々動に關しても、成立する。即ち樹木の呻吟とか、酷遇さるゝ大理石の軋り音とかに關してもさうである。要するに、如何なる場合に於ても、生活といふものゝ美的印象なるものは、自然界中に於て起生し發見せらるゝ所のものゝ合經驗的特性により、確然制約し影響せらるゝのである。

第六章　自　然　力

一　感情移入作用の內容としての自然力

以上の如く斷じ來るといふと、無生命の自然物を人間化する事の根據は、自然物の形と人間の生活發現との外部的類似の外に求められねばならぬといふ事が、十分明瞭になる。けだし、自然物の美的意義をば、その形と人間身體の形及び運動との單なる比較から導出しようとする事程、不當なるものはない。

されど此の際吾人は二種のものを確に區別せねばならぬ。先第一には、感官的に知覺された自然物全體を人間化する事の一般的根據が存するといふ事である。第二には、吾人が各個の場合に於てなす所の人間化の特定の種類に對しては、特殊の根據が存するといふ事である、之を簡言すると、自然界へのより一般的なる感情移入作用とより特殊的なる感情移入作用といふものがあるのである。

されど此の兩種は、決して相互に並列對立して居るのではない。之に反し、後種即ち特殊的感情移入作用なるものは、之をより精密に考察すると、前種即ち一般的感情移入作用の單に變形したものたるに過ぎない。さうして此の變形とは如何なる事を意味するかは、後に述ぶる所により自然に判明する。

そこで吾人は先第一に、特殊的感情移入作用或はそれの特殊的根據を以て始め、後に至つて、之を一般的感情移入作用の下に從屬包括せしむる事にする。吾人は便宜上の理由よりして此の如くなす。

由來此の如く「特殊的」にして而も廣範圍なる自然物の人間化といふ事實は、直接に、自然力といふ概念の中に包括されて存する。自然界に於ける一切の現象が、一の物が有する所の各の形、否一個所に於ける單なる現存及び存留とても、吾人に取りては、「力」といふものゝ流出である。此の如き力は、到る所に於て「働き」、到る所に於て「活動して」居る。さうして力の働を受くる所のものは、「堪忍的」態度に出づるが、同時に又「反抗的働作」をもなすのである。

さて、此の種の「力」、此の種の「働作」等の考察を以て、吾人は今茲に始める。併し之は、右にいうたやうに、同時に自然への感情移入作用の特殊なる內容に吾人を向注せしむる事になる。

抑も力とか働作とかいふ概念は孰れより發生するか。此等は何くよりしてその意義を取得するか。決して感官的知覺からではない。此の種の知覺なるものは、前既にいうたやうに、世界の何處に於ても、單なる存在とか現象とか狀態とか變化とかいふもの以外の何物をも吾人に示さない。即ち知覺作用なるものは、何處でも、力といふものを吾人に示さない。吾人は何處に於ても、「行動」と「受働」とを認めない。吾人は、現象を發生せしめたり又は現象中に於て己れを實現したりするといふ事に就いて言明し得る所の「働作」といふものをば、何處に於ても目視しない。

之に反し、吾人は、此等凡てを吾人の中に於て發見する。即ち世界に於て、右の語が意味する所のものを發見し得る所の場所は、吾人の自我の外にないのである。そこで、「力」なるものは、吾人の意志、欲求、勞苦の力即ち强度である。行動、「働作」なるものは、吾人の活動、吾人の行爲、或る目的の方への吾人の欲求的進行である。

さうして凡て此等の語は、若しも吾人が如何に感ずるかの彼れが如き方法、即ちかゝる自己感情の內容をその內容として有しないならば、無意義になるのである。

此の際、吾人は、力といふ概念をば、自然科學の純化された概念と解釋しない。かゝる概念は、自然現象の規則的繼起といふ事に對しての簡潔なる名稱たるに過ぎない。即ち石炭中には「力」の或る量が存するとは、換言すると、若しもそれが燃燒せらるゝならば、普遍的にして、且つ普遍的命題の形に於て言明し得べき法則に基き、特定の現象、例へば器械の運動の如きものが起るといふ事である。或は又、球が一定の「力」を以て他の球に接觸するとは、均しく、一の普遍的法則に基き、その接觸後に一定の速力を以て他の球の運動が起るといふ事を意味するのである。

されど此のやうな意味に於てする力の科學的概念なるものは、日常使用され居るものではない。科學的に修正されない自然的凡俗の表象法に對しては、力といふものは、特異なる或るもの、即ち物の中に存在して居つてさうして活動を要求する所の、物以外の現實體である。さうして又、最も嚴密なる科學的態度を取る人は、成程かゝる通俗的の力の概念をば、その科學中に於てこそ使用しないが、さり迚此等の人は、他の凡俗者と同樣に、右のやうな凡俗的表象法を廢棄する事は能きないのである。

二　自然力と抵抗感情

吾人は、今以上のやうな「力」とか「働作」とかいふ概念が、如何にして吾人に對し發生するかの方法を可解的に

なして見よう。此の如き發生を遂げしむるものは、異なつては居るけれど又同種類のものである所の幾多の體驗である。

之を例へていふと、一つの石が吾人の廣げられた手の上に横はり、さうして吾人が之をばその位置に於て確保しようと骨折ると假定する。ところが石なるものは多少の重量を有する。かくて吾人に對して、石を降下せしめようとの可感的の衝動が起る。かゝる「衝動」は是一種の欲求である。恰も此の逆に、各の欲求が、行動の或る方法に對する可感的の衝動であるが如くにある。各の欲求に於ては、吾人は或る方向に迄驅逐壓迫せらるゝやうに吾人を感ずる。

されど此のやうな衝動は是特殊の種類のものである。吾人が先第一に「吾人」の欲求と稱する所のものは、吾人から發出するとか或は吾人の中に於て根據づけられたとかの可感的の欲求、簡言すれば「能働的」の欲求或は「自由」なる欲求である。ところが上述の如き場合に於て石を高く保たうとする吾人の欲求なるものは、此の種類のものである。之に反し吾人は、石を降下させようとの欲求をば、石から發生するもの、或は石によつて吾人に強制されたものとして感ずる。かゝる欲求は吾人に對して直接にそこに存する。即ち之は、啻に知覺された石と共に存するのみならず、更に石から發生するものとして存する。此の欲求は、たとひ石を高く保たうとの欲求と同樣に、吾人の欲求、即ち吾人の中に於て感ぜられた欲求、或は吾人自我の一の規定であるとはいへ、尙吾人に對しては、同時に、石に迄附屬する。此の故に、石が「欲求する」といふ事が云はれる。或は之をより精密にいふならば、石なるものは吾人に「抵抗」する。若くはその位置に於て己れを確保しようとの試みに抵抗するのである。更に此の事實關係を他の方向から考察するならば、石は降下するべく欲求するのである。

吾人は今、降下しようとの彼れが如き石の欲求が、それを高く保たうとの欲求と同樣に、吾人の欲求であるというたが、かゝる說明丈では十分しない。その實をいふと、兩者は同一の欲求である。即ち同一の內部的緊張、伸展、勉强、骨折等、簡言すれば、單に異なりたる方面から考察された同一の內部的體驗たるに過ぎない。けだし此の際に於ける骨折の感情なるものは、二つの動力の對抗及び反對的働きから發生するのである。即ち一方に於ては、吾人から起りて石の持上を努むる所の「働作」、他方に於ては石がなす所の反對的働きから發生するのである。そこで、吾人がかゝる內部的の事實關係、即ち「緊張」をば、吾人の側から考察するか又は石の側から考察するかに從ひ、更に換言すると、吾人から起る所の「働作」といふ見地からするか、又は石の反對的働きといふ見地からするかに從ひ、緊張をば、吾人が石に對して向けられた吾人の欲求として感ずるか、或は吾人に反抗して石の抵抗或は反抗的欲求として感ずるのである。

而も吾人が、此の如く茲に言明する所のものは、決して一の理論ではなくて、何人にも知悉された事實である。何人も知悉するのである。吾人が石を高く保たうと骨折ればとて、之が爲に二重の感情を有しなくて單に一の感情を有するといふ事を。詳しくいふと、吾人の骨折の感情と同時に、それに並列して存する石の抵抗或は反抗的欲求の感情を有するのではない。之に反し緊張或は骨折の唯一つの感情を有するのである。けれども又、かゝる一つの感情は、吾人にも關係してあれば、又石にも關係してある樣に見え得る。即ち吾人は、緊張をば、吾人から發生するものとして考察したり感じたりする事も能きれば、又石から發生するものとして考察したり感じたり

する事も能きる。さうして此の第二の場合に於ては、此の感情は石の反抗的欲求の感情として吾人に見ゆるのである。

ところが之と同種類のものは、吾人が吾人の行爲に於て一の抵抗に打勝つべくある場合には、常に體驗せらるゝのである。かゝる場合には、吾人は「抵抗」といふ語の代りに、いつでも「反抗的欲求」といふ語を用ふる。蓋し吾人がかゝる反抗的欲求を感ずるが故に、吾人は抵抗といふものを語るのである。

さうして斯かる反抗的欲求はいつでも同一の特異なる感情的體驗である。吾人は決して、物體の「抵抗」をば、その物體の性狀と認めない。或はそれ自體に附與せらるゝ規定とも思はない。之に反し、之は、吾人が物體に自然的なる行動法を消滅せしめようと努むる時に始めて吾人に發生する所の一の體驗である。之は、物體に對しての吾人のかゝる態度から發生する。かゝる吾人の態度がなかつたなら、吾人は物體の抵抗或は反抗的欲求の感情を決して有しない。隨つて又此の如きものゝ概念に到達する事は能きない。此の故に又、かゝる感情は、吾人の中に於て起る心的反對、即ち心的「緊張」の伴隨現象である。之は、吾人が緊張をば物體に迄關係せしむる時に表現するが如き緊張の感情である。されど此の如く此の感情を物體に迄關係せしむる事により、吾人が感ずる所のもの、即ち欲求、衝動なるものは、同時に物體に附屬するもの、即ちそれの欲求であるやうに見ゆるのである。

次に他の場合に於ては、吾人は物體をその運動に於て保持するのではなく、之に反し之を運動の狀態に導き、かくてそれが有する靜止狀態を消滅せしめようと努むる事がある。此の場合に於ても亦、吾人は上述の如き反抗的欲求の感情的體驗を得る。されど今は、吾人が物體を運動せしめようと努むる限りに於ては、それが吾人に對し反抗的欲求をなす。即ちそれが運動に對し反抗的欲求をなす。或は之を他の方向から考察するならば、物體は依然靜止して居らうと努むるのである。

第三には、吾人は物體の形を變更しようと努むる事がある。吾人は物體の堅否粗密を調べる。即ちそれを壓縮しようと試みる。さうして此の場合にも亦抵抗に逢ふ。或は又その部分の凝集を檢する。即ちそれを延長したり、引裂いたり破碎したりしようと努むる。さうして又同樣の抵抗に逢ふ。而も此等の體驗をなすが爲に、吾人は、物體をば、或は堅固、或は强靱、或は彈力性のもの等と呼ぶのである。

三　單に觀照された抵抗感情

以上に於ては、吾人は先第一に、吾人が物體に對し上述したやうな現實的の關係に立ち、かくてその落下を阻止したり、運動せしめたり、その形を變更したりしようと試みる時に吾人が體驗する所のものに就いて語つて居つた。

然るに此の如くする中には、はや一種の感情移入作用といふものは存するのである。されど又、此の中には、何等の美的感情移入作用は存しない。蓋し一の事物への美的感情移入作用なるものは、吾人が純粹に觀照しながら事物中に停留する場合に、吾人が特定の方法に於て感じたり體驗したりするといふ事であるのである。されど前項に於ては、之と全然異なりたるもの、即ち事物に對する吾人の現實的の關係を考察して居つたのである。

併し又吾人は、物體に對し、純粹なる觀照的態度に出で、さうして均しく、運動したり、靜止を續けたり、そ

の形を維持したりしようとする、物體の欲求といふものを體驗する事が能きる。此の際吾人は、此のやうな經驗、此のやうな事實的に爲された試みが、既に先行したと假定する。して又、此の如き試みをば、吾人は、よしや吾人が觀照する所の特定の物體に於てゞはなくとも、而も時としては此の物體時としては彼の同種なる物體に於て數千回も爲した。例へていふと、物體の各の取扱ひ、之に對しての各の實體的關係の如きは、此の如き試みたるのである。

そこで斯る「試み」が再三吾人によつて爲され、さうして彼のやうな感情的體驗が發生した後には、かゝる體驗は恒久的に物體に迄附着する。されど之は次のやうな二つの十分區別さるべき意義に於てゞある。

第一、今や物體に對し、吾人の記憶又は思想に於て、直接に、之を一定の高さに於て保持したり、引續いて運動せしめたり、その形を變更したりしようとする試みに、之が特定の抵抗をなすといふ事、即ち特定の强度を以て落下したり、靜止の狀態を續けたり、その形を維持したりしようとするといふ事が、附屬するのである。更に詳しくいふと、物體に對し、附加的に表象された「性狀」として、「重力」、即ち落下の傾向とか、その位置に於て「存留」しようとの傾向とか、堅否とかいふものが、附屬するのである。此の如くして、吾人が此等凡てのものを物體に於て目視するといふ程直接に、此等凡ては、吾人に對し、物體に附屬するのである。されど其の此の如くあるといふ事は、單に次のやうな事を意味するに過ぎない。吾人が物體に對し上述の如き現實的の相互關係に立つ事により、物體に迄結合されてあるやうに思ふ所の彼のやうな欲求は、かゝる相互關係が消失した時にも、尙物體に迄結合されて存するといふ事を。之を簡言すると、之は、純粹なる表象に於ても、尙物體に迄結合せらるゝのである。即ち吾人が、彼のやうな諸事が、吾人の經驗を根據として、吾人に對し發生したものと認めて之を想起する事により、欲求といふものは物體に迄結合されて見ゆるのである。

然るに吾人が今茲に語るやうな欲求なるものは、是單に附加的に表象されたもの、或は附加的に思念されたものであつて、決して「感じ込まれたもの」ではないのである。

第二、されど前の命題は同時に尙他の意義を有する。即ち吾人が觀照しながら物體に吾人を打任せるといふと、吾人に對し、同時に、該物體に迄一の欲求、而も單に表象されたのではなくて吾人により感ぜられた欲求といふものが、結合せらるゝのである。

勿論此の如き欲求なるものは、もはや、吾人即ち現實的の自我に對しての反抗的欲求たるのではない。否現實的の自我なるものは、純然たる觀照に於ては除斥されてある。之に反し、之は、物體の落下を妨げたり、或はそれに運動を與へたり、或はその形を變更したりしようとの思想上の試みに對しての反抗的欲求である。之は吾人が、全然思想に於て、物體の自由なる運動、その存留、その形等に影響を及ぼさうとする場合に於て、吾人が感ずる所の合經驗的の反抗的欲求、即ち經驗上からの異議、抗拒たるのである、此の如き反抗的欲求も亦、觀照された物體に迄直接に結合されてあるのを吾人は發見するのである。

而も物體の觀照中に於て吾人が直接にかゝる欲求を體驗するといふ事は、正しく吾人が是迄感情移入作用に就いて語り居つた所の意義に於ける「感情移入作用」といふものであるのである。吾人は曾て知得した。目視された表出運動の中には、吾人が、一の欲求、即ちかゝる運動の實行に對する欲求といふものを感じ込むと。換言する

と、此の種の欲求は、吾人に取りて、目視された運動に迄、即ちそれに迄直接に附屬するものとして、結合されてある。吾人は斯かる欲求をば、運動を觀照しながらその中に停留する事によつてのみ知得する。然るに之と同樣の事は、今の場合にも起生するのである。即ち吾人は、物體の觀照中に於ても一の欲求の感情を體驗する。吾人は此の欲求が、物體に迄直接に結合されたものとして體驗するのである。

四　抵抗感情の感じ込みの特殊性

以上の如く述ぶるとはいふものゝ、吾人は尙、右の二つの場合の差異を看過してはならぬ。此の差異たるや、感情移入作用の差異ではなくて、感じ込まれたものゝ差異である。即ち「欲求」なるものは、二つの場合に於て性質的に異なつて居る。かくて第一の場合の目視された運動の中への感情移入作用に於ては、その運動を觀照するといふと、吾人の中に於て、吾人から發生する所の一の欲求、隨つて正しく此の運動の實行に對しての能働的にして自由なる一の欲求が起る。即ち吾人は、運動の實現に對し吾人から自發的に欲求する。此の故に、運動の中に感じ込まれた欲求なるものは、運動に關する欲求ではなくて、運動しようとの欲求である。かゝる欲求は、勿論吾人に對しては、運動の中に存在する。之はちやうど、前の石の場合に於て欲求が石の中に存在するが如くにある。けれども、此の運動の中には、運動によつて促がされた欲求ではなくて、運動の實現を目的とし、さうして運動の中に於て實現さるゝ所の欲求が存在する。之を簡言すると、欲求なるものが、運動を主體として有せず、之に反し客體として之を有する。さうして運動の主體たるものは、感じ込まれた自我であるのである。

次に第二の場合に於ては之と異なる。此の場合に於ては、欲求の發生も異なつて居れば、又かくあると共に性質も異なつて居る。即ち吾人が石を空中に確持しようと努むる時に、吾人が體驗する所の緊張をば、石に迄關係せしむる事により、吾人は欲求をば、一の受働的のもの、即ち吾人に加へらるゝ强制として感ずる。此の場合には、吾人が能働的ではなくて、石が能働的である。石は始めから欲求の主體である。吾人は、啻に、かの目視した運動中に於て運動しようとの欲求を感ずるが如くに、欲求を石の中に於て感ずるのみならず、即ち換言すれば石の觀照中に於てさうして石から吾人の中に於て發生するといふ意義に於て感ずる許りでなく、更に欲求をば、同時に石によつて促がされ、或は「働かされた」ものとして感ずる。即ち石の欲求として之を感ずるのである。

併し、斯くあると共に、正しく「石」の欲求であるといふ此の如き特異性は、吾人が、石をば純然たる觀照の對象となし、さうして單に吾人の思想に於て、その落下を妨げたりその位置又は形を變化したりしようと試みる時に、吾人が感ずる所の欲求にも、右と同一の理由よりして、存在し居るのである。

されど此の如くあるといふ事は、吾人が「石の」かゝる欲求をば「吾人の」として、換言すれば吾人自らの自由或は能働的なる欲求として體驗するといふ事を妨げない。吾人は、內部的に石の「側」、並に石が自然的に「仕遂げようとする」所のものゝ「側に」吾人を置くならば、必然に此の如く爲す。詳言すると、吾人が、吾人の思想に於て、石をば、その落下を妨げたりその位置又は形を變化したりするといふ吾人の思想的試みに迄でなく、之に反し石に自然的なる其の行動法に迄、關係せしむる場合には、此の如く爲すのである。隨つて又、石をば、落下したり、その位置又は形を固持したりするといふ自然的傾向に迄關係せしめて觀照する場合には、斯くなすの

である。而も此の如くなすと共に、吾人に迄の對立、即ち吾人の受働性といふ要素は消滅する。吾人は今や、石の欲求をば、その落下を妨げたり、その位置又は形を變化したりしようとする試みに反對しての反抗的欲求として體驗しない。之に反し、此の欲求は、彼れが如き石の自然的行動法をなさうとの積極的の欲求となる。さうして斯かる要求は必然的同時に「吾人の」欲求となる。何となれば、吾人は今正しく、石並にその自然的行動法の姿勢の中に觀照しながら、沒頭し停留して居るからである。吾人は唯、石の觀照中に於てのみ、斯かる欲求をば、吾人の能働的欲求として體驗する。さうして此の如くなつて、始めて欲求といふものゝ本來の美的感情移入作用は仕遂げらるゝのである。

ところが、石の「欲求」と共に、石の「力」といふものも、同時に與へらるゝのである。力なるものは、此の場合に於ては、重力或は重さといふ名稱を帶ぶる。吾人は曾て述べた。「力」とは、緊張即ち骨折の吾人の感情の强度に外ならぬと。併し吾人は、かゝる緊張をば、石の見地から考察し、隨つて欲求をば之に迄關係せしむるが故に、欲求の强度をも亦、石に迄關係せしむる。石なるものは、それを保持しようとの吾人の骨折に對し、特定の力を以て反抗的欲求をなす。即ち特定の力を以て落下しようと欲求する。何人も、かゝる力は是吾人の骨折の力以外のものでないといふ事、即ち吾人が此のやうな骨折に於ては、力の二種の感情でなく之に反し單一なる感情、即ち骨折の强度の單一なる感情を有するといふ事を疑はない。石の力なるものは、石に迄關係せしめられたる吾人の力の感情である。換言すると、之は、吾人が、その强度を有する緊張をば、石の見地から考察する場合に有する所の力の感情であるのである。

されど吾人が、石の落下を妨げたりその位置又は形を變化したりしようと單なる思想上の試みをなす時に、かの欲求を體驗すると同樣に、又此の力を體驗するといふ事は、成立する。「力」なるものは、此の場合に於ては、かゝる思想上の試みに反對して、經驗といふものが提出する所の抗議の力即ち切迫性である。

更に又、欲求及び力と共に、行爲及び堪忍といふものも、與へられる、一體行爲とは、一の目的の實現をなさうとの連續的欲求である。此の故に、吾人が保持しようとする石が落下すると假定するならば、かゝる落下は是石の行爲である。之は、石の持上げが正しく吾人の行爲であると、同樣である。此の反對に、吾人の反抗的欲求をなすにも拘はらず尙吾人に起生する所のものは、一の堪忍である。隨つて、吾人が石を高く擧ぐると假定するならば、石は或るものを堪忍する事になる。否此の如くして石に對して起生するの所のものは、その反抗的欲求に對抗して起生するのである。前の場合に於ては、石は能働的であつて、後の場合に於ては受働的である。しかも又、此の種の行爲と堪忍、能働性と受働性とは、それ自體としては一の特異なる感情的體驗たるに外ならぬ。されど斯かる體驗の內容なるものは、いつでも石に迄結合されてあるやうに見ゆる。

終りに又、之と同樣の事は、かの單なる「思想上の試み」に於ても起り、かくて之が起ると共に、「感情移入作用」なるものは完成せらるゝのである。

五　自然への感情移入作用と因果律

前項に於ては、吾人に對し物體中に存する所の欲求とか力とか行爲とか堪忍とかをば、第一には吾人と物體と

の間の現實的交互關係、第二には思想的交互關係から出發するといふ仕方によつて可解的になした。されど斯かる交互關係に訴へない人も、物體といふものが、より直接なる方法に於て感情移入作用の對象となる事が能き又ならざるを得ない他の仕方もあるのである。

吾人はかの石の例を再び用ふる事にしよう。假りに吾人にして、單に空中に浮び居る一の石を表象するとする。此の如く空中に浮び居る物體は常に落下するのを吾人は目視した。此の故に、今吾人の中に於て、石の落下を思念すべき合經驗的の欲求といふものが起る。今や又、正しく吾人の想像の眼を以て、石が落下するのを目視する。さうして斯かる落下に對しては、直接に欲求のかのやうな感情的體驗が結合される。かくて吾人の注意にして、空中に浮ぶ石に益〻多く向けられ、吾人がかゝる空中に浮ぶ物體に關して爲した經驗にして、益〻多く吾人の中に於て働くに隨ひ、かゝる欲求は益〻多く優强になる。吾人は、吾人が物體の中に觀照しながら沒頭停留する程度に應じて、此の欲求を體驗する。かゝる場合に於ても亦、而も直接に、吾人は感情移入の事實に接するのである。

さうして物體にして事實的に落下するならば、此の場合に於ては、右の如き欲求は吾人に對して實現される。かの「行爲」といふものゝ意義は、實は一の欲求の實現の意識的體驗から成立する。此の故に、石の落下は又石の行爲となる。石は自己活動をなして地上に向つて運動する。さうして之をば、已れ自らの力、卽ち重さの力の故に爲す。

感情移入作用の此の如き內容なるものは、他の體驗を根據として擴張される。吾人は旣に、第一の球が始めに靜止して居る第二の球の方に運動し、さうしてそれに衝突するといふ事を述べた。此の場合に於ては、吾人に對し先第一に、均しく過去の經驗を根據として、第二の球の運動の表象が發生する。されど此の際に於ても亦、かゝる運動の實現を目視しようとの一の欲求、卽ち吾人のかゝる欲求が滿足される。而も此の如き欲求の感情なるものは、吾人に對し、第二の球の觀照の中、又はその觀照から發生しない。之に反し、第一の球並にそれと第二球との接觸の觀照といふものから發生する。此の故に、此の如き事實關係中に吾人は欲求といふものを感じ込む。卽ち吾人は、欲求をば、一の球から發生し、さうして他の球に迄向注されたものとして體驗するのである。

此の種の感情的體驗といふものは、吾人が全然異なりたる體驗からして知得し居るものと同一のものである。吾人は他人の言語、例へばその命令する語を聽取するとする。さうすると、吾人は、此の語から發生し、さうして特定の目的、卽ち此の語により吾人に表示されたものに迄向注さるゝ所の一の欲求といふものを吾人の中に於て體驗する。此の如き體驗全體は、かういふ樣に言明する事によつて表示する事が能きる。曰く吾人は、命令語によつて一の行爲を促さるるやうに感ずる。或はかゝ行爲に迄驅逐し强制さるゝやうに感ずると。ところが之と同樣に、前の二個の球の中の第一球は、かゝる强制の執行者のやうに見ゆる。之は前進するべく第二球を强制する。かくて第一球は能働的にして第二球は受働的のものとなる。

本來、一方に於ては、第一球並にそれが爲す衝突、他方に於ては第二球の運動との間の關係は、是一の因果關係である。隨つて又、茲には因果關係が問題とされる、されど、吾人は判然力說するが、茲では、因果關係といふものゝ論理的意義ではなく、之に反しその必然的の心理的效果が表示せらるゝのである。

此の如き效果といふものは、通常、因果的の被結合者に附着し居るやうに見ゆる所の能働感情及び受働感情の發生から成立する。之が爲に、原因といふものは、一の「働く所のもの」、即ち目的の實現の方に「欲求する所のもの」、さうして斯かる目的の實現さるゝ事により、「活動的のもの」即ち「能働的のもの」となる。かくて目的の實現といふものは、一の原因の「行爲」となる。原因又は「原因の働き」によつて一の變化を受くる所のものは、此の變化を「堪忍」し、一の「强制」「壓迫」の下に立つ。簡言すれば受働的に行動するのである。

凡て此の種の事は、吾人にして若しも感情移入作用といふものを離れ見るならば、次のやうな事以外のものを言明しない。曰く、吾人が、原因の存在によつて、或は之をより精密にいふと、原因に關する吾人の知識によつて、「結果」といふものが發生すると思念するべく强制さるゝやうに吾人を感ずると。されど此の場合には、感情移入作用なるものは常に心理的必然性を以て遂行される。即ち吾人が、吾人の思想に於て感ずる所の强制をば、原因に迄關涉せしむる事により、原因といふものは、吾人に取りて、一の强制者即ち能働的に欲求し活動するものであるやうに見ゆる。それから吾人がかゝる强制をば、原因によつて一の變化を受くる所の物體に迄關涉せしむる事により、之は吾人に取りて强制されたものゝやうに見ゆる。して又、吾人の思惟作用なるものは、地球上の凡てのものに關し因果關係を作出する以上は、結局此等凡てのものゝ中に、以上のやうな欲求、强制、活動及び受動、一切の種類の行爲及び堪忍、並に此等に附屬する力等が存在する事になるのである。

此の如くして、感情移入作用なるものは、吾人の思惟的考察から發生する以上は、その內容が、考察の方法が變化すると共に變化するといふ事は、怪むに足らない。吾人が前に語つた所の物體の落下も、因果的に制約されてある。先第一にその原因は單に石であるやうに吾人に見ゆる。さうして斯く見ゆる限りに於ては、石といふものは己れ自身から落下するべく欲求すると云うてよい。即ち落下はその自由行爲である。されど又、吾人は、思想に於て、落下の力即ち重力といふものをば獨立化する。そこで今や、石なるものは、落下するべく、重力によつて强制されたやうに見ゆる。更に吾人にして、地球といふものが落下の條件であるといふ事を信憑するならば、石は此の地球によつて落下するべく「强制」される。即ち地球は石を己れの方に强制する。今や地球が此の落下現象に於ける能働者となり、地球の中に「力」が存する事になる。吾人は之を「引力」と呼ぶのである。

されど此等の凡てに於ては、たゞ一つの感情が根柢に存する。即ち吾人は、一の與へられたる假定、例へば石が空中に浮び居るといふ假定の下では、石をば思想に於て落下せしむるべく强制された感情を起すのである。併しながら吾人が、吾人の觀照に於て、此の「方面」又は彼の「方面」に吾人を置き、さうして彼れが如き感情をば、こちら若くはあちらに關涉せしむるに隨ひ、それは、吾人に取りて異なりたる光明の下に立つやうに見ゆるのである。

但し又、感情移入作用の此の如き多樣化は、尙一歩進める事が能きる。否寧ろ、之はいつでも此の如くなるのである。

抑も物體をば、思想に於て、地球に迄近接せしめようとの吾人の欲求なるものは、是合經驗的の欲求である。之は此の故に、吾人から眞に發生する所の欲求ではなくて、經驗によつて吾人に「强制」されたものである。して又、かゝる經驗は、吾人の中に於て、一の規則或は法則に迄凝結されてある。此の故に吾人は、法則によつて强

制さるゝやうに吾人を感ずる。卽ち前の場合に於ては「落下法則」によつて强制さるゝのである。隨つて吾人は今受働的となり、さうして法則が能働的になる。法則なるものは吾人の思惟を「支配する」のである。

吾人が、吾人の思惟に就いて思惟し、之に關して省察をなすといふ假定の下では、事實關係は此の如くある。けれども吾人にして、若しも物體といふものを眼中に置くならば、關係は異なる。此の場合には、此の如き物體といふものが、法則によつて支配されるやうに見ゆる。卽ち物體は、その行動に於て法則により强制さるゝやうに見ゆる。地球なるものは、引力の法則により、石に對して能働的に行動するべく强制される。此の故に、地球の能働性も亦、今や受働性となる。さうして石は、正しく此の法則により、かゝる能働性に一致し、隨つて此の能働性が仕遂げようとする所のものに適合するべく强制される。かくて吾人は、如何なる場合に於ても、法則といふものが物體を支配するといふ事を表象し、さうして物體をして法則に服從せしむる。されど斯かる法則も亦、感情移入作用の產物である。吾人は、吾人の合經驗的の欲求及び行爲をば、抽象物、一般的の現實、又は現實の連絡の中に、感じ込むのである。

されど吾人に對し物體と異なる所の自然法則を發生せしむるといふ斯かる感情移入作用の事に關しては、此の上進んで論究を吾人は爲さない。吾人は、物體をば、一の欲求、行爲及び堪忍、能働性及び受働性、並に此等の中に於て實現さるゝ所の力等の帶有とならしむるといふ、物體に迄の感情移入作用丈に於て、立止まる事にする。

此の種の感情移入作用は、個々に於ては、それ〴〵特殊の性質を取得する。換言すると、吾人はいつでも、吾人と物體との合經驗的關係、並に物體相互の因果關係から、一言で以て覆ふと、吾人が物體に對してなす經驗から發生する所のその欲求、力、働作等を物體の中に感じ込むのである。さうして吾人の經驗の事物が千差萬別である以上は、吾人が此等のものゝ中に感情移入をなしながら體驗する所の欲求とか力とか能働性とか受働性とかも亦、千差萬別であるのである。

六　感情移入をされた「力」と表象された「力」

吾人は今一の附說をなさねばならぬ。卽ち以上の如く述ぶればとて、事物中に於ける「欲求」或は强制に關する一切の意識が感情移入作用であるといふのではない。かゝる意識は唯、感情移入作用の上に全然基礎する。吾人は曾て、他人の身體の運動の中への感情移入作用に於て、如何にして感情移入作用からして、かゝる吾人の「知力的理解」といふものが發展し來るかを述べた。之と同樣の過程は、以上の如き場合に於ても行はるゝのである。

先第一に確言されねばならぬ　感情移入の作用そのものに於ては、吾人の欲求及び行爲の感情なるものは、事物の中に感じ込まれた欲求と分割されて居ない。否「感情移入作用」なるものは、正しく吾人と事物との同一性、或は兩者の同一化から成立するのである。詳言すると、吾人は地球及び石への感情移入作用に於ては、石或は地球を別にして、欲求する所の吾人を感じもしなければ又、吾人を別にして、欲求する所の石或は地球を感じもしない。更に又、欲求するやうに吾人を感じ、併せて之と並列して石或は地球を欲求するものとして表象しない。之に反し、吾人は、石及び地球の中に於て、或は全體の事實關係、卽ち地球の上方に石の浮び居るといふ事實關係の中に於て、欲求するやうに吾人を感ずる。かくて斯かる石の觀照中に於て、吾人は吾人を此の如く感ずるの

である。

されど吾人にして、一たび感情移入作用の外に出で、さうして斯かる體驗に向つて思索的に對立するならば、此の場合に於ても、前に述べたやうな場合に於けると同樣に、分割といふ事が起るのである。卽ち吾人と客觀的に與へられたる事實關係とが區別される。されど又、かゝる事實關係に對しては、欲求といふものが、表象されたものとして結合される。隨つて今や、欲求、並に之と共に、自我といふものが二重化される。此の如き二重化をば、吾人は次の如く言明する事により表出する。曰く、吾人は、經驗を根據として、石を地球に迄落下すると思念するべく吾人自ら欲求する。或は經驗によつて然かなすべく强制さるゝやうに吾人を感ずる。さして又、石は事實的に地球に迄落下するやうに欲求する。或は、地球が事實的に石をば己れの方に强制すると。

同時に又、客觀的方面に於ても、地球の能働的欲求と石の受働性等との多樣なる分割が行はるゝのである。

第七章　自然形への感情移入作用の最終の根據

一　統覺的運動としての因果的思惟

前章に於ける如く述ぶるとはいふものゝ、自然への感情移入作用なるものは、之若くは彼のやうな個々の力や欲求や働作の感じ込みたるのではない。その故は、自然の事物なるものは、吾人に取りて、此の如きものゝ集積ではないからである。而もかく斷言すると共に、上來述べたものは、尙重要なる補說を要するといふ事が、概示せらるゝのである。

先づ始めに、吾人は二つの可能の差異を擧述する。第一に、一方に於ては甲球が乙球に及ぼす衝突と、他方に於ては乙球の運動との間の因果關係は、是時間的に繼起する所のものゝ關係である。かゝる時間的繼起に對しては、吾人は之に該當して、時間の中に於て經過する所の行爲といふものを感じ込むのである。

第二には、同時的のものゝ間に存立する因果關係といふものもある。かゝる關係は、樹木又は岩の部分の間に存する因果的依從關係である。樹木の枝や小枝は、幹の爲にそこにある。若しも幹がなかつたなら、此等はそこ卽ちその場所にある事は能きぬ。さうして又、岩の上部といふものは、若しも下部がなかつたなら、それがある所にある事は能きぬ。下部なるものは、上部をば、そこにあり又そこに存留すると思念するべく吾人を强制する。簡言すると、下部は上部を「支持」する。されど斯かる「支持」は、是岩の下部に迄感じ込まれた行爲、卽ち欲求といふものゝ實現である。此の如き欲求とても、其の起源からすると、吾人によつて體驗された合經驗的の欲求、卽ち岩の下部の爲に上部がその位置に於て存留すると思念すべき合經驗的の强制たるに外ならぬ。之と同時に、岩の下部といふものは一の「力」を有する事になる。さうして岩に於ては、常に下部と上部とがある以上は、岩の中にはいつでも斯かる「支持」の「力」が存する。かの重さ、硬さ、密度等も此等の部分の有する所である。此等とても亦、吾人が岩の中に感じ込む力や欲求や能働性であるのである。

而も又、右の支持といふ形になつて居る所の行爲なるものは、必然的に時間の中に於て經過する。さうして茲に至つては、岩は同時的に與へられたものであるにも拘はらず如何にして之が可能であるかとの疑問が起らざる

を得ない。

之に對する解答は、吾人にして若しも次の事を考慮するならば、與へられる。右の如き同時と繼起といふやうな反對は、吾人の觀照に於ては決して存在しない。觀照そのものは斯かる反對を消滅せしむる。蓋し吾人の前に屹立する所の岩は、同時的に與へられてあるとはいへ、之に對する吾人の把捉といふものは、云ふ迄もなく繼起的に仕遂げられる。吾人は一部分づつ順を追うて把捉し、かくする事により岩が發生する。さうして此の如く發生するのは、それ自體としてゞはない。即ち物理的現實に於てゞはない。更に岩の視覺的形相が發生するのでもない。之に反し、岩が、吾人の把捉に於て、即ち吾人の把捉作用に對して發生するのである。さうして茲で論究しようとする所のものは、吾人の把捉の對象としての岩であつて、而も斯かるものとしてのみであるのである。

此の如くして、繼起的のものと同時的のものとの反對は、よしや一般的でなくとも、茲で考察する限りに於ては、消滅せしめられる。さうして之と共に、吾人は、岩に於ても、それの發生といふものが、吾人に對し、一の行爲であるといふ事を理解し得るのである。

されど、此の種の繼起的統覺を擧述するといふと、吾人は、尙他の一般的見解に迄到達するやうになる。即ち吾人は今や、事物の人間化に關し、是迄考察したものよりも、より多く一般的なる根據、否寧ろ感官的に知覺されたもの全般の人間化の最も一般的なる根據が、吾人を促迫するといふ點に迄到達するのである。讀者は想ひ起すであらう。吾人が、是迄述べたやうな自然物人間化の特殊の理由に對し、自然物人間化に關する本論の始めに於て、それのより一般的なる根據を既に存立せしめたといふ事を、同時に又、かゝる一般的根據といふものは、その變形として、特殊の根據をもその中に包有するといふ事をも述べた。而も此の種の一般的根據は、感官的知覺の對象の繼起的統覺の中に於て與へらるゝのである。

吾人は既に知得した。右に語つて居つたやうな存在又は現象の原因といふものは、人間化さるゝやうに見ゆる。換言すると、力の帶有者、働く所のもの、一の欲求及び働作を己れの中に帶有するものとして、現出する。何となれば、吾人は、此の原因により、その結果を併せ考ふるべく、或は之から思想上に於て結果に迄進行するべく、「强制」されて吾人を感ずるからである。原因の「働作」なるものは、此の如き吾人の進行、吾人がなす、結果の內部的附加である。簡言すると、吾人の行爲が吾人の自儘なる行爲としてゞはなく、之に反し原因により吾人に强制されたもの、隨つて原因の中に根據づけられ、その中に存在する所のものとして見ゆる限りに於ては、吾人の行爲である。

ところが此の種の行爲は、是一の內部的、思想的の行爲である。簡言すると、之は一の「統覺的」の行爲である。之は、吾人が、原因をば內部的に把捉し、之を心中に浮出した後に爲す、結果といふものゝ吾人の內部的把捉である。之は、一より他に迄の把捉作用の進行である。即ち吾人に取り、事物並にその時間的繼起中に存する所のものである。之は一種特異なる統覺的行爲である。それかというて又、事物により吾人に强制された一般的の統覺的行爲といふ普遍概念の下に包括されるのである。

之と同樣の行爲は、思想に於て、重量を有する物體の落下を妨げようとの試みに對する經驗の抗議の中にも存する。かゝる「抗議」とは、吾人の思想に於て、物體を落下せしめようとの吾人により感ぜられた强制である。吾

人が、此の種の思想的行爲をば、物體に迄結合せられ、若くはその中に根據づけられてあると思認する事により、簡言すれば物體により吾人に强制されたものと思認する事により、物體なるものは下の方へ欲求しつゝあるものと吾人に見ゆる。かくてその落下はその働作の如く思はるゝのである。

此の種の思想的行爲も亦、之をより一般的にいふと、一の統覺的の行爲である。之は統覺的行爲の特殊なる方法である。さうして又、かゝる普遍概念の下に包括される。吾人は觀照しながら物體に追隨し、かゝる統覺的運動を實行する。さうして此の際、吾人は、物體を此の如く觀照すべき强制を體驗するのである。

茲に新に區別された兩場合の各に於ても、內部的或は思想的或は統覺的の行爲といふものは、是十分なる意義に於ける一の行爲である。卽ち時間の中に於て仕遂げらるゝ所の行爲である。之は繼起的の統覺である。さうしてかゝる統覺は、いつでも、一の事物又は幾多の事物により吾人に强制さるゝやうに見ゆるのである。

吾人は、此等の兩場合に於ける行爲をば、一種特異なるものと右に於て稱した。併し之をより精密にいふと、之は一種特異に根據づけられたものであると謂はねばならぬ。卽ちその殊別的の根據を一種特異なる經驗の中に有するのである。右の第二の場合に於ては、その經驗は、吾人と物體界との間の交互關係の經驗である。然るに第一の場合に於ては、物體相互間の因果的連絡を吾人に發生せしむる所の經驗であるのである。

併しかゝる特性を有するにも拘はらず、思想的或は統覺的行爲の右の兩種は、かういふ統覺的行爲或は繼起的統覺といふものゝ特殊の方法たるに外ならないのである。その統覺とは、吾人が、繼起的に與へられたる一切のもの、並に、既述せる如く、同時的に與へられたる一切のものをば、統一體として把捉し、或は一の全體に迄統括しようとする時に、此等に對して行ふ所のものなのである。

二　一般の統覺的運動の感じ込み

吾人は今茲に、統覺的行爲卽ち思想的「運動」といふものゝ特殊にして且つ特殊の經驗に根據づけられた上述の如き方法を論外に置き、さうしてより精密に、之と無關係であつて而も到る所に於て起る繼起的統覺といふものを攻究して見よう。

かゝる繼起的統覺に於ては、吾人は先第一に二種を區別せねばならぬ。第一には、吾人は此の如き繼起的統覺及び集括をば、勝手自儘に行ふ事が能きる。例へていふと、幾多の點の集合の中から、順次に任意の之々の點を取出し、さうして之を一の統一體に集括する事が能きるのである。

第二には、事體により、かゝる統覺及び集括をなすべく强制さるゝ事がある。之は一事物の部分が何等かの方法に於て合體し居る場合には常に起る。

さうして若しも此の如き場合が起るならば、吾人は同時に强制といふ一の感情を有するのである。して又、かの「因果的統覺」の場合に於けると同樣に、此の場合に於ても、吾人の內部的行爲といふものは、事物に迄結合せられ、此の中に存し、之に附屬し居るやうに見ゆる。簡言すると、之は事物の行爲であるやうに見ゆる。卽ち吾人は、吾人の行爲をば事物の中に感じ込むのである。

ところが此の如くなると共に、吾人が前に述べ、さうして此の論究の始めに於て既に眼中に有して居つた所の、

人間化の一般的方法といふものは、與へらるゝのである。かゝる方法とは、右の如き統覺的行爲の感じ込みから成立する。即ち吾人が、相互に依屬する部分を有する各の多樣體に對して行ふ所の把捉作用の感情移入から成立するのである。

此の種の一般的の感情移入作用といふものは、先第一に、それが常に缺損しないといふ意義、即ち一切の感官的所與物が此の下に立つといふ意義に於て、一般的のものである。

されど同時に、之は又一の一般的性質を有する。それは即ち、それが、それ自體としては唯、一般の行爲、運動、空間的働作等の感じ込みであるといふ事である。之は、その特殊の內容をば、之迄吾人が語つて居つたやうな特殊の感情移入作用から取得する。即ち吾人がちやうど今新に述べた所の、かの特殊なる種類の內部的行爲の方法の感じ込みから、之を取得するのである。

かの屹立する所の岩は、吾人に取り、同時的のものゝ繼起的統覺の實例であつた。然るに此の岩は、今、かゝる統覺中に存する一般的の感情移入作用の實例としても、用ふる事が能きる。斯くするといふと、吾人は知了し得るのである。かゝる一般的の感情移入作用といふものは、繼起的統覺に於ても起り、さうしてより特殊的の感情移入、即ち感情移入作用のより特殊的なる形成に對し、一の輪廓を構成するといふ事を。

吾人は言明するが、吾人が岩を繼起的に把捉すると。ところが斯かる把捉といふものは是一の働作であつて、さうして此の働作は先第一に、吾人の行ふ所のものである。されど吾人は、之を勝手自儘に行はない。之に反し岩がそのやうに吾人に對して强制する。即ち岩は一の點から他の點に迄吾人に對し進行的指示をなす。吾人は、岩を觀照し、之をば吾人注意の對象となす事により、一點から他點に迄進行すべき壓迫或は强制を體驗する。吾人はかゝる强制壓迫をば、直接に岩の中に於て、さうして岩からして、體驗する。吾人は、欲求をば、そこにある所の岩から發生するものと感ずる。吾人は此の故に、岩を繼起的に發生せしむる事により、同時に、それ自らの性質中に存する所の或るものを實現せしむる。吾人の行爲は同時に岩の行爲である。岩は吾人によつて發生もすれは、又己れ自身によつて、或は己れ自身から發生もするのである。

此の如き言明に對しては或は批難を加ふる者があるかも知れぬ。謂ふ所の働作なるものは、明白に吾人の把捉の働作である。然るに若しも之が岩の中に存するやうに見ゆるならば、然る時に岩はそれが故に己れ自らを把捉するらしい事になる。而も此の如きは沒理であると。

成程果して此の如くあるとするならば、沒理たるには相違ない。けれどもそのやうな論斷に對する前提が誤つて居る。かの働作なるものは、實際に於て、吾人の把捉作用である。之は、吾人の進行及び附加の働作である。けれども之は、吾人と岩とを對立せしめた時に始めて、吾人の把捉作用として見ゆる。或は之をより一般的にいふと、岩に關して企てられた行爲、又は岩に對して實現された行爲と見ゆるのである。更に換言すると、これが、欲求をば、吾人から發生し、さうして吾人に對立する所の事物としての岩に迄關涉せしめられたものと認むる時に始めて、此の如く見ゆるのである。

之に反しかゝる兩者の對立が缺損する限りに於ては、把捉作用の感情なるものは、一般の働作或は行爲の感情たるに外ならぬ。之は、かのやうな運動、即ち岩の繼起的發生に對して結合さるゝ所の行爲の感情たるのである。

併しながら、吾人と岩とのかゝる對立の如きは、右に於ては少しも認むる所がなかつた。之に反し、前提といふものは、「吾人が岩を觀照する。さうして觀照しながらその中に沒頭沈潛する」といふ事であつた。して又、此の際吾人は、欲求及び行爲をば、吾人から發生し、さうして岩に對して向注されたものとして體驗しないで、之に反し、岩から發生するものとして體驗するのである。此の故に働作といふものは、吾人に對しては、岩に對して行はれた吾人の働作たるのではない。之は隨つて、特に岩の把捉の働作たるのではない。換言すると、吾人により此の如きものとして體驗されない。之はたゞ可感的に岩の中に於て、さうして岩と共に與へられて、岩を發生せしむる所の行爲である。之は、岩に迄結合されあつて、岩の性質を具有する所の、部分から部分に迄の恒常的進行である。更に一言で以て覆ふと、岩の中に存する活躍的の運動、即ち正しく能働的にして一の欲求を實現せしむる所の運動たるのである。

されど凡て此の如くあるにも拘はらず、吾人は、欲求及び行爲をば、吾人の自我、即ち唯岩に迄結合された吾人の自我の一の規定であると感ずる。此の故に吾人は、之をば、客觀化された行爲、或は客觀化された自我の行爲と感ずるのである。

三　一般的感情移入作用と特殊的感情移入作用

以上の如く說き來るといふと、既述せる如く、岩の最も一般的なる人間化、即ちその中への最も一般的なる感情移入作用といふものは、與へらるゝのである。

吾人は、彼れが如き實例によりて、如何にして此の如き一般的感情移入作用が、特殊なる經驗を根據として、より詳密に規定せらるゝかといふ事、即ち此の如く感じ込まれた自我及びその行爲が、如何にしてより詳密なる內容を取得するかといふ事を知得した。岩なるものは、啻に、部分から部分に迄の一般の統覺的進行を吾人に强制する許りではない。更に之は、吾人に對し、特定の方向、即ち下から上への方向に於ける進行を要求するのである。此の故に、今や、岩の中に、その方向に關して規定され居る此の如き行爲、即ち下から上への自己活動的發生といふものが、存するやうに見ゆる。或は之をより明瞭に云ふと、行爲なるものは、吾人の觀照に對しては、事實的に岩の中に存するのである。

されど、下から上に迄岩を觀照すべきかゝる要求といふものは、上述した所の次のやうな事の上に基礎する。即ち岩の下部は、その上部に對する條件である。或は上部がその位置に於て存留する事に對しての條件であると。上部なるものは下部を前提する。そこで、今いうたやうな要求は、此の如き合經驗的の因果關係によつて與へらるゝのである。隨つて此の因果關係は、吾人の統覺的行爲、並にそれと共に岩を發生せしむる所の働作に對し、その方向を與ふるものなのである。

併し因果關係なるものは又、右の働作に對し、質的に規定された內容を附與する。抑も下から上に迄の發展は、是重さに反抗しての發展である。此の故に、岩の働作は、重さに反抗して進み、之に打勝たうとする所の働作となる。之は、かゝる打勝ちによりてその垂直の延長を取得しさうして此の種の延長の成就によりて實現せらるゝ所の、働作である。之は、此の如き成就によりて己れを滿足せしむる所の一の欲求である。

されど此の際、右の働作は、それが始めから然かあつた所のもの、即ち吾人の行爲である。隨つて此の働作は、重さの打勝ちに向けられ、さうしてその打勝ちにより實現さるゝ所の吾人の行爲である。かゝる行爲をば吾人は直立と稱する。かくて謂ふ所の行爲は、一の直立即ち吾人の直立から成立するのである。併し之は、吾人が、岩に於て或はそれの觀照中に於て體驗する所の直立である。之は、此の如く感じ込まれた吾人自らの直立である。此の如くある極、此の直立なるものは、吾人が吾人を直立せしむる場合に、換言すれば吾人自らの働作により直立の位置に於て存留する場合に、吾人が感ずるやうな種類の直立であるのである。

されど此の如くなるといふと、感情移入作用の內容なるものは、內部的必然性を以て、尙他の方向に於けるより特殊なる形成を受くるやうになる。此の種の內容は、もと感じ込まれたものであるが故に、換言すれば吾人に屬すると同樣に岩にも屬するものであるが故に、必然に吾人と岩との兩者が、之に對して貢獻する。即ち吾人は交互的に吾人を豐富にするのである。

即ち一方に於ては、右の直立なるものは、岩の性狀により要求さるゝが如きもの、即ちその岩の特定の形を發生せしむるのに適當して見ゆるが如き直立となる。更に換言すると、之は、特に强力にして重々しい直立となる。此の故に、感じ込まれた行爲は、此の如き直立となる。即ち之は、力の伸張から發生する行爲、詳言すれば、吾人の他の意志の力に遙に勝る所の意志の力から發生する行爲となるのである。

さうして他方に於ては、直立は、吾人自らの直立として、必然的に、かゝる直立を吾人の中に於て自然に發生せしむる所の內部的總心態と結合される。換言すると、之は、吾人の體驗の言明上、吾人の中に於て必然的にそれに附隨する所の感情的要素といふものを帶有するやうになる。此の故に、かゝる感情的要素をも亦、吾人は岩への感情移入作用に於て投入するのである。而も此の如くなす事により、直立といふものは、例へていふと、自尊、大膽等のものとなる。隨つて又、吾人は、かゝる意志及び實行、かゝる集塊の聳立がおのづから其の中に包有するが如き自尊と大膽とのやうに、岩に於て吾人を感ぜしむるのである。

此の如くあるから、吾人の感じ込んだ行爲なるものは、結局する所、右の如きより詳密なる規定を受くると同時に、增進をも受くるのである。吾人は、行爲を感じ込む事により、同時に右の如き方法に於て之を變形せしむる。かくて行爲なるものは、始めには無規定にあるも、後には岩により方向と內容とを取得するやうになる。更に他方に於ては、之は、吾人自らの本性上かゝる內容から要求さるゝが如き內部的行動の產物であるやうに見ゆる。さうして斯かる感情的要素といふものも亦、此の內容の性質により該當的に增進されるやうに見ゆる。かゝるが故に、全體的の產物といふものは、吾人と客觀的所與物との交互影響の發生せしめたものとなる。之は、かゝる交互的增進及び豐富化により產出せられ、吾人と岩とは交互的に此の如く働く。而も此の如くして、吾人は最後に、岩に於ては、最初の一般的感情移入作用の時に吾人があつたよりも、全然他のものとなるやうに吾人を認める。簡言すると、吾人の理念上の自我は理想上の自我となる。而もかゝる驚異すべき事をば、感情移入の過程が遂了したのである。

同時に又、かゝる驚異は決して驚異ではない。之に反し日常生活上からして吾人に熟知された事柄である。吾人は右の如き交互影響をば、人と人との交際からして知得する。此の場合に於ても、兩者の交互の影響といふも

のは、右に述ぶるが如き產物を發生せしむる。吾人は他人との共同生活、即ち之との「對話」に於て、吾人を增進し豐富化する事も能きれば、又斯くしなければならぬ。併しながら此の如き事は、いつでも感情移入といふ方法に於て起生する。即ち一の個人と他の個人との一切の交互的關涉といふものは、恒常の感情移入作用によりて仕遂げられる。さうして斯かる感情移入作用は、かの、自然物への感情移入作用と同種類のものである。之を逆に言明すると、此の後者即ち自然物への感情移入作用なるものは、吾人と自然物との間の「對話」であるのである。

自然物への感情移入の過程の一の實例は右に與へられた。之と同樣の方法に於て、かゝる過程は如何なるものに於ても仕遂げられる。さうしてその出發點となるものは、いつでも一般の統覺的行爲の一般的即ち無內容なる感情移入作用である。かゝる移入作用は、吾人が因果的思惟に於て遂行する所の統覺的行爲の感情移入作用となる。さうして斯くなると共に、かの無內容なる感情移入作用は、より判然たる內容を取得するやうになる。今や感じ込まれた行爲といふものは、特定の方向に於ける行爲、即ち合經驗的因果關係によつて要求されたる方向の行爲となる。且之と同時に、之は、特定の種類の力とか欲求とか働作とかいふものゝ感じ込み、即ち因果的思惟といふ名稱を帶ぶる所の統覺的行爲の感じ込み中にいつでも直接に存するが如き力、欲求、働作等の感情移入作用等となる。吾人の行爲といふものは、此等の力によつて充實をされる。さうして之は、始めには單に一般的の一の行爲であつたのであるが、今や、此の如き特定の力や欲求によりて働く所の行爲といふやうに規定をされる。之と共に又、之は該當的の感情的性質を取得するやうになる。

凡て此の種の事は、吾人が事物を觀照しその中に沒頭停留する事により、起生する。吾人の行爲は、事物によつて變形せられ、事物は又吾人の行爲によつて變形される。されど又、兩者は唯一の變形、即ち唯一なる行爲の變形たるのである。

かゝる變形に關しては、吾人は玆に尙一度特に力說して置かう。吾人は岩に於て吾人の直立を感ずる。即ち吾人を直立せしむるやうに吾人自らをして感ぜしむる。而も此の事は、「吾人が如何に吾人を直立せしむるかを感ずる」といふ事を意味しもしなければ、又「岩の直立を吾人が感ずる」といふ事をも意味しない。玆にいふ所の感情移入作用なるものは、各の感情移入作用と同樣に、それが十全なる感情移入作用である限りに於ては、此の如き吾人と岩との區別を許さない。之は、十全なる統一體即ち同一性といふ事を表示する。此の故に、吾人は、かゝる感情移入作用に於ては、岩を別にして、或は岩の外に、吾人自らの直立を感じもしなければ、又吾人とは異なりたる事物としての岩が直立するとも感じない。或は又、單に之が直立するとして表象もしない。此等の如くある事の代りに、唯岩に於て、即ち吾人が之を觀照しながら此の中に停留する限りに於て、之が直立を體驗する。之は吾人の直立である。併し岩に於てのそれである。或は之は岩の直立である。併し吾人に於てのそれ、即ち吾人の觀照中に於ての直立である。さうして此等の如くある事の外に於ては、直立なるものは決して存しないのである。

されど上に述べた種類の凡ての感情移入作用に於ては、兩者の區別が起る。かゝる區別は、感情移入作用が十全なるものでなくなる場合、並に此の外に、吾人が被體驗物を考察的に回顧する場合に起る。今や、先に一つであつたものが二つとなる。此の故に、玆に至つて始めて、吾人が、「吾人は岩を把捉する」といふ事を云ひ得る關

間に到達する。此の如くして、十全なる感情移入作用に於ては唯一般的なる一の行爲であるといふ把捉作用が此の場合には、岩を吾人が把捉するといふ作用となる。けだし、吾人と事物とを對立せしむる事により、始めて「かゝる事物の把捉」といふ語が、通常意義を取得するからである。されど又、感じ込まれた行爲が、岩に迄結合されてある限りに於ては、吾人は他方に於て「岩が直立する」といふ事を云ひ得る。さうして最後に、吾人は兩者を次のやうな命題に於て合體せしむる。曰く、吾人は岩をば特定の方向に於て繼起的に把捉する。何となれば岩自らが斯かる方向に於て直立し居るからであると。

第八章　自然界に於ける統一體と自由

一　感情移入作用と統一體

上來縷々述べたるものゝ中に於ては、既に感情移入作用の最終の要素といふものが、同時に前提されたのである。吾人が、岩をば繼起的に把捉し、さうして部分と部分とを漸次に附加する事により、岩なるものは、吾人に對し、一の全體となる。換言すると、吾人は、岩がその中に包有する所の多樣といふものを繼起的に把捉する事により、吾人は同時に、かゝる多樣をば、岩といふ統一體に迄集括する、即ち此の多樣は、吾人に對し、一つの事物といふ統一體となるのである。

而も此の如く述ぶると共に、感情移入作用の右の如き最終の要素は説示せらるゝのである。即ち「事物」なるものは、吾人に對し、いつでも一つの個體であつて、さうして之は、吾人が直接に知得し居る所の唯一の個體、即ち吾人自らに、比較し得べきものなのである。否、之は寧ろ、かゝる個體であるのである。

吾人は本書の第一篇以後に於て、多樣といふものを統一體に集括するといふ吾人の傾向を知悉し居る。かゝる傾向は、先第一に、一般的の美的形式原理である。否寧ろ、之は、あらゆる形式原理の上に位する所の美的形式原理である。併しながら種々論究の極、今や形式が一の內容に迄到達し、さうして之により始めて、之が美的のものとなつたのである。

吾人は又、此の原理をば、より精密に、多樣に於ける統一の原理、或は、分化する所の統一的統覺の法則と稱した。けだし、吾人は、吾人の本性として、吾人により特に把捉さるべき一の多樣體をば統一體として把捉せざるを得ないからである。さうして又、吾人は、之をば、可能的に十全なる統一體に迄集括すべき傾向を有する。併しながら之と同時に、各個といふものをば、それ自體として把捉すべき傾向をも有する。或は之を逆に云ふと吾人の中に於ては、特に吾人の統覺に提供せらるゝ所の各個をば、それ自體として先づ統覺し、それかというて同時に、之をば可能的に、一つの統一體に迄集括し、不分割なる統一體として觀照するといふ根元的の强制が存するのである。或は尋後に兩命題を結合すると、吾人の中には、各個的統覺をば、集括的統覺の中及びその下に內屬及び從屬せしめようといふ傾向が存するといふ事になる。

ところが此の種の集括とても、先第一に、吾人の爲す所のものである。之は、唯一の把捉作用中に、多樣をば吾人が集括するといふ事である。多樣といふものが集括の爲に取得する所の統一體なるものは、その多樣が關涉

されてあるといふ自我の統一體である。之は、吾人の行爲の統一體、即ち多樣といふものを總計し集括をなす所の統覺といふ作用の統一體であるのである。

されど又、吾人は、客觀的の統一體といふものをも語る。蓋し各の「事物」なるものは、一の客觀的の統一體であるからである。而も之はかういふ事を意味する。吾人の統括作用なるものは、勝手自儘のものではなく、之に反し、事物が、斯かる作用に迄、吾人を要求し或は强制するといふ事を。統一體なるものは、これ丈の限りに於ては、事物に迄結合されてあり、事物自身の中に於て與へられてあり、之に附屬する所の或るものである。されど斯かる統一體は又、吾人が今いうたやうに、自我といふものゝ統一體である。隨つて吾人は、不分割なる自我をば事物の中に於て發見する。換言すると、吾人は、事物の多樣といふものを總括包含しながら、吾人をば、事物の中に於て發見するのである。

かゝる作用とても亦、固有の感情移入作用上の事實である、否寧ろ、之は、感情移入作用上の事實そのものであつて、之迄吾人が語つて居つた所の感情移入作用なるものは、之を待つて始めて完成せらるゝのである。

然るに右の如き不分割なる自我は、欲求、能働性及び受働性、力等の概念により、その內容を取得し、より詳密なる規定を受くる。かくて斯かる自我は、此等の欲求等が集括をせらるゝ所の統一點となるのである。

されど之に關しても亦特に高調し置かねばならぬ。曰く十全なる感情移入作用に於ては、自我といふものは事物から分割されてあらぬ。或は事物の個體性と分割されてあらぬと。吾人は、事物の要素の多樣を集括する所の自我、即ち彼れが如き不分割なる自我を直接に體驗し、さうして之をば、斯かる要素の中に於て欲求したり、能働的、受働的、大なり小なり强力に、同時に又自尊、大膽等にあるものと體驗する。吾人がかゝる不分割なる一つのもの、さうしてそれかと云うて多樣なる方法に於て欲求するもの、能働的、受働的にある一つのものとして、事物の中に於て體驗するといふ事の中に、――吾人が事物の中に觀照しながら沒入し居る丈の間は、――吾人が一般的にかゝる場合に於て如何に吾人を體驗し感ずるかの唯一の方法といふものが存在する。さうして之を逆に云ふと、事物といふものゝ個體性、事物の欲求、行爲及び堪忍等が一點に於て包括さるゝといふ事は、吾人に對し、唯吾人により今直ちに體驗されたものとして現存するのである。

併しながら此の場合に於ても亦、吾人にして十全なる感情移入作用の外に出づるや否、分割といふものは起る斯うなるといふと、吾人は今、感じ込まれた自我の外の或るものであり、さうして事物に對立する事になる。されど斯くあると共に、若しも吾人にして回顧的考察を加ふるならば、事物といふものに對して、吾人が曾てその中に感じ込んだ所の統一體或は個體性といふものは。存在する。即ち吾人から發生した所の、一點に於ける統括狀態といふものは、事物に對して存在するのである。

二　感情移入作用と「事物」

事物といふものをば、以上の如く一の個體性と解釋する事によりて、始めて、科學的の事物概念ではなく、之に反し吾人が科學的思索以外に於て常に用ふるが如き事物概念といふものは、發生するのである。

吾人は問うて見よう。事物といふ統一體、即ち客觀的統一體なるものは、科學的思索に對しては何であるかと

吾人は之に對しては答へねばならぬ。かゝる統一體とは、全然かういふ抽象的事項であると。即ち吾人が事物に接してなす所の經驗の指導を受けて、事物の中にある多樣をば、若しもその多樣を觀照する場合には、一の統一體に迄集括するといふ抽象的事項であると。之は、それ自體としては、結局吾人により體驗された要求或は必然性といふ空虛の概念に外ならぬのである。

されど日常生活に於て用ふる事物概念なるものは、之と異なる。之は、かゝる抽象的事項を以て滿足しない。之は、統一體を表象し或は之を直觀的のものになしたりしようとする。ところが此の如き事をば、此の概念は、それが感情移入作用により通過せらるゝが故に、仕遂ぐる。吾人は確然無條件的に主張せねばならぬ。世に、吾人が吾人の中に體驗する所の統一體の外に、何等表象し得べき統一體といふものは決してないと。かゝる統一體は、凡ての働作に於て活動する所の、それ自身と同一なる自我といふものゝ統一體であるのである。

本來自我といふ統一體は、唯一の表象し得べき統一體である。何となれば、之は唯一の直接に體驗し得べきものであり、經驗からして吾人に知得されたる唯一のものであるからである。各の他の統一體といふものは、上述のやうな全然空虛なる概念たるに過ぎない。即ち之は右の如き自我といふ統一體の反復、複寫、同質物である。事物なるものは、かくてそれ自體として一の統一體となる。それ自體として一の統一體となるとは、吾人が事物の中に感じ込んだ所の、彼れが如き直接に體驗された統一體又はその反射をば、吾人の思想に於て事物にも許容する事により、それを今統一體に迄完結するといふ事を離れ見ての統一體となるといふのである。

一例を擧げると、岩或は樹木は、吾人に對し、それ自體として統一體である。即ち客觀的の統一體である。されど斯かる統一體は、一體何から成立するかに吾人は留意して見ねばならぬ。吾人は「樹木」と呼ぶ事により、啻に一の質的統一性のものを意味するのみならず、更に單なる唯一的のもの、唯一度與へられたるもの、即ち一の數的に同一なるものを意味するのである。

されど斯かる唯一的のものは何處に存するであらうか。吾人は空間的に並列せる幹、枝、小枝、葉、花等を見る。さうして此等凡てのものゝ中の何物も「樹木」たるのではない。樹木はかゝる幹でもなければ又枝等でもない。之は又此等凡てのものゝ總計でもない。何となれば、若しも此の如きものであるとすると、之は統一體ではなくて、一の多といふものとなるからである。

さうして樹木、即ち此の如く唯一度與へられたるものは、根を以て地中に入る。又正しく此の如き一にしてそれ自身たる樹木は、枝や、小枝に迄分裂し、花を咲き實を結ぶ。さうして此等凡ての事をば、樹木は種々の場所に於てなす。それ故に又、樹木は同時に多くの場所に於てある。而も樹木は唯一度そこにあるものたるにも拘はらず、如何にして此の如き事を爲し得るであらうか。

人によりては、或は、樹木は一の全體的のものであるといふかも知れぬ。けれども樹木と稱せらるゝ此の如き全體的のものが、多くの場所に於て同時にあると言明する事も、何等の意義をなさない。實際に於ては、正しく此のやうな全體的のものが同時にこゝそこにあらぬ。之に反しここそこにあるものは、唯全體的のものゝ部分であるからである。

ところが此の如き謎の解決といふものは、上述したる事項中に存する。換言すれば之は感情移入作用の中に存

するのである。之に對しては、吾人がちやうど今樹木に關してなした上述の言明が解決する。即ち樹木が根を以て地中に入つたり、枝や小枝に迄分裂したりするのは、是樹木が同時に種々の場所に於て活動するのである。さうして同一のものが種々の場所に於て同時に活動するといふ事は、決して何等の矛盾ではない。今や吾人は云はねばならぬ。その活動する所のものは、是一の意志若くは意志と同質のものであると。意志、殊に吾人の意志といふものには、種々の場所に遍在即ち同時に存するといふ事は、可能である。吾人は、同時に腕を擴げたり、頭を高めたり、地上に確固と吾人を支持したりするべく意志する事が能きる。同時に又、意志、即ち意志する所の自我なるものは、吾人が何等かのものを知得し表象し得る程度に於て、彼れが如き遍在の一切の分割なしに、活動をなし得る所の唯一的のものたるのである。

さうして吾人が、樹木をば、意志する所の自我と同質なるもの、即ち一の個體と思認する事により、右の如き遍在といふものが樹木に可能になる。一切の多に迄反對に立つ所の統一體としての樹木、即ちこゝそこに同時に某の作業をなす所の樹木なるものは、吾人の意志的人格の統一體と同質なるものである。之を逆にいふと、吾人により樹木の中に移植された吾人人格の統一體そのものが、その實「樹木」といふものであるのである。樹木なるものは、吾人に對しては十分なる意義に於ける一の客觀的統一體である。十分なる意義に於ける統一體とは、彼れが如き統一體といふ動力により全體に迄集括せらるゝ所のものが如何に多樣であるにもせよ、樹木が吾人により人間的個體と同質なるものと解釋せらるゝ限りに於ては、一切の多に迄反對に立つ所の統一體といふ意義であるのである。

此のやうな事實關係は、又他の語句の中にも存する。例へていふと、樹木は部分を「有する」、それは幹を「有する」枝や小枝を「有する」といふが如きである。樹木は此等を有する。隨つて樹木は此等凡てのものゝ何ものでもない。それは此等と異なりたる或るものである。それは此等凡てのものゝ中に於て、或は凡てのものに對し、活動する所の或るものである。右の「有する」といふ事は、正しく、樹木の或る部分と他の部分との單なる人間的共存といふ事ではない。之に反し、之は、所有、支配、或るものに對しての權能保有といふ事である。それは樹木が枝や小枝等に於て活動するといふ事である。更にそれは、吾人が四肢を有するといふ意義に於ての「有する」といふ事である。さうして之は空間的の共存といふ事を表示しない。「吾人は」何等の場所を有しないから、此の如き語は茲では少しも意義をなさないからである。之に反し、吾人が吾人の四肢に對して立ち居る所の可感的の能働的關渉といふ事を表示するのである。

最後に、一の事物が性狀を「有する」といふ事、此等の性狀がその事物に「固有」であり、それに「屬する」といふ事等は、吾人即ち吾人の意志と、吾人に固有であり吾人に屬する所のものとの間に存立するといふやうな依從關係を表出する所の語句たるのである。

吾人が前に語つた統一的統覺なるものは、既述せる如く、衆多的統覺といふものと不一致に立たない。寧ろ統一體を分員しようとの傾向が存する。此の逆に、多くの統一體を更により高等なる統一體に迄集括しようとの傾向も存するのである。

此の事も亦、上來の論究上吾人に對して重要である。吾人は啻に樹木の多樣をば、一個の樹木といふ統一體に

迄結合するのみならず、更に多くの樹木をば、多くの樹木からの統一體に迄結合する。吾人は、山の多様をば、啻に一個の山といふ統一體に迄結合するのみならず、更に多くの山をば、山脈からの統一體に迄結合する。最後に吾人は、凡ての事物をば、自然界といふ統一體、或は一の自然連絡體といふものに迄結合する。此等の場合に於ても、常に感情移入作用といふものが存する。若くはかゝる作用が前提されてある。山なるものは一の個體である。されど又山脈も此の如きものである。最後に、全自然界も唯一的の個體である。要するに、吾人に對しては、多くの段階に於ける個體といふものがあるのであつて、此等の個體は又、他の個體をばその中に包有する。即ち斯かる個體に迄分割せらるゝのである。

終りに、以上凡ての如くなすといふと、事物を人間的に可解的になさうといふ需要は、滿足せらるゝのである人間的に可解的にあるものは、吾人に取りては、唯人間、並に之と同種と思念されたものゝみである。さうして人間なるものは、吾人には、唯個體、即ち種々なる欲求及び意志、行爲及び堪忍の統一體としてのみ、可解的にある。されど吾人は、凡ての事物を啻に此の如き方法に於て人間的に思念するのみならず、更に此等を此の如き方法に於て直接に體驗する。吾人は此の種の事をば、十全なる美的感情移入作用に於て爲すのである。

三　感情移入作用と一般の美的形式原理

吾人は、今、以上の如く論究し來る事により、一般的の形式原理といふものが取得する所の美的意義をば、尙一歩進んで攻究して見よう。かの分化に於ける均衡の原理、即ち分化的從屬の原理も亦、以上の如くなつて始めてかゝる意義を取得する。けだし一つの全體に迄統括されて見ゆる所の個々のものも、尙比較的に獨立したる意義を主張せねばならぬのであるが、之は先第一に、個々のものが獨立的觀照の對象とならねばならぬといふ事を意味する。されど斯かる觀照の獨立性よりして、今や、個體の獨立性或は自己主張といふ意義に於ての、被觀照物の獨立性といふものが發生するのである。

之を例へていふと、吾人は或る景色の中に於て、統一的の山脈を見ると假定する。此の如き山脈といふ統一體は、先第一に空間的の統一體である。即ち空間的の共存物である。更に之は、その構成、可觀的性質等の同一性のものである。ところが此の如き統一體が、今や、同時に種々の構成に於て實現せらるゝ所の同一の行爲及び唯一的の力の統一體といふものとなる。併しながら此の如くあると共に又、個々の山の顯出も亦、一の行爲であるやうに見ゆる。それは、能働的の分離、詳言すれば、空間的分割と特殊なる形とを有しての、獨立我意的の自己主張となる。

かゝる從屬的分化と並列して、吾人は前に君主的從屬といふものを存立せしめた。之に就いても右と同樣の事が言明し得られる。そこで此の種の從屬とても亦、先第一に吾人の統覺作用に於ける從屬に外ならない。即ち全體を包括する所の統覺作用が、全體をば、一の統配的部分の中に於て、大なり小なりに統括をなすのである。而も之により、統一體といふものは增進せらるゝのである。今や、正しく一つの部分中に於ける統括から成立する所の新たなる統一體は取得される。併し又、かゝる從屬即ちかゝる統配といふものは、今は人間的從屬及び人間的統配の意義に於ける從屬及び統配となる。一の山脈群は、啻に吾人により、凡ての他の山に超越する所の山に

於て統括せらるゝのみならず、更に、――その超越する山がかゝる統括を要求する限りに於ては、――その山が全體を己れの中に統括するのである。之は言葉の十分なる意義に於て、大なり小なり昂然命令的に全體を統配する。さうして之と同一の意義に於て、一の有力なる樹木は、その外圍を統配するのである。

吾人が曾て述べたやうに、その廣場に立つ所の記念碑といふものは、廣場を統配する。さうして若しも廣場が餘りに狹隘になるならば、記念碑も狹隘にされたやうに見ゆる。かゝる記念碑は何等の自然物ではない。併し吾人は、之をば玆で、之が甲若くは乙の藝術的の形を有する限りに於て考察しない。之に反し單に外圍を統配する所の集塊として考察する。ところが此の場合に於ても亦、統配といふ事は、先第一に、記念碑の把捉が、廣場の吾人の統一的把捉に於て統配をなすといふ事を言明するのである。之と同質の事を、右の狹隘といふ事も亦言明する。曰く、吾人が、記念碑に迄、より廣い空間を附加しようとの吾人の欲求に於て狹隘にされたやうに吾人を感ずると。併しながら、美的感情移入作用といふものは、此のやうな事實關係全體を客觀化するのである。美的感情移入作用に對しては、事實關係はかうである。記念碑が統配をする。之は、人間がその財産又はその意志の範圍を統配するやうに、之を統配する。之は、此の意義に於て統配しながら空間を充實する。さうして之と同樣の事は、右の狹隘に就いても成立する。即ち若しも廣場が餘りに狹隘になるならば、記念碑そのものが、此の如きその統配に於て狹隘にされると。かくて吾人は、統配と狹隘とを記念碑の中に感じ込むのである。此の際に於て統配者たるものは、集塊の中に存する所の意志である。その結果、かゝる意志、即ち吾人の前に立つ所のかゝる個體性が狹隘にされる。此の種の個體性は、恰も吾人が狹隘なる空間中に於て吾人を狹隘にされて感ずるやうに、狹隘にされるのである。

讀者は記憶するであらう。吾人は既に記念碑の事を述ぶるに際し、又第一篇のそれに關連する事項中に於て、屢〻人間化作用の假定の下に始めて意義を有する所の語句を用ゐたといふ事を。吾人は此の如くなさねばならぬ何となれば、吾人の言語なるものは、人間化の影響及び强迫の下に發生したからである。言語なるものは、かゝる强迫に對しての最も直接なる證據である。

かくて吾人は曾て「內在」君主的の從屬、例へば矩形の一邊が他邊の下に從屬する事により、矩形なるものが「性質」の定確と判明とを取得するといふ事を述べた。かゝる性質なるものは、是常に、吾人の意志の一の內容が他の內容の下に斷乎と從屬するといふ事、即ち吾人の全體の內部的本質が唯一つの方向に統括されてあるといふ事の中に存する所の性質であるのである。

されど吾人は尙一歩を進める事が能きる。即ち、右の統配及び從屬と同時に、感情移入作用の爲に、從屬者がその從屬を妨げざる限りに於て統配者に對して立つ均衡といふものは、その美的意義を取得するのである。かゝる均衡は、從屬の强制に對しての反對的働き、即ち最も固有なる意義に於ての能働的の自己主張となる。さうして此の如くあるよりして、より顯著なる統配、並に全體といふものゝより大なる內部的價値といふ印象が發生するのである。之はちやうど、かの社會的全體に於て、統配者の威嚴並に全體の價値が、それに從屬奉仕する所の個人の自己主張、即ち個體性の勢力と共に增加するが如きである。

さゝして最後に、右の如くして、一方に於ては、一の事物が多くの統配點に於て統括せられ、さうして此の如

き統配點、並にかゝる統配點を通じて全體といふものが、更に一の「主要點」の下に從屬する事と、他方に於ては、此の如くなるよりして發生する所の豐富に分員された全體中に於ける均衡とは、美的に顯著になる。之はちやうど、人間界に於て存しさうして多くの人間を顯著にして豐富に分員された全體に込結合するといふ關係に、類似し、之に比較し得べくある。

茲に述ぶる凡ての事項中に存する所の一般的事實といふものは、いつでも同一である。即ち、吾人は、事物に對する吾人の把捉、觀照中、並に吾人の規定としてその事物に觀照的に沒頭し居る中に於て體驗する所のものをば、事物に迄結合せられ、それに從屬し、それの一の規定として體驗する。」簡言すると、吾人が事物中に於て吾人を體驗するといふ事であるのである。

吾人が、吾人をば、事物中に於て、統一的の個體として體驗し、さうして之と共に事物をも個體として體驗するといふ事は、既に述べたる如く、感情移入作用の完成である。されど之は同時に、事物の美といふものゝ最終の條件であるのである。

四　自然的個體の統一性

以上の如く述ぶるに就いても、個體性といふものは、現實的の個體性、即ち積極的にしてそれ自身に於て統一的な個體性であるといふ事が、假定され居つた。美或は美的價値の感情なるものは、一の個體の力、豐富、並にそれ自身に一致し居るといふ事に關する愉快なる感情である。さうして之は、之が個體性といふものゝ生活營爲である限りに於ては、即ちその中に於て、個體性の力、豐富、內部的一致或は自由が表現されてある限りに於ては、個體性の無妨害なる生活營爲に關する愉快なる感情である。吾人が既に知得したるやうに、苦惱の場合に於ても、個體性のかゝる積極的のものは表現される。或は吾人の高上された意識に迄到達する。此の故に又、樹木又は此の他の自然物に與へらるゝ所の破壞といふものも、積極的の美的意識を有し得る。之に就いては後章に於てより精密に述ぶる事にしよう。

されど今茲では、吾人は特に、自然的個體といふものゝ統一性、即ち內部的一致なるものを取扱ふべくある。そこで吾人は尙一度疑問を起さねばならぬ。如何にかゝる統一性がより精密に說明され得るか。即ち如何なる場合に美なる自然物が吾人に對しかゝる統一性を有するかと。されど此の種の疑問といふものは、次の如き言明と同一のものである。曰く、何が、吾人に對し、事物の部分を相互に結合するか。或は如何なる合法性に基き此等が相關的のものと見ゆるかと。吾人は高調して置くが、此の際、吾人は自然物に就いて思念し居るのであつて、吾人により作出された統一體に就いては思念しないといふ事を。

之を例へていふと、槲の木は、その構成のある根本容狀、特定の根本形態、幹や枝や小枝や樹皮の特定の一般的外面性質を有する。之は又、任意の葉及び果實ではなく、之に反し槲の葉及び槲の果實を有する。さうして此等は、自然といふものゝ合法性の爲に、之に附屬するのである。

されど之はかういふ意義に於てゞはない。吾人は吾人に知られたる普遍の自然法則からして、槲の樹の葉及び果實の根本形態が、それがあるよりも以外のものである事が能きないし、又何故に以外のものである事が能きぬ

かといふ事を、歸結し導出し得ると。之に反し、吾人は、正しく、それが左様にありさうして常に左様にあるといふ事を唯知得する。吾人が槲の木自體に關してなした經驗といふものは、吾人に言明する。槲の木は事實的に槲の葉及び槲の果實を有し、さうして例へば　毛樺の葉及び葫蘆を有しないといふ事を。此の故に、此の場合に吾人が發見する所の自然といふものゝ合法性なるものは、吾人に對しては、嚴密なる意義に於ける合法性ではない即ち必然的の合性法ではない。之は經驗的の規則、即ち自然といふものゝ一の「習慣」であるのである。

之と同樣に、或は之よりも尙一層多く、吾人は、自然法則からして、何故に槲の木に於て、葉の根本形態が、甲の所ではかやうに、乙の所ではさやうに變化されてあるか、何故に一の葉は小さく他の葉は大きく、甲は此の位置、乙は彼の位置を有するかを、歸結する事が能きぬ。此等に關しては、何等の經驗的の規則、即ち確固たる自然の習慣といふものは存しない。個々の葉の形態、大さ、位置といふものは、「偶然的」のものである。されど正しく斯かる偶然性も亦、かの確固たる習慣と同樣に、槲の木に屬するのである。

併し又之と同樣の偶然性は、吾人に對し、自然界の凡ての事物に屬する。例へば山脈は、偶然的に、玆ではかやうにかしこではさやうに高まり或は走り、又小河は偶然的に、玆ではかやうにそこではさやうに曲折するが如きである。して又、此等に於ても、偶然性を自然物に屬するやうに見えしむるものは、亦經驗たるのである。

されど彼れが如き一般的習慣及び此の如き偶然性は、次のやうな意義に於て自然物に屬する。曰く、吾人は、自然物及び自然連絡の本質からして、何等の程度迄此のやうなものが凡ての自然物に於て存せねばならぬかを理解すると。吾人は、如何に自然界に於ける合法性が、或る一般的條件、その中でも槲の木中に存する特殊なる「生活力」の或る一般的條件からして、その構成及び行動の或る確固たる根本形態を發生せしむる事が能き、又發生するに相違ないといふ事を理解する。さうして又之と同樣に、吾人は理解する。如何に、自然力の活動の無限なる多樣、樹木に於ける力、樹木に對して働く所の地の力、空氣及び光線の力、天候及び風、寒暖等が、各個の根本形態の分化の無限なる偶然性を發生せしむるを得、又發生せしむるに相違ないといふ事を。

五　自然界に於ける合法性と「自由」

凡て以上のやうな自然法則的に可解的なる自然物の屬性、その確固たる習慣、不可測の偶然性などは、自然物が人間化せられ、さうして一の個體に迄變ぜらるゝ事により、その美的意義を取得する。今や、かれが如き自然的の習慣といふものは、一個人の確固たる習慣と同樣に、それが活動すべき方法の恒久的の根本容狀となる。吾人にして此のやうなものを發見する場合には、吾人は亦「性質」といふものを語る。此の故に、樹木なるものは、かゝる性質をば、その確固たる形態上の習慣によりて有する。此の如き形態上の習慣は、樹木に於ても亦、活動し作業し生活をするに就いて其の內部的本質中に根據づけられた習慣であるのである。

さうして又、自然の偶然性なるものは、各個の人間の行動の、不可測にして何等の法則により理解されず又確固たる習慣の中に包括されない、方法であるやうに見ゆる。之は、自發的の衝動、法則を嘲笑する所の自由にして又移り氣のある活動のやうに見える。簡言すると、豫測、器械的合法性、自働性といふものに反對して立つ所の自由といふものゝ表出であるやうに見ゆるのである。

此の如き自由は、人間に於ては價値を有する。何となれば、之は、人格の豐富、多方面的感受性と興奮性、心力の無限なる活動の標識であるからである。之は愉快なるものである。何となれば、此の種の豐富は、一の愉快なる事柄であるからである。さうして又、人間の心力に均しい自然力の豐富は愉快なものである。隨つて、かゝる豐富を表現する所の自然力の自由不定にして、何等の規則により理解されない偶然的の活動も、愉快となるのである。

若しも吾人にして、かゝる人間化作用を離れ見るならば、自然界に於ける無法則性に關しては、無法則性といふ消極的のもの以外の何ものも殘存しないやうになる。又偶然性に關しては、個々に於て如何に「それが起生する」かを吾人が知得しないといふ消極的の事以外の何ものも殘存するに至らない。換言すれば「偶然性」といふ不可解にして粗野なる事實が殘るのであつて、而も斯かる事實自體は、決して美的に愉快なものではないのである。

ところが此の如く述べ來る事により、自然物を人間化する事の最終最高の目的を示す所の概念、即ち自由といふ概念は取得せらるゝのである。昔から言つて居るが、美麗なる自然は自由といふものゝ象徴である。さうしてそれが此の如きものであるが故に美である。かゝる自由といふものゝ中に、他の一切のもの、即ち活動、能働性の力と豐富、並に凡て此等のものに對し基礎となつて居る所の個體の統一性等は、包括されてあるのである。

第九章　自然への感情移入作用に對する補説

一　自然物の「意衷」（ゲジンヌング）

以上攻究し來つた所の自然への感情移入作用といふものは、尚多少の補説を要する。かの人間化作用なるものは、吾人に對しては、上述した所のものに據ると、もはや是若くは其のやうな吾人、行爲、堪忍等を事物の中へ感じ込むのではない。之に反し、之は一の個體性を感じ込むといふ作用である。かゝる個體性からして、各個の行爲及び堪忍の作用が發生する。かゝる個體性をば、吾人は各個の行爲及び堪忍の中に於て見る。さうして又之と共に、吾人は之若くはそのやうな性格を認める。即ち吾人は、自尊、輕快、威嚴、遊戯的狀貌等、簡言すると、活動したり感じたりする人間のあらゆる可能なる性格及び一般的方法と同質なるものを認める。而も此等凡ての事は、上述したものよりして、自明的必然性を以て發生するのである。

されど之に對しては、先第一に附言せねばならぬ。曰く、欲求及び行爲なるものは、吾人に於ては、啻に上述した意義に於ける「性質」から發生するのみならず、更に好意的若くは敵對的なる意衷といふものからも發生すると。さうして又、此の如き意衷をば、吾人は事物中に於ける欲求及び行爲に迄移植する。今や事物なるものはその働作又は官能から發生する所のものが直接に吾人又は他物に有益にして吾人自己の自由活動又は事物の自由働作に利益あるか、或は此等に有害であるかのやうに見ゆるかに從つて、甲若くは乙の意衷の帶有者として現出

する。吾人を保護し、又は事物を保護する所のものは、好意的意圖によつて指導されてそれ〴〵を保護しようとの意志を有するが如くある。更に吾人又は事物に自由活動の餘地を與ふる所のものは、それを與へる爲に相當の退讓をなすやうに見ゆる。愉快なる廣場は、一種特異の快感たる適意といふ感情を自發的に施與するやうに見ゆる。尙此等の事に關しては後にもう少し進んで語らう。

二　整形されない集塊

吾人が是迄取扱つて居つた所の「事物」なるものは、特定の限畫された事物であつた。吾人は、今、自然界に於て何等特定の形を有しないものをも攻究しよう。換言すれば、自然界に於ける所與物をば、かゝる特定の形から離れ見て、考察して見よう。

本來物的集塊なるものは、その形を離れ見るも、活躍的にある。之は、强弱、硬柔、彈力性等の如き、人間化作用をそれ自身の中に帶有する所の性狀を有する。吾人がかゝる集塊を取扱ふ所の一切の方法といふものは、此の種の性狀を吾人に告知する。卽ち集塊を取扱ふ各の仕方、その整理及び使用の各の種類の如きは、それである。更に他方に於ては、その集塊が他の事物に對する各の行動の如きも、之を告知する。

併し事物なるものは、かゝる行動の外に、光線及び空氣に對する行動、卽ち透徹、澄明、又不透明、薄光及び光輝、發光等の性狀をも有する。

尙此の外に、他のものも有する。吾人は集塊が之々の音を發するのを聽く。さうして吾人は、之よりして直接に、特定の內部的本質を聽き取るやうに思ふ。更に又、香に於ても、集塊といふものゝ內部的本質が、發出し啓示せらるゝやうに見ゆる。

最後に、吾人は集塊に於て直接に、一の內部的組織を見る。例へていふと、精若くは粗なる構造、同種なる部分の連絡の甲若くは乙の方法、異種なる部分の交代の甲若くは乙の方法の如きである。吾人は木材に於て、種々の纖維及び木理の付け方等を見る。さうして吾人は此等凡てのものからして、自然力といふものゝ異種且つ精緻にして、結極無限に精緻なる活動の推想を取得するのである。

三　諸種の「元素」

狹義に於ける集塊、卽ち大なり小なりの堅さの集塊に對し、液體樣にして何等特定の形及び區劃を許さない所の「元素」といふものが存在する。水及び雲、空氣及び光線、影の如きはそれである。更に寒及び冷も此の中に附加され得る。

けだし水の透明なる深さ、緩徐なる流れ及び壯大なる潮流、浪の輕易爽快なるうねり、小河の潺湲、怒れる海の動搖、怒號、泡沫等に就いて、今事々しく語る必要はない。さうして又、此等の中に於て、如何に無限的多樣にして特異なる自然生活といふものが、表現せらるゝかを喋說する迄もない。

さうして此の如くして、「諸元素」の生活といふものに就いて語るといふ事は、根本に於て一般的に無用である。かの雲なるものは、徐々に進み、輕く浮び、重く懸り、疾走したり威嚇したりする。さうして此等の事をば、雲

は、その中に存する力の爲になすやうに見ゆる。尙又、此等の中に於て、上述の性質と意衷も、存現し居るやうに見ゆる。

さうして空氣といふものは生活的元素である。之は二重の事を意味する。第一には、それが活躍的にあるといふ事、卽ち己れ自らの內部的力から、之々に運動し、穩かに若くは荒くあり、沈靜、若くは激情的の意志によつて充たされてあるといふ事を。第二には、之が吾人に生活を施與するといふ事を。卽ち之によりては、可感的の生活、身體的感情及び精神的感情の可感的增進、簡言すれば、吾人を圍む空氣を呼吸する事から來るやうに見ゆるが如き、吾人の全體的生活感情の顯著なる增進といふものが、意味される。空氣なるものは、恰も生活を放出し、之を自發的に施與するやうに見ゆる。之は吾人に對し、此の如き好意的意衷を以て充たされて居るやうに思はれる。

人によりては反對するかも知れぬ。空氣の好意的意衷の如きは得て認知する事は能きないと。之に對しては吾人は答へよう。吾人を圍む空氣中に於て、好意的の人間の意衷に比較すべくある所の或るものがあるかの如く吾人に取りてあるといふ事に就いても、吾人は少しも「認知しない」と。

さうして空氣と同樣に、熱も吾人に生活を附與する。之は啻に、吾人の身體の表面を暖にするのみならず、吾人を內部的に暖める。卽ち吾人の全體驗に對し、吾人が內部的に暖められてあると言ふ時に吾人が常に想起する所の波打といふものを與へる。

次に影の冷氣も吾人を爽快にする。さうして之とて、外部的と同時に內部的に之をなす。吾人は影の下に於ては、內部的により多く自由、活潑、元氣、簡言すれば「より鮮活」になる。

又光線も、啻に生活を施與するのみならず、或る方法に於ては、吾人に全世界を與へる。之は、一切の可觀的のものをば可觀的になし、之により、吾人をして可觀的事物に關する享樂を遂げしむる。

ところが之に反對に立ちて、暗黑なるものも亦、吾人に對し特殊の美的意義を有する。併し玆では、吾人は、「暗黑」といふものを以て、凡てのものを隱蔽する所の暗夜を意味せしむるのではない。之に反し、日中が隱蔽して居る所の星界の驚異を顯示する所の暗黑を意味する。その中でも、事物を覆ひその凡俗なる判明を消滅せしめて之をば全體に迄結合し、さうして斯かる全體の中に於て無限なる充滿を吾人に推想せしむる所の暗黑の如きは玆に意味せしめようとする所の暗黑の主要なるものなのである。

四　下等感覺の美的低價

右の如く述べ來るといふと、下等感覺の美的意義といふものに關する問題が、同時に提起せらるゝのである。疑ふ迄もなく、美といふものは、先第一に、目と耳とによつて媒介される。之に對しては特に二つの理由がある。

第一、此等高等感覺の內容は、豐富なる構成に迄結合せられ、かくて大なり小なり豐富なる精神的內容の帶有者となる事が能きる。然るに下等感覺の內容に於ては、此の如くなる事は能きない。香とか味とか溫度とかは、空間的構成に迄結合もされなければ、又その時間的繼起に於て、人間の談話若くは音樂的藝術品と比較し得べき一の全體といふものを發生せしめもしない。

勿論味と雖も、豐富なる變化を以て相互に繼起する事は能きる。されど此の際、音の協和及び不協和の種々の段階に相當する所の內部的統一性及び反對性、類似性及び異他性が存して居て、此等が、諸種の味をば、統一的にして同時に大なり小なり豐富に分化せられ、さうして已れ自らの內部的合法性に基いて形成せらるゝといふ、全體的形相に迄、集括するやうな事はない。

此の際吾人は、有害なる誤解を防ぐ爲に、尙暫らく此の事に立止まつて述べて見よう。假りに或る食事が巧に按排されてあり、相互に繼起する所の食物は、相互によく「適合」するとする。之に就き、人によりては思認するかも知れぬ、此の中には、旋律又は美しき色の結合に比較し得べき或るものが存すると。されどかゝる場合の「適合」とは、何人も知る如くかういふ事を言明するのである。前行する所の食物は、常に後續する所の食物をより美味になし、之に對する食慾を刺激し、或は保持する。換言すれば、之は、後者に對して味官を用意してあるやうにならしむるといふ事を。

ところが斯かる「適合」なるものは、旋律の相互に繼起する所の音の相互の適合、又は或る美しき色の集合中の並列的に與へられたる個々の色の相互の適合とは、根本的に異なつて居る。此等の場合に於ては、吾人は、音又は色を統覺的に相互に附加しさうして一の全體に迄結合する事により、かゝる全體の純然たる觀照中に於て、正しくかゝる全體といふものゝ內部的一致或は統一性といふ感情を取得するのである。此の種の全體は、かゝる總括的觀照中に於ては、それ自身の中に於て內部的に適合して居るやうに吾人に見ゆる。之は、その質の爲に、かゝる內部的統一性をそれ自身の中に帶有する。

併しながら、食物の愉快なる繼起に於ては、此の如き事はない。卽ち總括的觀照に於ては、繼起する味からの全體といふものは、吾人に取り、それ自身の中に於て愉快なる內部的統一性の帶有者と見えぬ。之に反し、たゞ繼起する所の各の味が、それ自身として愉快である。何となれば、今や味官といふものがそれ等に向つて可能的に用意されて居り、卽ち可能的に少く鈍くされてあるからである。之を簡言すると、各個の味が吾人に愉快である。されど全體といふものは、全體としては、卽ち總括的觀照の統一的對象としては、之と異なりたる何等愉快の根據をその中に帶有しない。

或は玆に述ぶるものゝ反對例として、更に、物體の一の形相を與へ得る所の觸覺といふものが擧げらるゝかも知れぬ。されど之に於ても、尙、第二のもの、卽ち感情移入作用に對する誘因といふものは缺損するのである。かの目視された形は、直接に、運動に對する衝動、卽ち「內部的模倣」に對する衝動をその中に帶有するとはいへ、觸覺に於ては、吾人の知り得る限りに於ては、此の如き事はない。之をより精密にいふと、事物に對する觸覺が與へる所の空間的形相の純然たる觀照中に於ては、直接に、內部的「模倣」に對する「本能的」衝動といふものは存在しないのである。

勿論之に關しては、結局する所、盲人のみが全然確實に決定する事が能きる。有眼者に取りては、一の事物、例へば彫像の觸覺は、或る形のより判明なる形相を與へる。けれども之は、單に視官を支持輔助するものたるに過ぎない。

されど凡て此の如くあるといふ事は、下等感覺の內容が、事物の美的印象に對し一の貢獻をなし得るといふ事

を妨げない。此の種の內容は、吾人が此の內容中に於て直接に吾人自らを體驗し得る程度に於て、かゝる貢獻をなす事も能きれば、又爲すに相違ないのである。

併し此の如き「感情移入作用」に迄は、吾人が可觀的のもの及び可聽的のものへの感情移入作用に到達し得るが如き方法に於て、到達する事は能きぬ。

吾人は、吾人の身體に對し、一の可觀的の形を與へたり、又は音聲を發したりし、さうして兩種の方法により吾人の內心を表現する。簡言すると、表出運動及び表出音聲なるものが存在するのである。之に反し、吾人は、之と同一の方法に於て、直接に吾人の內心を、香、味、溫度等により、表現する事は能きぬ。世に、香の「言語」味の「言語」等はないのである。又特定の內部的現象からして、特定の香、味、溫度等は發生しない。

さうして假りに此等が吾人に對して發生するとするも、卽ち吾人自らが之を感ずるとするも、尙之は、他人により、同樣的に感ぜられないのである。

之を簡言すると、香や味や溫度は、一方に於ては、吾人自らの中に於て位置を取得しない。さうして他方に於ては、他人に對し、吾人の身體の可觀的の形又は運動、並に吾人の音聲が有するが如き意義を有しない。此等は、吾人の中に於ける現象、特に吾人の情緒、又は吾人の內部的興奮の一般的方法と同種的の連絡に立たぬ。さうして吾人の運動や音聲の如く、直接に他人に傳達をされない。而も此の如く述ぶる事により、下等感覺と高等感覺との內容の眞に原理上の反對といふものは說示されたのである。

五　下等感覺の內容への感情移入作用の可能

以上の如くあるよりして、下等感覺の內容への感情移入作用には、唯一つの可能が殘存して居る。卽ち下等感覺の或る印象は、啻に吾人の感官及び身體の上に働くのみならず、同時に、吾人の中に於て、かゝる身體的影響を超越する所の、大なり小なり一般的にして包括的なる心的の生活感情といふものを、喚起するのである。さうして斯かる心的の生活感情は、下等の感覺的印象に對して密接に結合し、爲に吾人は、若しも該印象に迄觀照的沈潛をなすならば、直接に之を體驗し、さうして直接に此の印象の中に存在し、若くは此等により「好意的」に施與されたものと、思認するに至るのである。

ところが此の如き事に關しては、吾人は既に前に語つた。吾人は、寒や冷が、吾人の全體的の人格、吾人の心的存在の全體的方法の上に働くといふ事を既に述べた。之を例へていふと、花の香氣なるものは、啻にかゝる香氣たるに止まらない。尙此の上に、之を超越する所の復活的の效果を有する。之は、吾人を爽快にし、さうしてより一般的の快感を喚起する。更に、美しき果物の味に關しても、之と同樣の事を言ふことが能きる。

さうして今吾人が、かゝる心的の生活感情をば、直接に、寒又は冷、或は一物の香又は味から發生し、之に迄結合せられ、此の中に存在するものとして體驗すると假定する。換言すると、吾人が吾人の注意をば、吾人と異なる事物に向注せしむる事により、吾人の全體的の存在に於て復活されて吾人を感じ、かくて事物の純粹なる觀照中に於て此の如く吾人を感ずると假定する。かゝる場合には、當該事物の中に、美又は美の一要素が存するの

である。

されど、此の如き事が如何なる程度迄起生し得るやとの疑問が、次に起る。吾人が、之を例へていふと、森の中をば、觀照的でなく、感覺的現實に於て通ると假定する。吾人はかゝる際に、森の冷かさや香を感覺し、さうして之により、吾人の存在に於て、增進、復活、新鮮、爽快にされて吾人を感ずるとする。次に吾人は今、かゝる生活或はかゝる新鮮をば、森から來り、森の生活の一要素として感じ、さうして此の際吾人の現實の自我を忘却するとする。かくて又、吾人にして單に吾人の思想を以て、森並にその生活の中にある事により右の如く感ずるならば、然る時には、その冷かさや香は、是森の美的本質中に於ける要素となる。此等は、森の中に宿り、さうして吾人により直接に感ぜられたる其の良性及び卓越の表出となる。之は、その內部的本質を吾人に對し直接可體驗的に告知するに就いての、森の一方法といふものになる。

然かはいふものゝ、森に迄の此の如き內部的沈潛、吾人現實の自我の彼れが如き忘却といふものが、成功せぬといふ危險がある。詳言すると、吾人は、森の冷かさや香が吾人に與ふる所の生活や增進された活動性や新鮮をば、森の生活の一要素として體驗しないで、之に反し現實的にして、例へば散步する所の人格或は疾走の後に爽快にする所の冷さを要する所の人格、若くは香を意識的に吸入する所の人格に裨益を與へ、さうして森によりかゝる人格に現實的に施與された或るものとして體驗するといふ虞があるのである。更に他語を以て言ひ表はすと、此等凡てをば、吾人の身體から發生し、冷かさや香が吾人の身體に及ぼす效果に於て根據づけられたもの、簡言すると直接に吾人の身體に迄結合せられ、さうして唯間接に森に迄結合されたものとして體驗するといふ危險が存するのである。

されど此の如き事が起生する程度に於て、施與された生活といふものが、もはや森の生活中に於ける要素ではなく、之に反し森の生活と異なりたる吾人自らの身體生活の享樂に於ける一要素となるのである。而も此の如くなる限りに於て、森なるものは、今や美ではない。之に反し、右の如き身體に迄結合された吾人自らの生活の享樂に對して有益なるものとなる。之は唯、他の或るもの、卽ち吾人の身體及び身體生活をば、特殊の方法に於て享樂すべき機會を吾人に與ふる所のものたるに過ぎない。併しながら美といふものは、感情移入作用に根據づけられてある。さうして感情移入作用とは、吾人自らの運び去られてあるといふ事である。吾人が美的事物の中に觀照しつゝありさうして吾人を感ずる限りの外は、吾人から吾人が思想的に解放されてあるといふ事であるのである。

以上のやうな危險を除外するには、結極唯一つの手段がある。卽ち吾人が、下等感覺の內容が包有する所の生活を美的に享樂する爲には、感覺といふものを棄却せねばならぬのである。吾人は之をば、遠距離から、卽ち單なる表象に於て享樂せねばならぬ。

之を例へていふと、吾人が森の中を逍遙すると假定する。但し事實的ではなく之に反し森を斯く眺め込むとする。さうすると、吾人は冷しき影を視る。或は美しき果物を視、又形や色に迄經驗上香を結合する所の花を視る。而も此の如くする事により始めて、吾人は、確實に吾人の現實の自我から解放せらるゝのである。吾人は今森の中に唯觀照的に入り居り、さうして冷かさの中に觀照的に存在し居り、さうして吾人の觀照中に於て彼のやうな

復活的效果を體驗する。吾人は吾人が視たものゝ中に沈潛してある事により之を感ずる。隨つて之をば、唯森の中に於て、森に屬する或るものとして感ずる。之と同樣に、吾人は、美しき果物の復活的效果をば、果物の中に於て、それ自らの復活性、即ちそのやうな特異なる活躍性として感ずる。吾人は此の如きその本質と同感的に吾人を感ずるのである。

下等感覺の內容の以上の如き美的享樂は、結局藝術に於て最も確實に、吾人に對し許容される。藝術に對しては、吾人が吾人の現實的自我をかゝる內容と關係に立たしむるといふやうな危險は存しないからである。藝術なるものは、此の種の內容をば、常に表象された樣式に於てのみ吾人に與へる。吾人は寒や冷を視ない。又果物の美味を味はひつゝ感覺もしない。之に反し此等をば事物に於て視るのである。

されど、此の如き點、即ち視覺的形相中に下等感覺の質が直接に與へられてあるといふ事に關しても、各個の感覺範圍の間に著るしき差異がある。吾人は前に香といふものを擧げた。香に關しては、右の點は都合が惡いやうに見ゆる。即ち吾人は、描かれたる薔薇に於て、吾人に知られたる薔薇の香及びその復活的效果が表現されてあるといふ事を發見する事は能きぬ。之と同樣の事は、味に就いても成立する。吾人は前に果物の多液の感覺を擧げた。けれども此の感覺は觸覺程の味覺ではない。

之に反し、觸覺上の質は、高度に美的觀照をなす事が能きる。觸覺上の質とは、例へば織物や敷物や窓掛や衣服の硬軟粗滑等の如きである。此等の質をも吾人は視ない。されど吾人は之を織物に於て直接に視る。さうして吾人は同時に、柔かなる物の觀照に於て、直接に、それが、その柔軟の爲に、接觸する事によつて施與する所の快感を有する。或は又、滑かなる物の觀照に於ては、その滑かさによつて吾人に可能にさるゝ所の滑走の自由といふ感情を得る。更に、堅硬なる物の觀照に於ては、威嚇的の攻勢、吾人の適意に敵對物といふ感情が起る。尙此等の事に就いては後に再び述ぶる事にする。

更に、觸覺に對しては、直接に、前特に述べた所の溫と冷との感覺が附加され得る。此等は常に、吾人が最も多く事物に於て視る所の感覺に屬する。されど之とて、唯特定の方法に於てゞある。即ち吾人は影に於て冷、日光に於て溫を視る。さうして此の際吾人は、溫といふものゝ活躍化作用及び冷といふものゝ復活的作用を感知するのである。

六　下等感官の表象された感覺

以上に於ては、下等感官の內容の美的意義に就いて論究され居つた。されど此の如き問題とは、かゝる內容が感覺されるといふ事の吾人の意識の美的意義に關する問題が、最も判明に區別されねばならぬ。吾人は前に、一の事物に於て視られた溫や冷の事に關して語つた、吾人は、一の現實的人間又は藝術的に表現された人間に於て吾人が視る所の溫や冷の感覺に就いては語らなかつた。言ひ換へると、可觀的に溫くあつたり又可觀的に冷くあつたりする所の現實的人間又は藝術的に表現された人間に就いては語らなかつたのである。

されど此の事に關し吾人は一言を以て立入つて見よう。さうすると、先第一に次のやうな事を高調すべくある吾人が溫くあつたり又は冷くあつたりする所の人間に於て直接に視る所のものは、溫又は冷ではない。之に反し

如何なる氣分をその人間が起して居るかの方法、即ち內部的興奮、或は彼れが溫又は冷に接して如何に感ずるかの方法、即ちその適意又は不適意である。隨つて此の種のものゝみが美的意義を有し得る。ところが美的事物の內容なるものは、いつでも直接にその事物の中に存する所のものゝみである。彼れが如く感ずる方法が、溫や冷の感覺によつて制約されてあるといふ事などは、是單に附加された表象である。かゝる表象は、その時々に應じて大なり小なり判明に現出する。併しながら斯くなるに於ても尙、此の種の表象自體は、即ち吾人が直接に視、且つ同樣的體驗をなす所の、個人に及ぼす效果が別にされては、全然無意義、且つ無印象性のものである。之は既に日常普通の生活に於ても斯くある。さうして美的印象に對しては益〻さうである。如何なる場合に於ても、之は美的事物には附屬しない。之は、並存する所の省察作用といふものゝ產出するものなのである。

更に、或る人間が溫又は冷の感覺を有するといふ表象に對し、現實的人間又は描出された人間の痛感覺、嘔氣の感覺、肉慾の感覺の表象も、同樣の關係に立つ。されど此等に關しては附言されねばならぬ。此等の感覺の內容は、或るものが此のやうに感覺するといふ印象を吾人が有するといふ方法に於ての外は、吾人の觀照の事物に附屬したり、又は事物の觀照中に於て吾人に對して存立する事は能きぬと。かの溫や冷に於ては、二つの可能が存する。一は、吾人が或る事物に於て溫や冷を視るといふ事であつて、一は、人間が溫又は冷を感ずるといふ事をその人間に於て視るのである。けれども玆にいふやうな感覺の場合に於ては、唯一つの可能のみが存する　即ち或る人間が痛や嘔氣や肉慾を感覺するといふ事をその人間に於て視るといふ事である。

尙又、此の場合に於ても、吾人が人間に於て直接に視る所のものは、單にかゝる感覺に對する反動、即ち該感覺が彼れを可觀的に轉入せしむる所の情緒或は氣分である。同時に又、吾人は、嘔氣の感覺に於て最も判明に、感覺されたもの、即ち感覺內容の表象を有する。併し此の際に於ても、再び次の言明が成立する。感覺內容自體即ち此の如く質的に規定されたものとしては、それが人間に及ぼす效果又はその內容に屬する感情的要素を別にするならば、吾人の表象に對し全然無意義なる事柄であると。此の故に、かゝる內容の表象は、美的に全然無關係のものである。さうして之と共に吾人は又附言せねばならぬ。その狀態がどのやうにあるにもせよ、如何なる場合に於ても、かゝる表象された感覺內容といふものは、美的事物には附屬しないと。

七　美的事物と吾人の「有機感覺」

右に於ては、他人が感覺する所の內容が吾人により單に表象されるといふ事が假定されあつた。ところが、或る者が玆にいふ感覺の一を有するといふ表象と、吾人自らが此の感覺を有するといふ事とは、全然異なりたる事柄であるのである。そこで若しも或る藝術品にして、吾人の中に於て性慾感覺又は嘔氣感覺を起さしむるならば換言すると、或る描出された人間によつてそのやうなものが感覺されるといふ表象が、それに該當する所の吾人自らの感覺、又はその端緖、若くはその基礎に迄變ずるならば、然る時には、吾人は全然美的觀照の外に出づる事になる。此の如き吾人自らの感覺といふものは、常に、吾人の現實的にしてさうして藝術品に對立し居る所の自我に屬するのである。かゝる感覺は、該藝術品を美となす事も能きなければ、又醜となす事も能きない。何となれば、美と醜との兩者は美的概念であるからである。之は單に藝術品を破壞する。さうして若しも此の如き感

覺を起す事が、吾人の個人的性向の致さしむる所であるならば、さういふ吾人に對して藝術品は破壞される。更に若しもそのやうな事が該藝術品の性質中に存するならば、客觀的にそのやうになる。右の如き感覺は、結極、美的觀照の事物の代りに、感官的に嫌忌すべきものを現出せしむる事になる。

之に關連して、吾人は最後に尙一度、運動感覺の事に就いて述べて置かう。

吾人が今横行濶歩する所の或る人間を見るとする。此の場合に於ても亦、吾人が該人間に於て視る所のものは彼れが感覺する所のものではなくて、その横行濶歩である。卽ちかゝる行爲、內部的の意志的行爲と自由、輕快、確實、その自尊の樣子等である。さうして之に對して、唯副貳的に、筋肉や腱の緊張、皮膚の引張り及び壓縮、關節の摩擦等、簡言すれば右の行爲より發生する所の末端的體驗といふものが、附加される。けれども旣に述べたる如く、一の運動を實行する所の人間を觀照して居る際には、吾人は通常、かゝる表象に就いて少しも意識しない。各の場合に於て、此の如き表象は、遙かに微弱になつて居る。さうして若しも之が、横行濶歩者が吾人に與へる印象中に於て何等かの方法に於て併せて意識されようとも、之とて前述せる如く、決して吾人の感興の對象とはならない。吾人一切の感興なるものは、右に述ぶるやうな內部的行爲、その自由、輕快等により占領されて居る。さうして横行濶歩の美的觀照に於ては、事實關係は全然此の如くあるのである。

されど此の場合に於ても亦、末端的體驗の表象とは、それの自己體驗、卽ち筋肉の緊張、關節の摩擦等の吾人自らの感覺なるものは、全然異なりたる事柄である。吾人は旣に知得した。身體的運動の目視は、吾人をして、外部的模倣をなすに至らしむるといふ事を。かゝる場合には、吾人の中に於て、該當する所の末端的作用が解發される。さうして恐らくは、此の目視の際に於ては、吾人の身體の甲部若くは乙部に於ける何等かの緊張といふものは、決して缺損しないであらう。此の如き狀態は、自然物、例へば昂然屹立する所の岩の目視に於ても現出する。

されど吾人にして、彼れが如きものに留意し、かくて內部的に、かゝる場合に吾人に發生する身體的感覺に吾人を向注せしむるならば、然る時には、吾人は、正しく、かの、藝術品に接して嘔氣や痛を感覺し之により多少占領されてある時と同樣に、一切の美的觀照の外に出づる事になる。右のやうな筋肉運動上の感覺も、全然吾人の現實的自我の起すものであり、之に對する快感は、吾人の身體の中に起る現象に對する快感であるのである。

その實をいふと、旣に述べたる如く、吾人は此の如き身體的體驗に對して、何等の快感を起す事は能きない。吾人は唯、吾人の强力、自由、輕快、內部的なる行爲に對してのみ快感を起す。さうして斯かる快感は、吾人が此の種の行爲を美的事物の中に於て體驗する限りに於てのみ、美的のものである。若しも吾人にして、之をば同時に吾人の現實の身體的體驗に關涉せしめ、かくて例へば、直立する岩に面し、吾人自らの事實的の外部的直立、卽ちかゝる外部的模倣に對し、快感を起すならば、もはや吾人は、一部分美的事物の外に吾人を向注せしむるやうになる。吾人はもはや、全然此の事物の觀照をなして居ない。吾人は觀照しながら、同時に吾人をば、かゝる現實的にして此の所に立つて居る人格に心を向くるやうになる。隨つて吾人の快感は、岩に對する純粹なる快感ではない。岩によりての吾人の內部的直立が、岩の美的本質を構成すると同樣に、岩に面しての彼れが如き外部的直立は、岩に屬しないのである。それが岩に屬しない事は、ちやうど、岩又は彫像又は繪畫の外圍に存す

る所の溫や冷、若くは吾人が此等事物の觀照前に身體的に骨折る時又は飲食を忘却したる時に起す疲勞又は飢渴の感覺が、此等の事物の美的印象に屬しないと同樣であるのである。

吾人は切に希望せざるを得ない。美的觀照の中に何等かの方法で觀照者の身體的感覺といふものを混入する所の凡ての人が、務めて嚴密なる思索を試みるといふ事を。一つの事物の美といふものは、永久に、かゝる事物の美である。さうして彼れが如き吾人の身體に屬する所のものゝ快感ではない。美學上の理論は、勿論その偏見よりして、吾人身體の狀態と、美的事物及びその內容とを混同する事がある。されど事實的の美的觀照に於ては、溫と冷、飢と渴、疲勞或は性慾上の興奮、又は此の外の、吾人の身體に於て發見さるゝ所の「有機感覺」の內容等は、吾人の前に存立する美的事物の要素ではないと、吾人は信ずるのである。此の故に、吾人は、かゝる身體的狀態の快、或は不快をば、事物の美の中に計入したり或はそれから控除したりするといふ事を想出しない。吾人は、玆では自我、かしこでは觀照された事物といふものを判明に認め且つ知得するのである。

八　「氣分」と氣分的感情

吾人が上に語つたやうな「流動的」の元素、卽ち水や雲や空氣や光線や影等の如き一般的の自然元素なるものは、その特異なる性質の爲に、尙特殊の美的意義を有する。卽ち此の如き元素は、是氣分といふものゝ特殊の帶有者であるのである。さうして此の如くあると共に、吾人は感情移入作用の特に新奇なる種類に接するのである此の如き種類の感情移入作用は、特に重視されねばならぬ。

抑も氣分とは如何なるものであらうか。吾人は答へよう。氣分なるものは、それ自體としては一の感情ではないと。之に反し之は吾人の一の心態である　卽ち吾人が之々に調子附けられてあるといふ事のである。さうして此の如き調子附けに對し、直接なる意識表出として、始めて一の感情が結合される。此の如き調子附け卽ち氣分に伴ふ感情をば、吾人は氣分的感情と稱する。

ところが此の如き氣分的感情なるものは、感情の特異なる種類の實例である。一體感情なるものは、一の場合に於ては、內容的に規定された體驗に附着し、此の中に於てその對象を有する。かゝる感情をば、吾人は內容的に或は事物的に規定された感情と稱する。之に對して、氣分的感情は、異なりたる種類のものとして存立する。之を例へていふと、吾人が一の螺線を觀照し、之に對して快感を起すと假定する。此の如き感情は、決して氣分的感情ではない。更に又、一の包括的全體に迄、全體として、或は全體的に、關涉されて見ゆる所の感情も、之が故に直に氣分的感情たるのではない。かくて全體に於ける人間身體の觀照から、卽ちその全體的の形、構造部分の關係等から、吾人に發生する所の感情は、何等の氣分的感情ではない。否吾人が人間身體の觀照から取得する所の印象なるものは、氣分と少しも共通的のものを有しない。此の故に又、造形藝術なるものは、凡ての藝術の中で、氣分に關係の最も少い藝術である。かゝる藝術に於ては、正しく、感情なるものは、最高度に、事物的に規定された感情の性質を有する。さうして此の際、吾人が人間の身體或は彫像をば、部分的に觀照しようと將た全體的に觀照しようと、そは少しも影響を及ぼすに至らないのである。

吾人にして、氣分なるものが如何なるものであるかを理解しようと欲するならば、吾人は、先第一に、吾人の眼

を右と異なりたる方角に向けねばならぬ。吾人は始めに、日常生活に於ける氣分に留意して見よう。吾人は、例へば甚だしく不機嫌ならしめ、都合によると慚愧に堪へないやうにせしむる事件に遭逢する事がある。けれども次になると、吾人の吾人は、吾人の注意をば、かゝる事件に向注せしめないで、此の事件と少しも關係のない新しい體驗に向注せしむる。

併しながら、かの慚愧に堪へざらしめた所の事件は、吾人の精神中に於て後迄も働く。之によりては、右の新しい體驗は、內容的に變化される事はない。卽ち吾人は、正しく、吾人が不機嫌と慚愧とを感じない時に體驗する所のものを體驗する。けれども此の新しいものを體驗する方法に至りては、變化をされる。卽ち新體驗を把捉する自由と沈着、そのものに對する吾人の打任せといふものは、攪亂をされるのである。今や心的現象は、內容的に變化される事なしに、吾人の中に於て異なりたる有樣に經過する。卽ち減少された自由及び沈着を以て經過する。さうして心的現象の此の種の變化された經過法、かゝる經過の特殊の韻律、吾人の心的興奮狀態の全性質等が、正しく氣分であるのである。

さうして此の如き氣分に對して、氣分的感情といふものが、附着する。氣分的感情なるものは、心的現象の右の如き經過、或はそれの一般的韻律の中に、その直接の根據を有する。之は、その根據をば、內容的に規定された現在の體驗の中に有しない。之は又、前行する所の不機嫌或は慚愧の體驗中にも、之を有しない。否かゝる體驗自體は、不機嫌或は慚愧の感情を起さしめた。さうして斯かる感情とても亦、氣分的感情ではないのである。

而も此の如くあるが故に、氣分的感情なるものは、內容的に規定された現在の體驗に關涉されてゐないやうに吾人に見ゆる。現在の體驗なるものは、吾人に取りては、一個並に全體として、一の特有なる感情の帶有者である。さうしてかゝる感情とは、氣分的感情は區別されてある。之を例へていふと、吾人に或る美なるものが提供さるゝならば、吾人は、氣分的感情をば、此のものゝ計算の中に入れない。吾人は言明するのである。吾人が此の場合に見又は聽く所のものは、それが他の場合に於けるが如くに美である。しかし吾人は之を享樂する氣分に於てはあらぬと。之を簡言すると、吾人は、甲若くは乙の體驗ではなく、それに加はる所の氣分、卽ち體驗を體驗すべき特殊の方法といふものに、氣分的感情が關涉するといふ事に就いての直接なる意識を有するのである。

或は又吾人が特殊の身體的狀態に於てあるとする。卽ち吾人の身體生活が、特に自由、輕快にして力强く經過し、興奮されたものであるとする。かゝる場合には、吾人の心的生活全體も、より自由且つより輕快に經過する此の場合に於ても「氣分」なるものは、各個の體驗から成立しない。之に反し正しく心的生活の全經過法から成立するのである。さうして再び之に該當して、吾人は、此の場合には快感である所の氣分的感情をば、個々の體驗でなく、之に反し氣分に迄關涉せしむる。假りに吾人にして、何が吾人を今左程快くするか、或は如何なる特殊の愉快なるものに吾人が遭逢したか又はするかを問はるゝならば、吾人は、それは之でも又かれでもない。吾人は唯正しく薔薇のやうな氣分に於てあるからと、答ふるのである。

此の如き事實關係は顯著なるものであつて、さうして心理學者や美學者の特殊の留意を價する。試みに次の如き事を思念すべきである。精神生活の彼れが如き一般的經過法といふものは、吾人の意識に浮んだり又は一の形

相として對立的に現出し得べき或るものではない。卽ち吾人が知覺したり或は表象したりする山又は家の如きものでもなければ、又吾人の意志的働作の如きものでもなく、更に特定の體驗に結合された忿怒の如き情緒でもないのである。成程吾人は、氣分をば、一般的名稱を以て呼ぶ事は能きる。けれども之をば、表象を以て言ひ表はす事は能きぬ。之は定義したり分解したりする事の能きないものであり、又流動浮泛的にして不可說なる或るものである。さうしてそれかというて、吾人の感情は意識的に之に關涉されてある。吾人は直接に知得するのである。氣分的感情なるものは、吾人が體驗し表象し思惟したりする所の甲若くは乙に關涉せず、之に反し、現在の心的生活經過の一般的方法、簡言すれば氣分といふものに關涉されてあるといふ事を。

九　自然界に於ける氣分

さて吾人が美的に觀照した事物中に於て發見する所の氣分、並に、かゝる氣分に對して吾人が有する所の氣分的感情なるものは上述の如きものである。之を例へていふと、一の景色中に於て、吾人に對して存する所の氣分並に、かゝる「氣分的景色」に面して起す氣分的感情といふが如きである。

此の種の氣分の帶有者たるものは、上述したる如く、先第一に、空氣、光線、影、暗黑、溫、冷、雲、水等である。此の事は、吾人にして、若しもかゝる自然元素が吾人に對し何であるかを考慮するならば、理解する事が能きる。卽ち此等は、特定なる個々の生活官能の帶有者でなく、或は帶有者である許りでなく、之に反し、吾人の全生活々動を增高し激勵し促進し緩和し解放し鎭靜し抑制し緊張し弛緩せしめたりする所の一般的の復活的效果の帶有者である。ところが此等凡てのものは、各個的の體驗及びかゝる體驗の連絡ではない。之に反し上述したる意義に於ける氣分であるのである。

かゝる氣分は吾人の中に於て發見される。之は吾人の氣分である。されど之は、かゝる生活元素が存現支配し居る所の自然界から來る。さうして此の如くして、氣分なるものが自然界の中に存するやうに見ゆる。吾人は、直接なる觀照に於て、此の氣分が彼れが如き自然元素に迄結合されるのを發見する。

さうして此の場合に於ても亦、氣分的感情は、その發生の根據卽ち氣分に該當して、個々のもの、特に個々の形、並にその中に表現される所の內容的に規定された生活々動に迄、關涉されてあらぬ。それかというて又、個々の生活々動を特定の方法に於て總括する所のものとしての全體に迄も關涉して居ない。此の如くある事の代りに、之は、かゝる全體とも異なつて居る所の或るもの、卽ち不可說なる方法に於て全體を潤飾し抱擁する所の或るものに迄關涉する。吾人は此の場合に於ても、かゝる「或るもの」をば、一般的名稱を以て呼ぶ事が能きる。卽ち吾人は、氣分をば、愉快、憂鬱、晴朗、嚴肅、陰鬱等と呼ぶのである。されど吾人は、此の如き或るものを言ひ表はしたり、分解したり、定義したりする事は能きぬ。之は、吾人に對し、感情並に次のやうな伴隨的意識の樣相に於てそこにある。その意識とは、それが、或る一般的のもの、知覺された全體の中に存在しそれかというて不可說、不可規定的にあるものに關涉し、景色中に存する甲若くは乙のものに關涉しないで、景色の全體中に於ける生活の一般的鼓動に關涉するといふ意識である。

かゝる氣分の特殊の美的意義といふものは、吾人が、之に於ては、特殊の方法、卽ち特定の方向に於て活動す

るものとしてゞはなく、之に反し甚だ一般的、包括的に、事物の中に吾人を感じ込むといふ點に存する。されど他方に於ては、此の如き事實關係は、彼れが如く不確定流動的にして具體的內容を缺損するといふ點に於て、その消極的の裏面を有するのである。

昭和三年五月二十日印刷
昭和三年五月廿五日發行

リップス
美學大系
第二分冊

人間と白然物
定價金八拾錢

著作者　稻垣末松
發行者　森山讓二　東京市神田區表神保町二番地
印刷製本者　山縣純次　東京市神田區今川小路一ノ一
印刷所　山縣製本印刷株式會社

著作權所有

發兌　株式會社　同文館
東京市神田區表神保町二番地
電話神田九三三・三〇八〇番
振替口座東京一三五番

5 Z 8.